

日本ルワンダ学生会議  
第**13**回本会議 活動報告書

2015年7月31日(金) ~ 8月21日(金)



## はじめに

この度は、本書「日本ルワンダ学生会議 第13回本会議 活動報告書」を手にとって下さり、誠にありがとうございます。本書は2015年7月31日から8月21日までの22日間、ルワンダ人学生4名と日本人大学生15名が共に行った事業、「第13回本会議 日本招致事業」の活動内容をまとめたものです。

唐突ですが目に浮かべてほしいものがあります。綺麗に清掃された首都を車が走り、市場に出回る食材の価格を携帯で調べる。国会議員を占める女性の割合は世界第一位。赤道直下ながらも標高が高いため平均気温は22度。「千の丘の国」と呼ばれる緑豊かな国……。これらはあまり多くの日本人には知られていないルワンダの姿です。もちろん1994年のジェノサイドや農村部にある経済格差は決して忘れ去っていいものではなく、それらの問題を解決する活動は必要とされています。しかし暗い歴史を自分たちの力で乗り越え、アフリカの奇跡とも呼ばれる経済発展を遂げてきた国の学生と共に、双方の歴史や現在を理解し、一人でも多くの相手国への多角的視点を持った、互いを尊重できるパートナーを生み出すこともまた、未来の国際協力・交流・ビジネスに大きな可能性を生むのではないのでしょうか。私たち日本ルワンダ学生会議は、利害に囚われない学生同志として、知的好奇心や意見をぶつけ合い、両国の多角的な理解を深め、広めていく活動を行っています。

日本招致事業はそんな「相互理解」を深めるための、大きな柱ともなる事業です。今回訪問した、広島では歴史の継承や、海上安全保障、岡山と東京ではそれぞれの暮らしの魅力や課題など、現地に行かなければ感じ取れないものを学びました。市民交流会や共同生活を通じて、日本人もルワンダ人も相手の国への新たな発見があったかと思います。これからの担う若者として何を成ることができたのか、各章にてお伝えできればと思います。

最後となりましたが、私たちの活動の幹ともなる日本招致事業は、多くの方々のご協力とご支援なくては実現することができませんでした。日頃から私たちの活動を応援してくださっている皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

本書が少しでも多くの日本の方に、日本とルワンダの学生を知っていただけるきっかけとなってくれることを願います。

2015年10月  
日本ルワンダ学生会議、一同

# 日本ルワンダ学生会議 第13回本会議 活動報告書

## 目次

はじめに	3
<b>序章</b>	
日本側責任者挨拶	8
ルワンダ側責任者挨拶	9
関係者挨拶	10
日本ルワンダ学生会議団体紹介	11
ルワンダ共和国基礎情報	15
<b>第一章 第13回本会議 事業概要</b>	
第13回本会議 概要・活動日程	17
<b>第二章 日本招致活動報告</b>	
大阪企画	
ルワンダクッキングパーティー	23
広島企画	
広島観光	27
海の安全と自国の防衛	28
負の遺産の継承	33
東京・岡山企画	
真庭市役所訪問	38
銘建工業訪問	40
小さな里山資本主義	42
NPO 法人 POSSE との勉強会/パソナグループ訪問	44
これからの東京を考える	50
東京岡山企画リフレクション	53
日本ルワンダ学生会議×千畝ブリッジングプロジェクト 合同学生会議	56
<b>第三章 学生会議活動報告</b>	
学生会議 概要	63
<b>日本側プレゼンテーション</b>	
日本のビジネスの特徴	64
日本の多文化共生社会	67
他者化～なぜ人々は対立するのか～	70

私たちはどのようにステレオタイプを乗り越えるか	73
現代社会におけるノブレスオブリージュについて	76

### ルワンダ側プレゼンテーション

Research on factors which show how Japan is known in Rwanda	78
Traditional Wedding in Rwanda	80
Peace Education in Rwanda / The danger of single story	83
Security in Rwanda	85

### 第四章 参加者感想

板谷美沙 日本大学経済学部 3年	94
菅野瑞翔 文京学院大学外国語学部 4年	95
篠崎紗希 千葉大学法経済学部 2年	96
柴谷直美 早稲田大学社会科学部 4年	97
島村志保子 日本大学法学部 4年	101
藤内庄司 横浜市立大学国際総合科学部 3年	103
林陸 上智大学経済学部 1年	104
丸茂思織 日本大学法学部 4年	106
水口あすか 東京女子大学現代教養学部 1年	108
安居綾香 同志社大学グローバル地域文化学部 3年	109
山崎建 早稲田大学社会科学部 2年	111
渡邊伶 早稲田大学教育学部 3年	114
KAYANGE Alice ルワンダ国立大学ビジネス情報学部	118
MUGEME Emmanuel ルワンダ国立大学農業経済学部	121
RUTAMU Fiacre ルワンダ国立大会計学部	124
KARINGANIRA Nadine ルワンダ国立大学翻訳学部	127

メディア掲載	131
後援・助成団体様・ご協力頂いた方々	135
おわりに	137



# 序章

日本側責任者挨拶	8
ルワンダ側責任者挨拶	9
関係者挨拶	10
日本ルワンダ学生会議団体紹介	11
ルワンダ共和国基礎情報	15

## 日本側責任者挨拶

まず、日本ルワンダ学生会議第 13 回本会議開催にあたって、両国大使館をはじめ、行政や企業、NPO や一般の方々等、多くの皆様よりご支援・ご協力を頂きました。この場を借りまして御礼申し上げます。

2015 年 9 月現在、ヨーロッパは移民問題に揺れています。「移民は私たちの文化を分かっていない」、「移民を受け入れると治安が悪くなる」、「移民の人の劣悪な労働環境」など。」移民を受け入れた国の人と、移民である人々の間では、未だに多くの衝突や問題が起きています。もちろんこれはヨーロッパだけの問題ではありません。ミャンマーなどの新興国や南米諸国、世界中で起きている、起きる可能性のある問題です。自国に目を向けると、移民の問題は顕著ではないものの、ヘイトスピーチをはじめとする在日問題が起きています。異なる宗教、文化、考え方を持つ人同士、共存する事は簡単な事ではないようです。

よく世界はグローバル化している、といわれます。今後、グローバル化が進むのであれば、職場や学校でも、異なる背景の人と関わる可能性も十分に考えられます。

このような状況を踏まえ、私たちは「相互理解」が大切だと思い、活動しております。相手の文化や宗教など、背景にあるものを知り、理解しようとする。その上で、決して、自分の考えを押しつせず、相手の背景を尊重した言動をする。これは移民問題に限らず、国際協力、開発援助その他にも多くの事に通じる基礎的な事だと考えています。この考え方こそが、これからの社会を生きていく上で、重要になってくると私たちは確信し活動しております。

第 13 回本会議は、「平和」と「発展」という二つのテーマを掲げ、本会議を開催いたしました。ルワンダを語る重要な二つの面、「ジェノサイド」と「アフリカの奇跡」、この両者に向かい合った 20 日間でした。

この二つのテーマとともに、その先にある「相互理解」について、日本人・ルワンダ人がどのように感じ、考えたのか、ご覧いただけますと幸いです。

第 13 回本会議責任者  
渡邊伶



## ルワンダ側責任者挨拶

みなさま、こんにちは。私は日本ルワンダ学生会議第 13 回本会議ルワンダ側責任者、エマニュエルと申します。この度は、第 13 回本会議に責任者として参加できたことを大変誇りに感じています。また、日本人メンバーの熱心なサポートや招致事業に携わってくれた多くの方々に感謝を述べたいと思います。

私が日本という名を初めて聞いたのは高校生の時でした。その当時、私は第二次世界大戦について勉強しており、戦争を知る例として広島と長崎という言葉を知りました。私は驚いたことに、日本は原子爆弾とその放射線物質により大変な被害を受け、今までもその状況があるのだと思っていました。そして、日本に来るまでは、そのような固定概念を持ったまま、日本について十分に知ろうとしていませんでした。しかし、そのような固定概念や間違った知見は、私が日本ルワンダ学生会議に参加することで吹き飛ばされました。

私が 2 学年時には、日本へ渡航に行き、日本のテクノロジーの発展や「おもてなし」を見て感じてきたルワンダの学生に会いました。私は、その学生と多くのことを話し、日本ルワンダ学生会議が掲げる「相互理解」について理解しました。そしてついに、私は第 13 回本会議のルワンダ側の責任者に選出され、日本に訪れることができました。日本の地に足をつけ、日本人メンバーとルワンダの歴史と日本の歴史を分かち合い、本当の歴史が残る場所へと足を運ぶことで、私の日本に対する考えは完全に変わっていました。

最後に、私たち日本ルワンダ学生会議のメンバーは、一個人が長い期間で活動を続ける中で自明の理を見つけ出し、世界規模の市民であることを自覚して国際協力に携わって行くことを強く願います。ありがとうございました。

日本ルワンダ学生会議 ルワンダ側代表  
MUGEMA Emmanuel

## 関係者挨拶

1956年、すなわち日本の敗戦から11年たった年、経済白書の中の「もはや戦後ではない」という記述が流行語になった。しかしながら、その後の高度経済成長に伴う公害等のひずみや、バブル経済とその崩壊、少子高齢化と脱成長の時代などなど、様々な社会問題に我々は直面している。

ジェノサイドから21年たったルワンダも、「もはや戦後ではない」のだろう。そもそも現在のルワンダの大学生は、ジェノサイド時は幼少で記憶がないか、そもそもまだ生まれていなかった者もいるだろう。そう、彼らは「戦後世代」である。

第13回目となる本会議でも様々な社会問題について、各地を訪問し人々との対話を踏まえて、日本とルワンダの学生たちが議論を行った。テーマは両国の学生が考えている。すなわちルワンダの戦後世代はどのような社会問題に関心があるのか（あるいは直面しているのか）を知ることができる。

そのことによって、日本人の持つ「ルワンダ＝ジェノサイド」というステレオタイプに対し、違ったルワンダの姿を見るであろう。

アフリカ平和再建委員会（ARC） 事務局長  
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）  
ボランティア・コーディネーター  
小峯茂嗣

## 日本ルワンダ学生会議 団体紹介

### JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION

#### 日本ルワンダ学生会議とは？

日本ルワンダ学生会議 (Japan-Rwanda Youth Cooperation) は、「相互理解」を活動理念にルワンダの大学生と学術・文化交流を行う学生団体です。異なる背景をもつ彼らとどうやって顔の見える関係を築くのか。日本人同士で分かり合うことでさえ決して容易なことではありませんが、日々試行錯誤して活動しています。

#### 主な活動内容

- ・本会議の実施 (日本人メンバーがルワンダへ渡航、ルワンダ人メンバーを日本へ招致)
- ・週1回の定例ミーティングの開催
- ・日本とルワンダに関する勉強会
- ・講演会や出張事業の実施
- ・活動報告会の開催や報告書の作成
- ・各種イベントへの参加による周知活動…等

#### 構成人数

日本側メンバー14名、ルワンダ側メンバー19名 (2015年8月現在)

#### 活動理念

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には、次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えている、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの'Never again'に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」

を作ってしまった。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

## 団体理念の継承

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保します。

ユネスコ憲章には以下のような文言があります。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまいました。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流を行っています。実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えています。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意して頂くものとしています。

## 略歴

2005年10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）が主催するスタディーツアーのかたちでルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年9月	ルワンダにて第1回本会議を実施
2009年3月	団体名を「ルワンダ・プロジェクト」から「日本ルワンダ学生会議」に改称
2009年9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
2009年12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
2010年8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
2010年12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
2011年12月	日本にて第7回本会議を開催
2012年8月	日本にて第8回本会議を開催
2013年2月	ルワンダにて第9回本会議を開催
2013年12月	日本にて第10回本会議を開催
2014年8月	ルワンダにて第11回本会議を開催
2015年1月	日本にて第12回本会議を開催
8月	日本にて第13回本会議を開催

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員教授の小峯茂嗣氏が設立し

た「ルワンダ・プロジェクト」が母体となり、2008年から学生が主体の運営を開始しました。以後、日本・ルワンダ間の学生交流を中心に精力的に活動しています。

### 平成 27 年度の活動実績

2015年1月	日本にて第12回本会議（招致事業）を開催 (2014年1月24日～2月13日)
3月	学生団体J-Fun Youthと合同勉強会を開催
4月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター主催「春のボランティアフェア」プレゼンテーションコンテストに出場し、銅賞を獲得
5月	第12回本会議報告イベント「ルワンダン・ナイト」開催
6月	勉強合宿を実施
7月	早稲田大学「国際開発援助論」の授業に登壇
8月	日本にて第13回本会議（招致事業）を開催
11月	第13回本会議活動報告会実施予定

### 公認

- ・駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・アフリカ平和と再建委員会（ARC） 小峯茂嗣氏
- ・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

### 連絡先

メールアドレス：[japan.rwanda@gmail.com](mailto:japan.rwanda@gmail.com)  
ホームページ：<http://jp-rw.jimdo.com/>  
フェイスブック：<https://www.facebook.com/japanrwanda>



## ルワンダ共和国情報

ABOUT RWANDA

### ルワンダ共和国基礎情報

ルワンダはアフリカ中東部に位置する小さな内陸国です。「千の丘の国」と称されるほど自然豊かな国であり、治安もよく、ビジネスがしやすい国として知られています。



- 首都：キガリ
- 人口：1210万人（2014年、世界銀行）
- 面積：26,338 km<sup>2</sup>（四国の約1.5倍）
- 言語：キニヤルワンダ語、英語（2009年、公用語に追加され仏語に代わって教育言語となった）、仏語
- 宗教：カトリック、プロテスタント、アドヴェンティスト、イスラム教 ほか

### 略史

年月	略史
17世紀	ルワンダ王国建設
1889年	ドイツ保護領 (第一次大戦後はベルギーの信託統治領)
1961年	王制に関する国民投票（共和制樹立を承認） 議会がカイバンダを大統領に選出
1962年	ベルギーにより独立
1973年	クーデター（ハビヤリマナ少佐が大統領就任）
1990年10月	ルワンダ愛国戦線（RPF）による北部侵攻
1993年8月	アルーシャ和平合意
1994年4月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに「ルワンダ大虐殺」発生（～1994年6月）
1994年7月	ルワンダ愛国戦線（RPF）が全土を完全制圧、新政権樹立 (ビジムング大統領、カガメ副大統領就任)
2000年3月	ビジムング大統領辞任
2000年4月	カガメ副大統領が大統領に就任
2000年8月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003年9-10月	上院・下院議員選挙（与党RPFの勝利）

2008年9月	下院議員選挙 (与党 RPF の勝利)
2010年8月	カガメ大統領再選
2013年9月	下院議員選挙 (与党 RPF の勝利)

## 政治体制・内政

- 元首：ポール・カガメ大統領
- 議会：上院 (26 議席、任期 8 年)、下院 (80 議席、任期 5 年)
- 政府：首相 アナスターズ・ムレケジ  
外相 ルイーズ・ムシキワボ

### ●内政：

1962年の独立以前より、フツ (全人口の 85%) とツチ (同 14%) の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツが政権を掌握し、少数派のツチを迫害する事件が度々発生していた。1990年に独立前後からウガンダに避難していたツチが主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ政権との間で内戦が勃発した。1993年8月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団 (UNAMIR)」を派遣したが、1994年4月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ過激派によるツチ及びフツ穏健派の大虐殺が始まり、同年7月までの3ヶ月間に犠牲者は 80~100 万人に達した。

1994年7月、ルワンダ愛国戦線がフツ過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領 (フツ)、カガメ副大統領 (ツチ) による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止 (1994年)、遺産相続制度改革 (女性の遺産相続を許可) (1999年)、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置 (1999年) 等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999年3月には、1994年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙 (市町村レベルより下位) を実施、2001年3月には市町村レベル選挙を実施、2003年8月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。以後行われた上院 (2003年、2011年) ・下院議員 (2003年、2008年、2013年) 選挙の全てで、与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領 (2010年の大統領選挙で再選) は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。なお、ルワンダは女性が国会議員に占める割合が 57.5% で世界一 (2014年10月現在)。上院副議長、下院議長の要職を女性が占め、女性閣僚の割合は約 26% と、女性の社会進出が進んでいる。

2000年、中長期的国家開発計画である VISION2020 を発表、2020年までに中所得国への転換をめざし、「知識集約型経済の実現」などを掲げている。

## 経済

- 主要産業：農業 (コーヒー、紅茶ほか)、観光、地下資源
- GDP：75.2 億ドル (2013年、世界銀行)
- GNI：630 億ドル (2013年、EIU)
- 経済成長率：4.6% (2013年、世界銀行)
- 総貿易額： (2013年、EIU)

- (1)輸出 7 億ドル
- (2)輸入 18.5 億ドル
- 主要貿易品目：(2013 年、EIU)
  - (1)輸出 コーヒー、茶、錫、コルタン
  - (2)輸入 消費財、資本財、中間財、エネルギー材
- 主要貿易相手国：(2013 年、EIU)
  - (1)輸出 中国、コンゴ共和国、マレーシア、スワジランド
  - (2)輸入 ケニア、ウガンダ、中国、アラブ首長国連邦
- 通貨：ルワンダ・フラン

世界銀行の「DOING BUSINESS (投資環境ランキング) 2015」では、全世界 189 カ国地域中 46 位、アフリカ第 3 位、東アフリカ共同体 (EAC) 1 位という高い順位を占めている。

## 二国関係

- (1) 日本は、ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが、2005 年 1 月に再開。
- (2) 1994 年 4~6 月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年 9~12 月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国 (当時、現コンゴ民主共和国) のゴマ等に約 400 名の難民救援隊 空輸隊等を派遣した。

(上記内容は外務省ホームページより引用 2015 年 9 月現在)



# 第一章

## 第13回本会議 事業概要

第13回本会議 概要・活動日程 \_\_\_\_\_ 17

# 第13回本会議 概要・活動日程

## ABOUT 13<sup>th</sup> CONFERENCE

### 開催日時・場所

日程：2015年7月31日（金）～8月21日（金）

場所：東京都、大阪府、広島県、岡山県

### 活動内容

日本ルワンダ学生会議ルワンダ側メンバー4名を日本に招聘し、学術・文化交流事業を実施する。日本・ルワンダ両国の学生が共同生活をしながら、各地でフィールドワークや学生会議、一般市民を巻き込んだ交流イベント等を行うことで、両国の草の根レベルの相互理解を促し、また友情・信頼関係の構築を目指す。

今回の事業では、東京・広島・岡山を訪問する。

広島では、「負の歴史の継承」と「海の安全」の2つの企画を実施する。

「負の歴史の継承」では、平和記念資料館の訪問や被爆者の方のお話を聞く。日本は今年で終戦70年をむかえ、ルワンダも昨年度ジェノサイドから21年経った。この節目の時期に、お互いの負の歴史をどのように伝承していくのか、考え、議論する。

「海の安全」では、海上自衛隊第一術科学校を訪問し、旧海軍の歴史をはじめ、特攻隊員の遺書、旧海軍関係の資料等を見学する。ルワンダは内陸国であるため、海の安全や海で起こっていることを意識する機会が少ないのではないかと考える。しかし、今後経済発展していく上で、アフリカ周辺で起こっている海の安全に関する問題も考える必要がある。本企画で、「戦争、海軍、海の平和」をテーマにディスカッション、意見の共有を行う。

東京・岡山では、「発展の弊害と生き方・働き方」について労働を通して考える。

日本は戦後、経済発展を遂げ、物質的には豊かになった。しかし、毎年、多くの日本人が自殺をしてしまったり、過労、鬱などに悩まされていたりする現状がある。ルワンダも今後さらなる発展を遂げていく上で、このような問題に悩まされる可能性もある。

本企画では、労働を通して、これらの問題を考えていく。東京では、労働問題について企業と意見交換をし、また2020年五輪に向けた東京の都市計画について、政府の方のお話を伺う。岡山では、エネルギーの自給を試み、都会とは違い、精神的に豊かな暮らしをしている真庭市を訪れる。そして、行政や地元企業の方のお話を聞くなどする。

このように、都市での暮らし、地方での暮らし、その良い面悪い面をそれぞれ東京、岡山で知ることによって、将来、国をどのように発展させていくべきなのか、自分はどのように生きるのか、働くのか、をメンバー一人一人考えていく。

### 事業目的

- ① 日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相を紹介することで、両国についての深い理解を得る。また、これは両国の学生が自国について再認識し、理解を深めることでもある。
- ② 日本とルワンダの学生が約20日間の共同生活をする中で、友情を育み、信頼・協力関係を構築する。豊かな人間関係を築くことによって、相互理解の第一歩とする。
- ③ お互いの国の社会問題に対して理解を深め共に考えることで、主体的に行動できる人材を育むきっかけを作る。
- ④ 異なる価値観や文化的・歴史的バックグラウンドを持つ日本とルワンダ両国の学生が、学生会議や共同生活等を通じて、異文化を理解・尊重する姿勢や寛容性を身につける場を設ける。
- ⑤ 当団体内部間での交流だけではなく、市民の方を対象としたルワンダ人学生との広い層を対象とした交流と相互理解の促進を実現する。
- ⑥ 事業終了後の報告書・ドキュメンタリー映像の作成、報告会の開催を通して日本における市民レベルでのルワンダへの理解を促す。また、ルワンダ側メンバーも事後活動を行い、ルワンダにおける日本への理解を促す。

### 第13回本会議 全体スケジュール

実施日	事業内容	実施場所
<b>2015年7月</b>		
31日(金)	ルワンダ側メンバー日本到着	成田空港
<b>2015年8月</b>		
1日(土)	移動・休息(東京→大阪)	大阪
2日(日)	市民対象交流企画	
3日(月)	移動・休息(大阪→広島)	広島
4日(火)	観光	
5日(水)	海上自衛隊第一術科学校見学	
6日(木)	平和記念資料館見学	
7日(金)	講話、ディスカッション	
8日(土)	事前学習	
9日(日)	地域の方との交流会	
10日(月)	真庭市内フィールドワーク	
11日(火)	観光	
12日(水)	移動・休息(岡山→東京)	東京
13日(木)	株式会社パソナ視察	
14日(金)		
15日(土)	学生会議①	
16日(日)	休息・東京観光	
17日(月)	学生会議②	
18日(火)	学生会議③	
19日(水)	Future Of JRYC	
20日(木)	千畝ブリッジングPJとの合同企画	

コメントの追加 [1]: 中和地区フィールドワーク

21 日 (金)	帰国	成田空港
----------	----	------

# 第二章

## 日本招致活動報告

大阪企画	
ルワンダクッキングパーティー	23
広島企画	
広島観光	27
海の安全と自国の防衛	28
負の遺産の継承	33
東京・岡山企画	
真庭市役所訪問	38
銘建工業訪問	40
小さな里山資本主義	42
NPO 法人 POSSE との勉強会/バナナグループ訪問	44
これからの東京を考える	50
東京岡山企画リフレクション	53
日本ルワンダ学生会議×千畝ブリッジングプロジェクト合同学生会議	56

# ルワンダクッキング パーティー

担当者：安居綾香

## 企画概要

日時：2015年8月2日(日)

場所：クレオ大阪東 調理室

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー、  
関西域の大学生・大学院生 14名

## 企画目的

ルワンダの伝統料理やルワンダ人学生との対話から、関西在住の日本人学生にジェノサイドだけではないルワンダについて理解していただく機会とする。また、ルワンダ人学生には一般の日本人が抱えているルワンダの印象について理解してもらう。

## 活動報告

《企画スケジュール》

13:30	開会式
14:00	調理
15:30	食事会
16:30	閉会式

日本ルワンダ学生会議メンバーの他に14名の日本人大学生・大学院生で4グループに分かれ、ルワンダ料理のマトケシチューとムシカキを調理した。大きなプランテーションバナナを用いたマトケシチュー、バーベキューのように牛肉を串に刺すムシカキは共に東アフリカではよく食べられる料理である。日本人参加者の多くがプランテーションバナナを目にすることがはじめてで、自ら調理することは全員にとって初体験であった。日本で食べられるようなシチューとは全く異なるものであったため、試行錯誤しながらの調理となった。

また、食事会においてはそれぞれのグループにおいて、自分たちで作った料理に舌鼓を打ちながら、ルワンダの政治、経済、文化の多岐に渡ってルワンダ人学生を中心に話がなされた。そして、ルワンダクイズを各テーブルで行い、ルワンダの面白さを参加者に伝えることができた。



(座談会の様子)

### 感想

企画段階でどのような料理を作ろうか考えている際に、アフリカ料理レストランのオーナーさんにアドバイスをいただき、マトケシチューとムシカキに出会った。関西ではなかなか入手しにくいブランドパナナだが、せっかくのイベントならば参加者が普段見ないようなインパクトのある食材をぜひ用いたいと考えた。予想通り、当日は驚きの声が上がリ、参加者に楽しん

でいただけたのではないと思う。ルワンダ人男子学生が包丁を握ることがはじめてで、少々調理を任せるには恐ろしかったが、参加者と協力しながら進めることができた。

半日の大阪企画を通して、日本ルワンダ学生会議以外の日本人学生にルワンダをより知っていただく機会を提供できたように思う。親しみやすい料理の共同作業や実際にルワンダ人学生との話から、まだまだルワンダというアフリカの小さな国について知らない日本人とルワンダ人との相互理解の一歩になったのではないかと考える。個人的には「なぜアフリカ？なぜルワンダ？」と聞いていた友人達に「ルワンダって素敵な国だね」と言ってもらえたことがとても嬉しかった。

食事会でもジェノサイドはもちろんのこと、地理やゴミ袋持ち込み禁止の政策、恋愛事情に渡るまで話が尽きることはなかった。私は本企画を通し、談笑しつつ共同作業をし、食べながら知識や想いを分かち合う、そのような時間を設けることができ、両国の小さな架け橋となれたことに喜びを覚えた。



(参加者の皆さまと)



## 広島企画 ABOUT HIROSHIMA PROJECT

### 活動スケジュール

日時	活動内容
8/4 (火)	厳島神社、縮景園訪問
8/5 (水)	海上自衛隊第一術科学校（旧海軍兵学校）見学、ディスカッション
8/6 (木)	広島平和祈念式典出席、平和記念資料館、袋町小学校見学
8/7 (金)	河野氏講和、学生団体リングフランカとディスカッション
8/8 (土)	広島企画リフレクション

### 活動内容

#### (1)負の歴史の継承

被爆者の方とルワンダ人大学生とのディスカッションを行う。双方向的な意見の交換や対話を通じて、平和に対する価値観や歴史の継承への考え方などを共有する。

#### (2)海の安全を考える

広島県江田島市にある、海上自衛隊第一術科学校（旧海軍兵学校）を訪問し、旧海軍の歴史や特攻隊の方々の遺書、旧海軍関係の資料等を見学し、日本の海上自衛隊の活動について学ぶ。その後、メンバー間で「日本、ルワンダ両国が抱えている海上においての問題」をテーマにディスカッション、意見の共有を行う。

### 企画全体目的

#### (1)負の歴史の継承

1. 負の歴史から学ぶ姿勢を持ち、被害を受けた方々の意思を未来へ受け継ぐのは私たち若い世代の使命であり、役割である。日本ルワンダ両国の学生の意見を共有し、それを具体的にどのように生かしていくかを考える機会とする。
2. 私たち一人一人が戦争や原爆を「自分事」として捉え、真摯に平和を考える。

#### (2)海の安全を考える

1. 海上自衛隊の国内外おける活動を学び、考えを共有することで、ルワンダ人大学生に普段なじみのない、海に対するの関心を持ってもらい、他国との貿易ルートとして重要である海上において発生している様々な問題に目を向ける契機とする。
2. ディスカッションを行い、日本人やルワンダ人が持つ、海上の問題に対する考えや意見を共有することで両国大学生が多角的な視点から海の安全について考える力を身につける。

## 企画経緯

### (1)負の歴史の継承

2015年は終戦から70年を迎える。戦後の日本では国民に対しては平和教育がなされてきた。現在でも多くの小中学生が道徳の時間に戦争や平和に関する文献に触れ、修学旅行先として広島や沖縄を訪れる。しかし、私たち若い世代の多くは戦争や原爆投下を単なる遠い過去のことだと思っている人が多いのではなかろうか。自分との関係性が希薄になっていくにつれて、戦争について意見を交わす場が少なくなっていく。

一方で、ルワンダはジェノサイド終結から21年目を迎えた。ジェノサイド終結後、犠牲者を追悼するジェノサイドメモリアルや追悼碑が国中に建立され、さらに平和教育の一環として首都部の子どもたちにはジェノサイドメモリアルを訪れる機会があるという。しかし時が経ち、ジェノサイドが過去の一件となる可能性もあるのではなかろうか。自分との関係性の軽薄さが増長するが故に無関心へと成り代わる可能性さえある。事実、日本の現状はその反面教師となる。

このような負の歴史をもつ2つの国。それらの国に今生きている私達が意見や価値観を共有し合うことは非常に重要なことだと考える。さらにこの活動で得た知見や考えを私たちだけで終わらせるのではなく、より多くの人、特に若い世代の方々に共有すべきだと私たちは考える。そしてその経験が、ルワンダ人大学生が平和や自国の未来を真摯に考える一つのきっかけになることを願い、本企画を提案した。

### (2)海の安全を考える

今日、アフリカでは国内での内戦や隣国との戦争のみならず、海上で発生している問題、特にソマリア沖での海賊による外国船への被害が深刻な問題となっている。ソマリア沖では、世界各国の船舶が海賊による被害にあっており、日本の船舶も過去に被害を受けている。ルワンダはアフリカの中央に位置する内陸国であり、海に面していないため国民の海に対する関心は低い。しかし、ルワンダの海上貿易の拠点となっているケニアのモンバサ港は、ソマリア沖と地理的に隣接しておりルワンダも海上問題に対して決して他人事ではいられない。実際にモンバサ港を目的地としてソマリア沖を移動中の船舶が、数多くの海賊に襲撃されている。ソマリア沖での海賊問題は日本、ルワンダ両国共通の課題であると言えるだろう。ルワンダ人大学生に海上で起きている問題にも目を向けてもらい、海に対して関心をもってほしい。そのような考えから、実際に日本の海上自衛隊第一術科学校を訪問し、彼らにとってなじみのない、海の安全や海上での諸問題を考える場として、本企画を提案した。



# 広島観光

担当者：板谷美沙

## 企画概要

日時：2015年8月4日（火）

場所：厳島神社、縮景園

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー（ルワンダ人4人、日本人7人）

## 企画目的

世界遺産にも登録されており、世界的にも価値の認められている厳島神社。戦国武将によって作庭された名勝縮景園。これらを訪問し、日本の文化、宗教観や歴史を学び、日本に対する理解を深めること。

### ■厳島神社

厳島神社の歴史は古く、推古天皇によって社殿が創建されたのが始まりであり、その歴史は1400年以上にもものぼる。また、厳島神社は海の上に建てられた唯一の神社であり、海に流されない工夫が随所にちりばめられている。それらを見学し当時の人の知恵に対し、ルワンダ人だけでなく日本人も感心するばかりであった。また、鬼門に向けて作られた太陽のマークや神社の参拝方法などを通して日本文化に触れ、ルワンダ人学生らは興味津々だった。特に能舞台において松竹梅の梅が役者さんであるという話が興味深かったらしく、好評を博した。また、私たちが訪れた時間に海が満潮となり海に浮かぶ鳥居、社殿の景観の美しさを大いに楽しむことができた。

### ■縮景園

縮景園は戦国武将であった上田宗箇によって作庭されており、大名庭園とは違った庭作り見ることができる。見張りのための丘や自給自足の生活を送る武士に必要な畑など武士庭園ならではのものも見る事ができた。ルワンダ人学生は、ボランティアガイドさんからの説明を興味深そうに聞き、たくさんの景色を写真に収めていた。また、園内には海水と淡水の混ざった汽水が流れておりそこには海水魚と淡水魚が共生していた。ルワンダ人も日本人も鯉とクロダイと一緒に泳いでいる姿を不思議そうに眺めていた。



(巖島神社での様子)

# 海の安全と自国の防衛

担当者：山崎 建

## スケジュール

実施日	活動	場所
8/5 (水) 10:00~	呉市海事歴史科学館見学	呉市海事歴史科学館
8/5 (水) 13:00~	海上自衛隊第一術科学校見学	海上自衛隊第一術科学校
8/5 (水) 15:30~17:00	ディスカッション	呉市海事歴史科学館内会議室

## 企画概要

日時：2015年8月5日(水)

場所：広島県呉市 呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)、広島県江田島市 海上自衛隊第一術科学校

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

## 企画目的

1. 大日本帝国海軍創設から海上自衛隊への変遷、現在に至るまでの日本の海上防衛を学ぶ。そしてルワンダ人メンバーの海への関心を喚起し、経済活動でも重要な海上における諸問題に目を向ける機会とする。
2. 大日本帝国海軍の神風特攻隊の方々の遺書をはじめとする戦時中の海軍関係資料を見学し、当時の日本人特有の精神を学び、戦争について考える機会とする。
3. 海上自衛隊の教育施設を訪問し、海上自衛隊の国内外における活動を知ること、世界で唯一の「自衛隊」という存在について考えるとともに、お互いの考えを共有し、多角的な視点から「自衛」について考える力を養う。

## 活動報告

### ■呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)見学

呉市海事歴史科学館のある広島県呉市は、戦時中、戦艦「大和」を建造した軍港であり日本一の海軍工廠として栄えた。戦後においても戦前から引き継いだ高度な技術を活かし、世界最大級のタンカーを数多く建造するなど、日本の近代化に大きく貢献した場所である。呉市海事歴史科学館では、呉海軍工廠の歴史を日本の幕末から第二次世界大戦までの戦史とともに学んだ。

施設内に入り展示室へ向かうと、まず目にしたのは全長約26メートル、10分の1スケールの戦艦「大和」だ。大日本帝国海軍史上最大最強であった大和の展示には、ルワンダ人メンバーも興奮を隠せない様子だった。展示物を見学する際、ルワンダ人メンバーには

貸出されている英語の音声ガイドを利用してもらった。実際に使用された砲弾や戦艦の一部が展示されており、英語で解説されている展示物が多かったという点で、彼らにとって非常にわかりやすかったのではないだろうか。その他零式艦上戦闘機（零戦）や人間魚雷「回天」等も多くが呉で製造され、実物資料を目にすることができた。これもルワンダ人メンバーにとって貴重な経験になったと思う。呉でこれまで製造されてきた軍艦や最大級のタンカー等の船舶一覧表が展示されていたが、製造数はかなりの数にのぼり、当時から日本の技術は非常に高い水準にあり、その高度な技術が呉に集中していたことがうかがえた。短時間の滞在ではあったものの、現在に至るまでの日本の海における歴史と世界有数の造船のまち「呉」について日本人、ルワンダ人メンバーともに十分に学ぶことができた。

#### ■海上自衛隊第一術科学校見学

海上自衛隊第一術科学校は第二次世界大戦で日本が敗れるまで旧海軍の兵学校であった。大戦終了後約十年間、連合軍が駐留していたが、1956年に返還され横須賀から広島県江田島市に海上自衛隊術科学校が移転され現在に至る。

施設内見学は約1時間30分で現役の海上自衛官、または退職された海上自衛官の方の案内で、ツアー形式で巡るというものであった。施設が紹介されている簡単な英語のパンフレットは置いてあるものの、施設案内を行う際は日本語のみの解説であったので、英語に堪能な日本人メンバーが自衛官の方のお話をその場で通訳する形式をとった。

戦前江田島の海軍兵学校は、アメリカのアナポリス、イギリスのダートマスと並んで世界三大兵学校と称されるほどに世界でも最高級の教育機関であった。入学に非常に高い学力が必要とされることはもちろん、身体検査においても高いレベルの運動能力が求められたので当時は「兵学校に落ちたものが東大に行く」とまで言われたほどである。現在の海上自衛隊第一術科学校も幹部候補生の教育施設であり、特に優秀な者だけが入学できるそうである。施設の外観を見学する際は日陰が無く、当日は猛暑日であったので大変ではあったが、真剣に話を聞いているルワンダ人メンバーの姿が見受けられた。

#### ■幹部候補生学校庁舎

最初に見学者の目に映ったのは巨大な赤煉瓦の建物だった。これは幹部候補生学校庁舎であり、イギリス人建築家によって作られたためイギリスの影響を強く受けた建物だという。長さは144メートルもあるが、これは意図的に作られたようだ。日本の戦艦の長さの平均が144メートルであり戦艦での活動を想定して建築されたのである。この幹部候補生学校庁舎には正面に大きな入り口はあるものの扉が見当たらなかったが、これにも理由があった。将来自衛官になると船の中で生活するので、学生のうちから慣れさせるという目的からあえて扉を作らなかったのだ。海上自衛隊としての活動を想定し、様々な工夫が施された建築方式であると感じた。「台風や大雨の時などはどうするのか」という他の見学者の質問があったが、雨ざらしになっている部分は雨が止んでから「甲板の上は常に清潔に」という教訓のもと、学生が掃除をするそうだ。

#### ■テニスコート

校内を歩いているとテニスコートを見かけた。松が道に沿ってきれいに並んでいる厳かな光景の中でテニスコートだけが非常に不自然に見えた。話によると、このテニスコートは第二次世界大戦で日本が敗戦後、アメリカ軍が駐留していた際に作られたものだという。旧海軍が非常に過酷な訓練、教育を受けていたこの地で単なる娯楽目的でアメリカ軍がテ

ニスコートを作ったということを考えると複雑な気持ちになる。また、戦時中、兵学校は日本海軍の教育施設であったにもかかわらず、アメリカ軍からの攻撃は一切受けなかったという。当初からアメリカ軍は戦争勝利後に江田島の海軍兵学校を占領するつもりであり、アメリカが旧海軍兵学校を重要視していたことがうかがえる。

### 大講堂

幹部候補生学校庁舎の奥を進むと石造りの白い建物が見えてきた。この大講堂は現在、入校式や卒業式、儀式などに使用されており、二千人近くを収容することができる。中に入ると正面の壇上に大きな国旗と自衛隊旗が立てかけられていた。案内をしていただいている自衛官の方の声が行動内にとっても響いた。音響効果が計算されて作られているようだ。

### 教育参考館

この施設は、第二次世界大戦までは、主に精神教育のための施設であった。軍人の所有物や海軍の資料等が保管されていたが、第二次世界大戦に敗れ連合軍に占拠されることがわかると、厳島神社に奉納という形で資料を避難させたそうだ。その後兵学校が返還され



ると、避難させていた資料約 1 万点を回収し、現在展示されている、非常に情報量の多い施設である。日本海海

(大和ミュージ

アムより)

戦においてロシアのバルチック艦隊を破ったことで有名な東郷平八郎が、負傷した敵将のロジェストヴェンスキー中将を慰問したという、当時の日本軍人の「礼」を重んじる姿を学ぶことができた。他にも当時の戦時中の海軍兵学校長であった井上成美校長が敵国の公用語である英語は兵学校の教育科目から排除するべきだという世間の風潮があったにも関わらず、「世界を相手に戦う海軍士官が英語を知らないでよいということはありません。」として英語教育を引き続き導入したことなど、当時の日本の中にも社会の風潮に流されることなく、自分の信念を貫き通した軍人がいたことも分かった。

その中でもルワンダ人メンバーが一番興味を持って見学していたものが神風特攻隊、人間魚雷「回天」に搭乗し自分の命を犠牲にして、国のために戦った方々の遺書である。ルワンダ人メンバーと同年代、もしくは若い世代の方々が、敵艦に体当たりする当時の日本の戦術、国のために死ぬことを美徳とする当時の日本の思想はルワンダ人メンバーの目にはどのように映ったのだろうか。展示された遺書の英語訳をじっと見つめているメンバー、全文書き写すメンバー、涙を流すメンバー、それぞれが自分なりに真剣に、犠牲となった



方々に思いを馳せていたに違いない。彼らにとって非常に有意義な時間であったのではないかと思う。

## ディスカッション

呉市海事歴史科学館と海上自衛隊第一術科学学校の二つの施設を訪れて考えたこと、感じたことを日本人、ルワンダ人メンバー間で共有する場として、「日本、ルワンダそれぞれの国にとって、最善の自衛の仕方とは一体何か。」をテーマにディスカッションを行った。メンバー一人ひとりの知識量や英語力の違いによって、グループによってディスカッションの内容に差が生じることや、積極的に参加できないメンバーが発生してしまうことが例年課題となっていることを考慮し、前半の30分は日本人とルワンダ人が分かれて議論した。その後国籍関係なく3つのグループに分かれ、互いの国の現状や課題を共有し解決策を模索した。

## 感想

今回初めて企画を担当させてもらった。率直にいうと、企画立案から運営まで非常に苦勞した。今は無事に企画を終えることができほっとしている。内陸国であるルワンダで育った彼らに海に対しての興味、関心をもってもらいたいという思いからこの企画を立案させていただいたが、本来の目的のみならず、多くのことをルワンダ人メンバーに学んでもらうことのできた企画であった。企画担当である私個人の企画終了までの動きにおいてはまだまだ至らなかった点が多々あり、他のメンバーに迷惑をかけてしまった部分があったかもしれない。しかし企画自体を評価するのであれば、今回の企画は成功であったと確信している。特に訪問させていただいた二つの施設において、どちらも扱っていた特攻隊をはじめ、戦争中に国のために自らの命を犠牲にした方々の遺書、遺物に関して、ルワンダ人メンバーが非常に興味を示してくれたことは純粋に嬉しく思う。戦前、戦時中における他国には見られない独特の日本人観や、国のためなら進んで命を捨てることが美徳とされてしまった当時の国風は、ルワンダ人メンバーにとっては難しく、理解しがたいものだったかもしれないが、彼ら一人ひとりが感じるものはあったようだ。

施設訪問後のディスカッションは非常に有意義な時間であった。「自国の防衛」という、現在の日本においても非常に注目されていると同時に、複雑で難しいこのテーマについてディスカッションをするには1時間では短すぎた。日本、ルワンダ両国が抱えている問題（日本においては主に中国、韓国、ロシアとの領土問題。ルワンダにおいては主に隣国コンゴとの度重なる軍事衝突。）について双方の立場からの意見交換や、両国の自衛隊、防衛軍についての認識の差異を共有できたことは貴重な経験であった。ルワンダ人メンバーに今回の企画の中で見たものや学んだもの、感じたものを母国の友人や知人に伝えてもらい、一人でも多くのルワンダ人が日本に興味を持ち、何か学んでくれることを願っている。（山崎）

私にとって、戦艦を見るのは今回が初めてであり、世界最大級の戦艦「大和」や実物の資料を見ることができ、非常に嬉しく思う。大和ミュージアムと海上自衛隊第一術科学校を見学したことで、特攻隊や人間魚雷に乗っていた方々の思い、精神を学び、理解することができた。特攻隊の遺書、特に

私よりも若い年齢の方のものを見たときには、非常に悲しい気持ちになり涙が止まらなかった。祖国のために、自分の命を犠牲にする決断ができた彼らは非常に勇敢であると思う。また、当時の日本は非常に愛国心が強かったということを感じた。行き過ぎは良くないが、愛国心が強いのは良いことだと私は思っている。海上自衛隊第一術科学校においては自衛隊がどのように創設されたのか、また、どのように教育が行われ、自衛官を養成しているのかを学ぶことができた。日本人は自衛隊に対し、良い印象を持っているという印象を受けた。

(Nadine：山崎訳)

(大和ミュージアムにて)

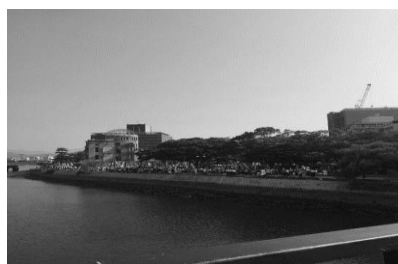


# 負の遺産の継承

担当者：藤内庄司

## スケジュール

実施日	活動	場所
08/06 (木)	平和記念式典参加 袋町小学校の被ばく施設を見学	平和記念公園 袋町小学校



08/07 (金)	平和記念資料館見学 被ばく者の方の語りを聞く	広島平和記念資料館 広島市青少年会館
--------------	---------------------------	-----------------------

## 企画概要

日時：2015年8月6日（木）、7日（金）

場所：広島県広島市（袋町小学校・広島平和記念資料館・広島市青少年会館）

参加者：

8月6日（木）

日本ルワンダ学生会議メンバー

8月7日（金）

日本ルワンダ学生会議メンバー、学生団体リングフランカメンバー、河野キヨ美さん（語り部）、畝崎雅子さん（通訳者）

## 企画目的

負の歴史から学ぶ姿勢を持ち、被害を受けた方々の意思を未来へ受け継ぐのは私たち若い世代の使命であり、役割である。私たち若者が現地に足を運び、彼ら/彼女らの意見を聞き、真摯に平和を考える。さらに具体的にどのように生かしていくかを考える機会とする。

(広島市)

## 活動報告

今回、「負の遺産の継承」をテーマに広島県広島市にて活動を行った。現地では初日平和式典に参加し、その後原爆によって被ばくした袋町小学校を訪れた。2日目は平和記念資料館を見学した後、実際被ばくされた方を語り部としてお招きし、当時の現状や復興の様子を語っていただいた。

まず平和式典だが、今年は原爆投下から70年の節目の年であったためか、非常に多くの方が参列していた。特に多くの市民団体の方々が今の日本社会に対して声を上げている風景は印象的であった。



次に訪れたのは袋町小学校である。袋町小学校は70年前の原爆で校舎が破損してしまい、現在でもその一部を展示している。自分の居場所を示すための伝言板として使用された黒板や救護の様子が写真で残されている。

ルワンダにも当時虐殺が行われた場所を記念館として保存しているところが数か所存在する。現地で何が行われたかを次の世代へ残す重要なメモリアルサイトとなっており、特に外国人の観光客が多く訪れるという。袋町小学校とルワンダ現地のメモリアルを比較すると、袋町小学校は上記のように原爆の被害と現実を次世代に伝える展示が多いが、ルワンダ現地のメモリアルは広大な敷地を有し、当時の様子がありのままに残してある。そして大きな説明板にはジェノサイドがどのようにして発生し、誰がどのような行動をとったか、そしてどのような結果を招いたかが事細かく記載されている。平和を祈り、そして次世代へと伝承する目的は同じでも、手段や方法は様々で私達見学者への伝わり方も異なるのだと実感した。

2日目は平和記念資料館を訪れた。ルワンダンメンバーの一人が「ここ（資料館）にきて初めて本当に原爆があったのだと認識した。」という言葉聞き見学した意義を実感した。原爆直後の街の様子を模したモニュメントの前で立ち尽くすメンバーもいれば、科学的に原爆の規模と被害を説明するセクションで立ち止まるメンバーもいて、一人ひとりのメンバーが様々な角度から「原子爆弾」を捉えているのが印象的であった。

#### (平和記念式典)

本企画最後は被ばく者の語りである。語り部には河野きよみさん（以下河野さん）をお招きした。河野さんは70年前、爆心地から35キロ離れた街で被ばくされた。当時の状況は「あの日を、わたしは忘れない」（勉誠出版）に記されている。お話を伺った際、真剣な眼差しで河野さんの話聞き入るルワンダンメンバーとその質問が印象的であった。以

下はルワンダメンバーの質問と河野さんの回答である。

Q、「私達のような若い人々に期待することはなんですか。」

A、「皆さんのような若い力には可能性がいっぱいあります。不条理なことがいっぱいおこるかもしれませんが、蔑ろにせず一人ひとりがよく考えて、言葉に出して発言してほしい。おかしいなと思ったら絶望しないで、言葉に出して行って頂きたい。私は世界中が連帯してほしいと思っている…難しいですが…とにかく体を大事にして、自分の信じた道を行ってほしい。」



(平和記念資料館)

### 感想

私には以前からルワンダメンバーとの交流を通して強く感じるギャップがある。それはルワンダメンバーにとって国防と平和が私より随分身近なものであるということだ。学生会議などでディスカッションしているとルワンダメンバーたちの持つ国を守る意識や平和の重要性が私よりも身近に、そして高次であると感じることが多い。それは悲惨な過去からあまり時間を経てないからだろうか、それとも内陸国という地理的な要因だろうか。いくつもの要因が考えられるであろうが、同世代なのにどうしてルワンダ人と日本人である私が考える国防や平和には、いつも何かしら隔たりがあるのだろうかどこか腑に落ちないところがある。正直企画が終わった今もおその原因はわからず、もやもやしている。

しかし、画目的でも記載したとおり、負の歴史に真摯に向き合うことは少なくとも果たせたと感じている。具体的にどのような方法で平和を作っていくかについてまとめることはできない。今回広島で学んだこと、感じたことを糧に、それぞれの道・方法で平和に寄与するアクションを起こせることが最も重要なのではないか。

また本企画を通して、この団体の活動には学びがいがある、と再確認できた。この団体の活動は「答え」が見えにくい。腑に落ちないことも多いし、頭で考えるよりも実践した方が、つまりコミュニケーションをとったほうが解決しやすい課題も多い。故に自らの答えを見つけるためにそれぞれの方法でアクションを起こしていく。規模の大小はどうかあれ、なんらかの目標をもって活動している。もちろん厳しい面もあるが、それ以上に学びや楽しさが大きいということが、私がこの団体に3年間も在籍し続けている理由かもしれない。

個人的には就職活動を来年に控えたこの時期に、ルワンダ人とともに広島を訪れた経験は本当にかげがえのないものとなった。河野さんが私たちに託して下さったことを少しでも果たせるよう、私なりの道で頑張ろうと決意させてくれる企画でもあった。



(お話し頂いた河野さんと)

# 東京・岡山企画全体概要

## スケジュール

実施日	企画	場所	
8/8 (土)	事前学習	岡山県	岡山市内 ホテル
8/9 (日)	地域の方との 交流会		真庭市 古民館
8/10 (月)	地方の暮らし を知る		真庭市 市役所
	地方の発展を 知る		株式会社 銘建工業
	地方の暮らし を体感する		中和地区 民宿
8/11 (火)	地域に根ざし た生活とは	真庭市 中和地区	
8/12 (水)	移動/休息		
8/13 (木)	労働問題につ いての勉強会	東京都	株式会社バ ソナ会議室
8/14 (金)	今後の東京に ついての勉強 会		早稲田大学 学生会館
	東京・岡山企 画リフレクシ ョン		

## 企画実施期間

2015年8月8日(土)～8月14日(金)

## 活動内容

岡山県では、真庭市を訪れ、真庭市役所の方や、地元の企業を訪問する。その中で、お金を最優先とせず、精神的な豊かさを重視する「里山資本主義」の考えや暮らし方を学ぶ。東京都では、労働問題の現状解決策について NPO や企業と学ぶ他、2020 年のオリンピック・パラリンピックに向けた東京の取り組みについて、内閣参謀の方との勉強会も行う。岡山、東京それぞれでの経験を踏まえ、「発展のあり方」について、考察し、議論を行う。

### 企画参加者

岡山：日本ルワンダ学生会議

(ルワンダ人 4 名、日本人 4 名)、

岡山大学学生 1 名、

京都大学学生 1 名

東京：日本ルワンダ学生会議

(ルワンダ人 4 名、日本人 11 名)

東京大学学生 1 名、

早稲田大学学生 1 名、

団体 OBOG3 名

### 企画経緯

「発展」と聞くとどのようなイメージを浮かべるだろうか。一般的に、「発展」とは良いイメージとして捉えられている。もちろん、それは間違っていないと考える。しかし、発展に伴う弊害もあるのもまた事実である。分かりやすい事例は、環境問題である。発展を優先するあまり、公害問題や森林伐採などを招き、結果的に地球規模の環境問題につながっていることは周知の事実である。今回はその環境問題ではなく、発展の精神的な弊害に着目しようと思う。

日本は戦後、発展を遂げ世界でも有数の経済大国になった。多くの人々は暮らすのに困らないほどのお金は手に入れることができ、物質的にも恵まれている。それでは日本人は世界でもトップクラスの幸福を味わっているのか、ということそうとは言い切れない。実際に幸福度調査でも、日本は先進国ではかなり下位である。経済発展を遂げ、物質的に恵まれている日本で、なぜ幸福度が低いのか。この現在の日本で起きていることを「労働」という観点から、そして今後の提案として「里山資本主義」というお金ではないものを大切にする暮らしを实践している真庭市を訪れ考える。ルワンダは現在アフリカの奇跡と呼ばれるほどの経済発展を遂げている。発展がもたらす負の影響について日本人・ルワンダ人で考え、どのような発展が望ましいのかを議論し考察する。

### 企画全体目的

1. 日本、特に東京で起きている「発展による弊害」について、労働問題を通して学ぶ
2. 真庭市で取り組まれている「里山資本主義」の考え、暮らしについて学ぶ
3. 経済発展を遂げた日本、東京が今後目指すべき発展、国民の生き方・暮らし方について考える
4. 現在、経済発展を遂げているルワンダが、今後どのような発展を遂げていくべきか、議論し、考える
5. 「発展」がもたらす良い面、悪い面について考える



#### ■真庭市とは

真庭市は岡山県の県北に位置し、豊かな自然に恵まれた地域である。風情ある街並みの勝山や工芸品、豊かな食文化など、日本の伝統が現在の暮らしにも息づく場所であり、湯原温泉をはじめとする天然温泉や、ジャージー牛で有名な蒜山高原などの変化に富んだ自然も堪能することができる。今回の招致では、真庭市役所、株式会社銘建工業のある久世地区、地産地消を大切に生活する中和地区、蒜山高原を訪問した。今回私たちは、高齢化や過疎に喘ぐ「地方」の中でも、官民連携し、地元の良さを活かした豊かな生活を送る真庭市での生活を体験しながら、自然と人とのつながり、地域を支える力がどのように生み出されるのかを学んだ。

# 真庭市役所訪問

## —真庭市の暮らしを知る—

担当者：島村志保子

### 企画概要

日時：2015年8月10日（月）10:00-12:00

場所：岡山県真庭市役所

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー  
（ルワンダ人4名、日本人4名）、  
京都大学2年 大西芽衣さん

協力者：真庭市役所 福井学様、真庭市地域おこし協力隊 松尾敏正様、一般社団法人真庭観光連盟 森脇由恵様、他皆様

### 企画目的

日本の地方の暮らしを、真庭市の例を基に知る。

### 活動報告

真庭市の暮らしや、産業についてそれぞれの機関の皆様からお話いただき、質疑応答を通して真庭市への理解を深めた。以下、お話しいただいた内容の要約である。

#### ■バイオスタウン真庭について

（一般社団法人真庭観光連盟 / 森脇由恵様）

真庭市は2005年に市町村合併によってできた、岡山県の中で一番広い市である。8割が森林で覆われ、そのうち6割が人口森林なのだが、活用されずに眠っている。その資源に着目し、発電を行う事業「木質バイオマス発電」を始めたのが真庭市である。出力で比較すると原子力発電所とは大きく引けを取るが、会社や地域にとっての経済効果が生まれ、雇用の創出や、視察ツアーの開設といった新たな事業に繋がっている。「バイオマスツアー真庭」の一回の参加者は約40名、年間で3,000人ほど、企業や大学生、中には国外から真庭市のバイオマス事業を見学しに来る人も存在する。バイオマス事業の見学だけでなく、地元の食材を使った昼食や、勝山町並み保存地区なども訪問し真庭市について知ってもらえるツアーとなっている。

#### ■真庭市の自然と四季

（真庭市役所 / 福井学様）

真庭市には自然豊かな場所である。蒜山高原や湯原温泉などの観光スポットをはじめとして、桜や青々とした高原、雪景色など、四季折々の美しい景色や生き物と触れ合える。写真を見ながら、ルワンダや東京、大阪、広島とはまた違った、真庭の空間を紹介していただいた。

## ■地域の暮らし

(真庭市地域おこし協力隊 / 松尾敏正様 他3名)

年齢層やジェンダー、職種の異なる4名の真庭市在住の方から、真庭市での暮らしについて学生からの質問形式で伺った。皆さん真庭での暮らしは、他に暮らしたことのある大阪などと比較しても心地よいものと仰っていた。真庭の暮らしでの欠点は、店や学校が遠かったり、交通が不便だったり、高齢化、そして冬の寒さや虫が多いとの話も伺ったが、それを補う手段(ネットショッピングやスクールバスなど)も存在するし、朝早く起きて夜遅くまで仕事をし、人間味がなくなってしまうような都市での生活は真庭にはなく、伝統とテクノロジーがバランスよく存在する真庭は住み心地がよいとのことだった。東京では一日の中でも仕事か趣味かの二者択一であるが、真庭市は自然を感じながら両方追い求めることができ、みんなで楽しく暮らすことができる土壌があるのだ。

## 感想

担当者(島村)



印象に残ったのは、地域おこし協力隊の姜さんが日本の地方に元気がないことに対して話して下さったことで、「田舎に仕事がないのは確かに事実であるが、それは開発していないだけであり、やることはたくさん存在する。行政も消費者も距離が近いから何でも始めやすいし、都市であろうがなかろうが、そこにいる人とチャンスをしっかり掴むことができれば生きていける。」と話されていたことである。過疎や手つかずの森林、農地は、解決できるはずのものである。グローバルに憧れて、東京や海外での生活を夢見がちであ



るが、真庭には普通に東京にいればいい仕事もらえると思えるほど英語が堪能だったり、人脈力のある人たちがたくさんいたりした。その人たちが田舎で暮らすなんてもったいない、という風に私の目に映ったかというそうではない。表現が難しいのだが、色んな経験をした中で、それぞれが生きがいを見つけてそこにいるように感じた。ルワンダの学生も「真庭が素敵な場所なのは、森林に恵まれたからでなく、そのコミュニティを愛せるいい人たちがそこにいるから。だから簡単に他の場所がまねするのは難しいね。」と話していた。それぞれの場所で時間をかけてコミュニティを大事にできる人たちを育てていくことの大切さを学んだ気がした。

企画参加者 (Nadine / 島村訳)

真庭市は、大阪や広島と比べると気候もよく、自然豊かでとてもいいところだと思った。真庭市役所での話はとても興味深いもので、行政の人たちは地域の人のためにとてもいい仕事をしていて、よいリーダーシップの参考になった。ルワンダには日本のようにはっきりとした四季はないから、いろんな景色が見ることができて素晴らしい。昼食に真庭市長と、いろいろな話ができて非常に感銘を受けた。

(市役所の方々と)

# 銘建工業訪問

担当者 渡邊侖

## 企画概要

日時：8月10日（月）

場所：株式会社銘建工業

協力者：株式会社銘建工業の社員の方

## 企画目的

- ・真庭市が考え、実践しようとしている「里山資本主義」を民間企業の視点から考える。
- ・「里山資本主義」を実践する上で大切な考えであるバイオマスについてその仕組みや課題を知る。

### 【銘建工業概要】

銘建工業の工場の中を視察させていただいた後、社員の方よりお話を伺った。近年、新たな再生エネルギーとして注目され、真庭市が市をあげて取り組んでいるのが、木質バイオマスである。銘建工業では、1970年より製造過程でできたプレーナー屑や木の皮等を燃料として活用する取り組みを行っている。1997年に、本格的にボイラー発電設備を設け、2005年現在、工場電力のほぼ全量を賄っている。2003年より、RPS方に基づく申請許可売電を開始。工場の暖房や木材乾燥、ホットプレスにも蒸気を利用している。現在、銘建工業は、工場が4拠点、設計・営業の拠点が2つ、物流の拠点が2つある。

### 【ペレット化について】

銘建工業は、集成材を生産する過程で発生するプレーナー屑を、小さく固めてペレットにしている。このペレットは、貯蔵したり、輸送したりする際に用いる。一般的なウッドペレットの作り方は、木材料の確保→均質化→乾燥→コンパクト化とペレットの体裁への整え→販売の順である。しかし、真庭、銘建工業の場合、製造過程に出た屑より、一気にコンパクト化とペレットへの体裁の整えが可能となっている。

### 【バイオマスタウン真庭】

現在、真庭市はバイオマスタウンを掲げている。森にある不要になっている木材を切り、そして木材加工の工場の製造過程などで出された屑と合わせ、バイオマス集積基地等にてチップ化をしている。これを地域関係団体で構成された真庭バイオマス発電株式会社により、10,000kwのバイオマス発電を行っている。これは一般家庭2万2千世帯分の需要に相当する。

## 感想

印象に残ったのは、バイオマスタウン真庭の構想だ。官と民が連携し、バイオマスタウンを作り上げていることに驚いた。民間として銘建工業で木材加工を行いつつ、行政も協力して、その加工プロセスを活用して、一般家庭にもバイオマスを使えるように整備する。

真庭市が考え、実践している、バイオスタウンそして、「里山資本主義」はこのような地域としての連携があったからこそ、実現しているのだと今回訪問して感じた。(渡邊伶)

参考

株式会社銘建工業 HP

<http://www.meikenkogyo.com/company/contents/future.html#future3>

(2015年9月20日アクセス)

(勉強会の様子)



(銘建工業で話を聞くルワンダの学生)

## 小さな里山資本主義—地域に根差した生活を学ぶ—

担当者：島村志保子

### 企画概要

日時：2015年8月11日（火）9:00~11:00

場所：津黒高原スキー場駐車場、津黒高原荘

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

（ルワンダ人4名、日本人4名）、

京都大学2年大西芽衣さん

協力者：一般社団法人真庭観光連盟

赤木直人様

### 企画目的

産業工業化が進んだ日本の中にある、ローカルな暮らしを知る。

### 活動報告

津黒高原スキー場駐車場近くの場所で木材を集めて薪に加工し、津黒高原荘などの薪ストーブや給湯器を使用しているところに販売する事業を行っている方にお話を伺った。銘建工業の規模ではなく、顔の見える生産者、消費者の間で行う事業への思いを伺った。実際に使用している津黒高原荘の薪ボイラーも見せていただいた。以下は、赤木さんから伺ったお話し 요약である。

#### ■エネルギーの自給自足

（一般社団法人真庭観光連盟 赤木直人様）

都市ではお金をいかに稼いでいくかが大事になると思うが、真庭で大切なのは安定して生活が維持できることである。必要な分だけ、必要なときに手に入れられる生活のために、地域の人にもちゃんとお金が落ちるよう、運搬や加工、そして販売を、地元のアルバイトを雇いながら運営している。木を集めて、加工する場は一つのコミュニティ化としていて、今は15人ほどだが3年後にはもう少し規模を拡大させて行いたいと考えている。70代以上の人にとって、赤木さんが行う小さな里山資本主義（地産地消）は当たり前のことだったが、50、60代の人になってくると、高度経済成長を経験し、グローバルな資本主義経済しか知らない。昔行われてきた地元の資源を活かした地域のあり方を今後も多くの人に伝えたい。

### 感想

担当者（島村）

昔は当たり前のように裏山で木を切って、自分たちの食事作りや暖をとるのに薪を使っていた。それが海外貿易で石油が使われるようになってから一変した。企画でしっかりと里山資本主義を学ぶまでは、今更、昔のエネルギー調達に戻るなんてと私も思っていた。しかし、遠い国の海外政策でいきなり石油価格が高騰すると、収入が安定して一定の地方人にとっては耐え難いしわ寄せが確実に起こっていた。多少の労力はもちろん必要だが地

元で取れるものは価格が安定している。他で災害がおこって、石油の供給がストップしても、自分たちの持てる資源で生活が維持できる。さらにその事業を進めることで、地域に雇用が生まれる。そうすることで地域の外へ出ていく人も減っていく。そんな循環を作ろうとしている赤木さんの事業に私もルワンダの彼らも興味津々だった。資材置き場は決して立派なものではない。しかし地域を思いやり、長期的に地域が残っていくことを思い描いた事業の姿は、私たち若者こそが引き継いでいかなければならないものだと感じた。

企画参加者 (Emmanuel / 島村訳)

赤木さんの地元の人を思いやりながら事業を行っているところが素晴らしいと思った。ルワンダでは巻き割りは学校で行ったりする。赤木さんが使っていた機械を使えばもっと簡単に多くの木を割ることができる。もう少しコストが下がるとルワンダでも使えるようになると思う。津黒高原の木はルワンダとも似ていた。真庭の人たちはみんな親切で、まるで家にいるかのように心地よかった。素晴らしい場所だった。



(集積所での様子)





## 労働問題の現状 解決策～NPO 法人 POSSE との勉強会 パソ ナグループ訪問

担当者：柴谷直美

### 企画概要

日時：2015 年 8 月 13 日（木）11:00～17:00

場所：パソナグループ本部

〒100-8228

東京都千代田区大手町 2-6-4

協力者：

NPO 法人 POSSE

パソナグループ人事部山本哲史様

パソナグループ広報室梅原あい子様

を始とする人事部、社員の皆様

### 企画目的

「日本が戦後どのようにして発展を遂げたのか」ということについてルワンダの学生に聞かれることは圧倒的に多い。100 日間で約 100 万人の生命が奪われたといわれるジェノサイドを経験して今年で 21 年経ったルワンダでは、現在、農業分野を中心に経済成長が著しい。世界銀行の「Doing Business（投資環境ランキング）2015」では、全世界 189 カ国地域中 46 位、アフリカでは第 3 位、東アフリカ共同体（EAC）では第 1 位と、かなり高い順位を占めており、「アフリカのシンガポール」とも形容される。そのため、ルワンダの学生たちは、「自分の国を発展させる」ということへの責任感と夢が特に非常に強く、「発展」というキーワードについてかなり高い関心を抱いている。

発展と聞くと、良い面を思い浮かべることがもちろん多いかもしれない。しかし、発展によってもたらされた弊害が必然的に生じてきたことも事実である。そこで今回の企画では、以下の三つの目的をもとに計画、準備、実行された。

まず、ルワンダの学生たちと共に、日本の、特に東京という都市での発展によってもたらされ、現在も大きな問題として残る「労働問題」について学び、発展の良い面だけではない弊害の面も学ぶことを一つ目の目的に設定した。

次に、そのような発展の弊害としての「労働問題」を学んだ上で、今現在東京でそのような弊害をもたらさない、発展と上手く並行した働きについても学ぶ。今回、従業員の働きやすさ 環境への配慮 そして雇用関連を始めとする様々な事業内容で有名な民間企業、パソナグループ様の東京本社に赴き、そこでの取り組みについて学ぶことで、そのポジティブ面の働きについても学ぶことを二つ目の目的に設定した。

この東京での企画の前には岡山県で「里山資本主義」とも称される新しい発展の形とそのメリット・デメリットを学び、そこでの人々のライフスタイルを体験した。そして、その後、岡山県で得た経験、知識、感覚や個人個人感じた感想と、東京都という大都市での発展のあり方、メリット・デメリット、人々のライフスタイルの二つを参考にして、比較する形で、「これから自分たちがどのような未来を、発展を、築いていきたいか」「自分たち自身がどう生きていくか」を、日本人メンバー、ルワンダ人メンバー関係なく、共に学び合い深め合うということを三つ目の大きな目的として設定した。

## 活動報告

当日の流れは、午前中は、NPO 法人 POSSE メンバー、一橋大学生の諸富様より、労働問題についての勉強会を開催していただき、その後はパソナグループ本部「アーバンファーム」の社内食堂にて昼食を頂いた。午後よりパソナグループ本部「アーバンファーム」見学、そしてパソナグループ広報室の梅原様より、パソナグループ紹介を行っていただいた。以下では順に当日学んだことを記す。

### 【労働問題-NPO 法人 POSSE】

NPO 法人 POSSE は、10 代~20 代の学生を中心として 2006 年に設立、今日まで労働問題や貧困問題に取り組んできた NPO 法人である。その活動内容は、「労働相談、労働法教育、調査活動、政策研究 提言<sup>1</sup>」、また雑誌の発刊など多岐にわたっており、年間実に 1500 件の相談に対応している。本企画の午前中には、その NPO 法人 POSSE のメンバーである、一橋大学四年生の諸富氏から「日本の労働問題-過労死問題からみる日本の労働の現場」と題したプレゼンテーションを行っていただいた。

その内容によると、過労死とは、「業務における過重な負荷によって脳・心臓疾患を原因とする死亡、もしくは精神障害を原因とする自殺による死亡」をいい、その主な原因は、長時間労働、不規則労働、深夜労働、連続勤務などが挙げられている。厚生労働省の資料によれば、勤務問題を原因の一つにする自殺の件数は 2011 年の 2,689 件をピークに、2013 年の時点でも 2,323 件となっており、統計に表れる数字だけでも毎年年間 2,000 件は超えている<sup>2</sup>。日本政府によって過労死ラインという、過労と認定される残業時間を「月 80 時間以上」と設定されており、労災認定のときにはこれが基準となっている。諸富氏は三つの過労死の事例を挙げながら、過労死の実態を皆に伝えていった。また日本の年間平均労働時間にもふれられ、日本のフルタイム労働者の約 25%が、週 60 時間以上という、過労死ラインを超えた労働時間の中で働いているという現状、脳心臓疾患の労働災害の請求件数は 1988 年の 676 件から、2007 年の段階で 931 件にまで増加したことが挙げられていった。

これらの「働きすぎ」の原因として、諸富氏は大きく四つのことを挙げていった。一つは、日本政府による、労働時間規制の欠如、二つ目は、白紙契約や人格評価などが中心の日本型雇用、三つ目であり、そして主体的な要因として挙げられたのは、労働組合と企業との癒着である。そして最後は、ブラック企業の問題であった。

質疑応答では特に、ルワンダ人メンバーからの、過労死の実態に関する質問が多かった。また、それを改善していくためにできることの案としては、「政府がまずよりよいリーダシップを発揮し、法令を定めていくことしかない」という意見も見られた。また、NPO 法人 POSSE の活動そのものについての質問も多く、「これまで活動を通して成果を目で見ることはできましたか？」といった質問も中にはあった。

<sup>1</sup> NPO 法人 POSSE ホームページ、「POSSE とは」、  
[http://www.npoposse.jp/whats\\_posse/index.html](http://www.npoposse.jp/whats_posse/index.html) (9月20日アクセス)

<sup>2</sup> 資料 4 過労死等に係る統計資料、厚生労働省、<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11201000-Roudoukijunkyo-ku-Soumuka/0000069063.pdf> (9月20日アクセス)



(勉強会の様子)

### 【民間企業-株式会社パソナグループ】

午前中の POSSE 諸富氏との勉強会のあとは、パソナグループ様の社内食堂にて昼食をご馳走になった。パソナグループは、その本部ビルにてトマトやきゅうり、稲まで野菜や果物が豊富に栽培されている。そして壁面もグリーンカーテンとなっており、全て含めると 200 種類以上の植物が栽培されており、その独自のエコフレンドリーな社風を貫いてきている。

社員食堂では、本部ビル内で栽培された新鮮な食材を使ったボリュームも満点な料理を、手ごろな価格で提供しているという定評もある。これまで数々のメディアにも紹介されたことのある大変有名な社員食堂である。ルワンダ人メンバーもそのおいしさと、社員の方々の真心に大変嬉しそうであった。

昼食を終えた後は、人事部担当者の方より、社内の案内を行っていただいた。社内には、沢山の工夫がなされていた。働く社員一人ひとりが自由にコミュニケーションを取り合えるよう配慮されて作られたアミーバ型のデスク、グループ会社である株式会社パソナハートの運営のもと、何らかの身体的もしくは精神的な障がいを持つ方が製作したアートの数々、自然光も沢山入る明るい社内、社内設置の保育所、音楽活動もすることができる大きなホール、雰囲気の良いカフェに、社内設置のネイルサロン、そして屋上や壁、そして社内にも沢山の植物や野菜、果物の数々等、文章化するときりが無いほど沢山あった。



(屋上にて)

それらは全て、目新しさや清潔さもさることながら、究極には働く人々、そしてパソナという会社に関わる全ての人の健康と快適さ、心地よさを配慮した結果という印象を皆受けていた。<sup>3</sup>この社内案内を通してまずパソナグループ全体のイメージや、社会環境人に優しい雰囲気、サービスなどを実際に体感することができた。

最後は広報の梅原様より、英語でパソナグループの企業紹介のプレゼンテーションを行っていただいた。パソナグループの歴史や現在行っている事業紹介、経営理念とこれからについてご紹介していただいた。

1976年、創業者南部靖之氏の「育児を終えてもう一度働きたいという女性が適切な場で働きやすい仕事を創りたい」という思いから、当時まだ日本に労働者派遣法<sup>4</sup>も人材派遣という仕組みもなかった時代に現在の株式会社パソナグループとそのグループ会社の原点、株式会社テンポラリーセンターが「人材派遣事業」を開始した。株式会社パソナグループは、その創業以来掲げる「社会の問題点を解決する」という企業理念のもと、「ソーシャルソリューションカンパニー」として人生のあらゆる場面をプロデュースすることを使命としている企業である。

今日本が抱える問題であるのは、人口減少、少子高齢化、それに伴う労働力減少、地方経済の衰退等々挙げられる。それらの問題に対しても、パソナグループは、様々な事業からそれらに対しアプローチしている。人材派遣事業はもちろんのこと、インソーシング（委託 請負）や HR コンサルティング、教育・研修サービス、保育所事業、デイケアセンター事業、アウトソーシング（福利厚生）、転職支援、「才能に障害はない」をコンセプトにした障がい者の就労拡大事業、そして海外での従業員支援等実に様々なことを行っている。特にその中で重要なキーワードとしてお話していただいたのが、女性、若者、シニア層にフォーカスした事業や地方創生事業についてであった。

今後、世界は人工知能が増えることで10年から20年の間で約半数のアメリカの職業が自動化されるリスクが高いということが明らかになった<sup>5</sup>。また、2011年に小学校に入学した子どもたちの約65%は今存在する職業に就かないというデータも発表された<sup>6</sup>。これらを見据え、民間企業が、パソナグループが何を出来るのか、常に熟考しながら、新たなイノベーションを起こし続けている。

ルワンダは国会における女性議員数が男性議員数を上回っており、現在世界で国会における女性登用率をもっとも多い国である。あるメンバーは、日本の人たちはルワンダにつ

<sup>3</sup> 詳細についてはパソナグループホームページを参照  
<http://www.pasonagroup.co.jp/>

<sup>4</sup> 正式名称は、「労働者派遣事業の適正な運営の確保及び派遣労働者の保護等に関する法律」（1986年7月制定、2015年9月改正）

<sup>5</sup> オックスフォード大学による研究  
gizmag, “47% of US jobs under threat from computerization according to Oxford study”(Sep 24, 2013) <http://www.gizmag.com/half-of-us-jobs-computerized/29142/>  
(Oct 5<sup>th</sup>, 2015 access)

<sup>6</sup> 米デューク大学による発言  
pc オンライン、「今は存在しない職業への準備—『21世紀型スキル』～情報化によって生まれる“新しい職業”に適した“新しい教育”（2012年5月9日）  
<http://pc.nikkeibp.co.jp/article/column/20120508/1048402/>  
(2015年10月5日アクセス)

いてまだまだ知らないため、日本企業にどんどんルワンダに来て欲しいと語っていた。日本はルワンダからも学ぶ必要があるということと同時に、日本の民間企業の持つ使命とその活動の大きな意義について、パソナグループの企業紹介のプレゼンテーションを通して皆が考えられたことであろう。



(本部ビル「たかたのゆめ」稲と共に)

#### 【総括】

今回の企画全般を通して、前半では労働問題という日本の発展により生じ、今も尚残存している弊害について学び、意見交換をした後、グループ会社全体を含めたパソナグループの歴史、社会貢献性、社員を大事にする社風やその事業内容、そしてそれらの軸となる「社会の問題点を解決する」という企業理念等を実際に目で見て、そして説明を受けて学ぶことができた。また単に学ぶだけではなく、そこから日本ルワンダ双方がこれからどうしていくべきか、私たち個人レベルでこれからどのような人生を歩むべきか、考える好機となった。

最後に、今回会場を提供していただき、今回の企画を承諾し、協力してくださった株式会社パソナグループ人事部山本様をはじめとする人事部の皆様、広報の梅原様、社員の皆様、そして労働問題についてお話して下さった NPO 法人 POSSE の諸富様、その他今回企画の計画、準備、実行、事後総括にご協力くださった全ての方々に厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

#### 感想

(日本人メンバー)

今回パソナグループ様の自社ビル、アーバンファームビルにて労働問題の勉強会、社内見学、そして企業概要・歴史・そしてその理念の学習をさせていただき、新たな沢山の日本の可能性に気づかせていただいたと思っている。労働問題という大きな課題はまだまだ簡単には解決されず、苦しむ人が一人でもいる限りその問題は解決されたとはいえないことも事実である。しかしその一方で、NPO 法人 POSSE 様の存在・考え・行動そのものの持つ可能性を感じた。特に諸富氏が「今の日本の仕組みを絶対に変えたい」と意志に燃える瞳で語っていたことも印象的であった。それらを見て、共に議論し、学びあう中で、意志を持った一人が立ち上がることで起こりうるイノベーションを既に見た思いがした。

そしてパソナグループ様においても、「社会の問題点を解決する」という理念に根本から取り組む日本企業があるという存在そのものや、その企業の働きの根本を貫く理念、社員の方々一人ひとりの思い… それらを知ることができたことにも、日本の民間企業の視点からの可能性、未来へのワクワク感を抱くことができた。そして最後に、これらを学び、未来をどうしていこうかと真剣に考えられる環境や、私たち一人ひとりの存在、その全てに可能性を感じた。今回はマイナス面、ポジティブ面を見ようという目的が大きくあったが、それらを学べたことに加えて、新たな今後の「可能性」を見つけられたことは自分にとって大きな収穫であったと感じる。

(ルワンダ人メンバー)

日本の発展の良い面以外を見たのは初めてであったし、日本人の人たちはその十分に発展した国の中で一般的に幸せな生活を送っているものとばかり思っていた。だからこそ何故、その職が自分にとって大きな負担となりすぎているときに他の道を探せず、自殺をしようまで追い込まれてしまうのか、分からない。人々がもし昔の良くない慣習にとらわれすぎて、それが人々の人生にとっての障害となりうるのなら、今のまま慣習を固持するか、それを変えていくか決めていく必要があるはずである。日本人の人たちの「一度働いた会社をやめない」ということに対する美徳意識なども、それに関連しているのではないかと感じた。他国の仕組みをいい意味で取り入れていくことができればベストだと私は思う。パソナグループは環境にも優しく、人にも優しく、その事業も軸がずれないから素晴らしいと思った。パソナグループのような企業を始め、日本の企業がどんどんルワンダに入ってきて欲しいと願う。今回のトピックは大変興味深かったし、東京で働く人々のライフスタイルについても学ぶことが多かった。ありがとうございました。

# これからの東京を考える

担当者:渡邊伶

## 企画概要

日時:8月10日(金)

場所:早稲田大学

協力者:内閣官房 東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局 内閣参事官補佐 西村二郎様

## 企画目的

2020年にオリンピック、パラリンピック開催を控えている東京の、今後の目指している都市計画について学ぶ

経済発展を遂げた東京で、今後どのようなことが重視されるのか、どのような点を改善していく必要があるのかを考える

## 活動報告

2020年オリンピック・パラリンピックに向けて、東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部(以下、TOCOG)の取り組み、計画をお話していただいた。以下、その内容を記載する。

### 【TOCOGが行う大まかな取り組み分野】

- 1 安全
- 2 地方の創生
- 3 交通
- ④外国人観光客向け対応
- ⑤バリアフリー
- ⑥スポーツ
- ⑦文化・環境の対応

以上の分野で、それぞれオリンピック・パラリンピックに向けた計画や開発を進めていく。

### 【1964年の東京オリンピック】

首都高速の改良や新幹線、東京モノレールの開通、日本武道館や駒沢公園の建設などが行われた。オリンピックを通して、様々な開発が行われ、日本の発展が進んだ。

### 【パラリンピック】

オリンピックとパラリンピックが同時開催されるようになってから、二回目の開催となるのは、東京が初めてである。そのため、2020年の東京はパラリンピックのムーブメントを高めていく大会にしていくことを目指している。

2012年のロンドンオリンピックは、パラリンピックが成功したとされており、そのロンドンの成功から学んでいる。

#### 【ハード面とソフト面でのバリアフリー】

TOCOG は、ハード面とソフト面、両面からアクセシビリティを高めていく計画をしている。その大まかなグループとして、TOCOG は、建設・交通・コミュニケーションサービスの三つに分けている。建設分野では、競技会場の座席、競技会場のトイレ（通常のトイレ15に対して、アクセシビリティのあるトイレを配置する）エレベーターの大きさをより広くすること等について取り組んでいく。

#### 【暑さへの対策】

2020年の東京は、夏に開催されるため、多くの観客もこの夏に日本を訪れる。



2020年の試合における選手と観客の暑さに対する省連携の会議が開かれ、様々な施策を考えている。例えば、空調を完備した座席を設置する、木を植える、ドライミストを完備するなどである。また、日本の持つ技術を用い、道路の表面からくる暑さを和らげようとする試みも行っている。

#### 【ホストタウンとして】

地方自治体と2020年にオリンピック、パラリンピックに参加する国の間で、人間的、経済的、文化的なフィールドで相互交換を促進して、日本を「スポーツ大国」にすることを目指しています。

また、グローバル化と地方創生を推進し、2020年の東京五輪に向けて、観光業を促進しようとしています。

#### 【他言語対応】

海外からくる選手や観戦に来る外国人のために、他言語、特に英語での対応をしていく。主に、交通・道路・観光&サービス面で取り組んでいく。

また、駅の英語表記の統一化やレストランなどの飲食店で、含まれている食材（豚やお酒、カニなど）、トイレのマーク、緊急時の避難場所のマークなどもより分かりやすくする。

#### 【日本の文化】

歌舞伎や伝統工芸品、富士山や遺産、和食や生花、木材などの伝統文化、そしてアニメやファッション、サービスなどのいわゆる「クールジャパン」、それぞれの日本文化を2020年東京五輪に向けて、世界にアピールしていく。

#### 感想

本企画は、東京の今後、東京のポジティブ面に焦点を当てた企画である。



進学でも、就職でも、東京を始めとする大都市圏に人が集まってくる、というのが現在の日本で起きていることである。特に東京は日本経済の中心地であり、人々は比較的高所得で、やりがいのある仕事も多い。物質的にも金銭的にも恵まれた暮らしを送ることができる。そのような東京は、今後どのような「発展」をしていくべきなのか。すでに発展している東京がさらに発展させる部分がそもそもあるのだろうか。その発展を考える際に、重要となるのが2020年の東京オリンピックパラリンピックであろう。西村氏のお話の中で、ソフト面とハード面両方の計画を進めていくとあったが、東京において、重要なのはソフト面だと考える。例えば、外国人や障害を持っている方を意識したサービスや標識などである。

もちろん暑さなどの対策や障害を持っている方のために、ハード面の計画もしなければならないが、すでに物質的には恵まれ整っている東京において重要となってくるのは、過ごしやすさや暮らしやすさだと考える。それには今回の本会議で考えた労働問題の対策も含まれる。2020年の五輪を境目に、東京がもっと暮らしやすい都市になっていることを願うと同時に、私も社会人として今後貢献していきたい。

(西村氏と)



# 東京岡山企画 リフレクション

担当者：渡邊伶

## 企画概要

日時：2015年8月14日（月）

場所：早稲田大学

## 企画目的

・岡山、東京でそれぞれ感じたこと、考えたことを、自分の中でまとめなおす。  
・東京の発展による弊害や、今後に向けての計画、岡山の「里山資本主義」の考え方・暮らし方を踏まえ、ルワンダと日本、それぞれの「発展」について考え、議論する。  
※ 里山資本主義とは、東京などの大都市での大量消費や働きすぎといった暮らしではなく、地域の資源を活かし、食糧やエネルギーなど自分達でまかなえるものはまかない、精神的な豊かさを大切にするという暮らし、考え方である。

### 【ディスカッション形式】

(1)各自で考える、(2)日本人・ルワンダ人で分かれてディスカッション、  
(3)日本人・ルワンダ人混ざってディスカッション、の形式で行った。

### 【ディスカッションテーマ】

- ① 東京での暮らしについてどのように考えるのか。  
・労働問題の現状や2020の五輪に向けた今後の開発を踏まえて  
・良い点、悪い点など
- ② 「里山資本主義」の考えについてどのように思うか。  
・良い点、悪い点  
・実現可能性など

### 【ディスカッション後のまとめ】

「どのように自国を発展させるべきか」について個々人で意見をまとめてもらった。

### ■日本人学生 A

ルワンダは、ルワンダメンバーの発言のように、里山の発展と資本主義的発展の両方を遂げるべきだと思う。国民が社会的公共的な意識を持って人間関係や資源を持続させるとともに、資本主義的な考え方をもとにお金を生み出す仕組みや戦略を立てて生計を立てていくべきだと思う。それは非常に難しいと思うし、日本人もそう思って働いてきたものの結局公害や孤独化という問題を生み出してしまった過程が分かる。日本にはこのような過去を抱えるからこそ、伝える役割を担えるし、担わないといけないのかもしれない。

### ■日本人学生 B

日本は物質的には十分すぎるほど発展していると思う。かといって、今の物質的豊かさ

をある程度捨ててまで昔の“古き良き日本”の形に戻れるかというともそれも違うと思う。物質的發展そのものに問題があるのではなくて、そのテクノロジーの発展も含めた物質的（環境）の発展に人々の精神がついていっていないし、マッチしていないことが問題なのではないか。これから人口は減るし労働力も縮小、その結果日本として国際的な経済地位は下がるのは間違いないけれど、極端なことを言えば地位の上下よりも、日本が日本に住む一人一人にとって本当にいい環境なのか、一人一人が自分自身を心から大事にして、人として偉大な人、偉大なリーダー（生活に根ざして、一人一人のために全力を尽くせる真の勇気がある人、平和を求められる人）がどれだけ増えるのか、その精神的・文化的発展が求められていくことになるはずだと思っている。

#### ■日本人学生 C

一番良い形、というわけにはっていないだろうが、今こうして里山資本主義といった



考えが出てきたのは、70年代からの高度成長や、一生懸命発展、発展と突き進んできた時代があるからだと思うし、日本の発展してきた歴史を良い悪いと判断することは難しい。世界第3位まで発展してきた今、こうして話しあっているように、若い世代は特に、今の日本に問題意識を持って見ることができ、行動に移すまでにいかずとも、こうした議論を活発化させることで日本の発展の仕方をより良い方向に変えていけると思った。

#### ■ルワンダ人学生 A

ルワンダは現在、発展途上である。1994年のジェノサイド後の今の経済成長を維持させることがまず大事である。特に教育や技術面での成長をしていくことが大切だと考える。全ての考えられる部門において、一生懸命働けば、ルワンダは良い発展を遂げると考える。

#### ■ルワンダ人学生 B

ルワンダは現在とても良い状態で発展をしていて、その発展は他国からも認められている。そのため、すでに発展した他国から学びつつ、この良い状態の発展を維持させることが大切だと考える。しかし、今のルワンダには里山資本主義的な考えはない。ルワンダの人は、まずお金を手に入れることを考えている。

(ディスカッションの様子)

#### 感想

そもそもなぜ私がこの企画を考えたのか、その経緯を簡単に記しておく。ルワンダは1994年に大虐殺があり、その後「たった」の21年間で急速な発展を遂げた。その様子から「アフリカの奇跡」と呼ばれており、上記の感想からもわかるように、ルワンダ人自身

も自覚している。もちろん発展することは、人々の生活も「豊か」になること。とても良いことである。しかし、私は発展により失われてしまうものがあると思っている。それは精神的な「豊かさ」である。家族や友達と暮らす、ゆったりとした時間、自然に囲まれたのどかな暮らし。もちろん、発展をした場合、お金を稼ぐことができ、物質的な豊かさは手に入る。ここで重要な点は、現時点でのルワンダのような国は、毎日食べるものがないほど、物質的に恵まれていないのか、ということである。もちろん、地域による。しかし、暮らせるだけのお金は稼げているのではないだろうか。選択肢としては、発展せず、このままの暮らしを維持するという点もある。それをしないのは、国際的な立場、という点もあるが、国民の「もっと物質的に豊かな暮らしがしたい」という思いもあるだろう。日本もかつては、戦後からの経済発展を遂げた。その日本では、東京企画で勉強したような労働問題も起きている。人々の関係は希薄になりつつある。精神的な豊かさと、物質的な豊かさ、これはトレードオフであり、両立が難しい。これを両立させる発展が里山資本主義である。家族と自分とが生きていけるだけのお金を稼ぐ、食糧やエネルギーは自分たちで賄う、そして、仕事以外の家族や友人との生活を楽しむ。日本の場合、日本全体がそうなるのは難しいが、里山資本主義的な発展をする地域が増え、国民が選択できるようになればいいと思う。

ルワンダの場合、一回発展を遂げ精神的な豊かさの必要性を感じ、里山資本主義的な発展を目指す、という日本的なルートだけでなく、今の段階から里山資本主義発展を目指せないのか、というのが当初の私の考えだった。結果から言うと、それは難しいと感じた。想像はしていたが、一度物質的に豊かである状態を体験しないまま、物質的な豊かさを追い求めない暮らしを受け入れるのは難しい。特に国として、その状態であるルワンダではなおさらである。しかし、幸いなことに良い発展も悪い発展も「事例」は多くある。これらを参考にしてつつルワンダ独自の発展を遂げていくべきだと考える。同時に日本も今後何を大切にして発展していくのか、国民は暮らしていくのか、注目すると同時に、私もその流れの中に、社会人として加わりたい。

## 日本ルワンダ学生会議× 千畝ブリッジングプロジェクト合同学生会議

担当者：渡邊伶

### 企画概要

日時：8月20日（木）

場所：早稲田大学

協力者：千畝ブリッジングプロジェクト

※千畝ブリッジングプロジェクトとは、外交官杉原千畝の功績を伝える「伝えるボランティア」を実践している早稲田大学ボランティアセンター公認団体である。杉原千畝とは、第二次世界大戦中のリトアニアに赴任し、ビザを発行することで、約6000人のユダヤ人の命を救った外交官である。

### 企画目的

- ・杉原千畝のビザを発行したという決断や、そこに至るまでの経緯をもとに、自分個人が「国」とどのように向き合うのかを考え、議論する。
- ・ホロコーストに焦点を当て、負の歴史を二度と繰り返さないために、自国の歴史をどのように習ってきたのか、向き合ってきたのかを考え議論する。
- ・杉原千畝の決断や功績を伝え、ルワンダ人とともに、考えを共有する。

### 活動報告

日本ルワンダ学生会議（以下 JRYC）と、千畝ブリッジングプロジェクト（以下千畝BPJ）合同で、「国と私」「歴史と私」というテーマで学生会議を開催した。今回の学生会議では、第二次世界大戦中のリトアニアで、ビザを発行し約6000人のユダヤ人の命を救った杉原千畝の決断と功績、から国というものに、個々の私がどのように向き合っていくのかを考える。また、千畝BPJが実施している「伝えるボランティア」の話より、二度と繰り返さないために、どのように私たちは歴史と向き合い、習っていくべきなのか、を考える。21年前に虐殺があり、現在経済発展をしているルワンダ人は、国や歴史というものにどのように向き合っているのか、個々の考えとともに、そのような国による違いにも着目して、議論を行った。スケジュールは以下の通り

13:30~13:35	オープニング
13:35~13:45	JRYC 団体紹介
13:45~14:20	千畝 BPJ プレゼンテーション 杉原千畝と千畝 BPJ の活動
14:20~15:00	ディスカッション①「国と私」
15:00~15:20	休憩
15:20~16:00	ディスカッション②「歴史と私」
16:00~16:10	クロージング

### プレゼン概要

#### ■千畝 BPJ 団体説明

千畝 BPJ の活動には2つの柱がある。千畝の功績を伝えることと、ホロコーストの歴史について、特に若い人々に広めること。杉原千畝は WW2 の時にヨーロッパで領事をしてきた。その際、当時の日本はナチス・ドイツと同盟関係にあったにもかかわらず、ナチス・ドイツから逃れてきたユダヤの人々にビザを発給した。これは、命のビザとして知られている。彼の功績を広めるために、ユダヤ人が厳しい時を過ごしたその場所や、彼がビザを出す決断をした場所、例えば、領事館やアウシュビッツ強制収容所などを訪れる。また、都内の高校に行って千畝やリトアニアについての授業を行ったり、高校生をヨーロッパに派遣したり教室での授業から離れて、歴史を身近に感じてもらう取り組みを行っている。

#### ■杉原千畝と当時の時代背景

杉原は 1900 年の 1 月 1 日岐阜で生まれた。杉原は早稲田大学で勉強をし、大学の途中で、外交官若手研修生の試験に受かって、外交官の道を目指した。

杉原はロシア語のエキスパートになるように仕向けられていましたが、実際にロシア語をマスターし、他の言語も流暢に話した。杉原は、フィンランド勤務などを経て、最終的にリトアニアに送られることになった。

リトアニアはドイツとソ連の間にありました。戦争前夜の時期に、両国の軍事的な動きについて諜報するのが彼の役目でした。ドイツでは、ナチス・ドイツが 1933 年に政権の地位を取ってから、反ユダヤ主義が国是とされ、ユダヤ人は迫害がされ、職業が制限されるなどした。戦中には政策として自国の領土から、そしてヨーロッパ、全世界からユダヤ民族を根絶しようとした。この WW2 中の組織的なユダヤ人虐殺をホロコーストという。戦争が始まってから、ポーランドでは、ユダヤ人は厳しい時を過ごした。西側からはナチスが、東側からはソビエトがポーランドを侵攻した。その過程で、ユダヤ難民がポーランドから逃げ出した。そして、1940 年にソビエトがリトアニアに侵攻すると、状況は悪く変わる。多くのユダヤ人たちはヨーロッパから逃げ出すビザを手に入れるのを模索する。ソビエトによる占領下で他の国の大使館が引き上げる中、日本の領事館はリトアニアに残っていた。そして、1940 年 7 月 18 日、多くのユダヤ人が日本の領事館に来た。朝、千畝が起きると、建物の前でポーランドから逃げてきた大勢のユダヤ人が待っている。彼らは、日本を通るのを可能にするビザが欲しがっていた。ヨーロッパを逃げ、シベリア鉄道でソビエトを通り、日本を通過して、アメリカなど他の国に逃げるつもりだった。彼らは着のみで逃げてきたので、十分なお金や必要な書類を持っていなかった。また、彼らの数は千畝 1 人で対応できる数を超えていた。杉原は、本国に許可の打診をするも、許可は拒否された。それは当時日本政府がナチスと同盟を組もうとしていたためである。だんだん彼らの数が増える中、杉原はユダヤ人たちの行く末を心配した。このまま何もしなければ、彼らが殺されるのは明らかだったためである。

その後、杉原は、何度も本国に連絡するも、消極的な返答を貰った。ユダヤ人を見捨てるのか、外務省に従うのか。結果としては良心に従い、ビザを発給することを決めた。その後、杉原は 1 日 300 枚以上のビザを書き続け、2000 枚のビザを発給した。それは、電車の駅が離れるその時まで、ビザを書き続けたと言われている。

#### ■杉原千畝の功績を踏まえての千畝 BPJ プレゼンターの考察

確かに彼は良心に従ってビザを発給した。彼は、第一に来るのは、人道精神や博愛精神だと記している。それだけではなく彼が述べているのは、日本の国益を考えれば、ユダヤ人たちを見捨てたくない。なぜならユダヤ人たちは世界中にいて、影響力を持っているためである。結局、彼はビザを発給し、

2000 枚のビザによって、6000 人の命が救われた。しかしながら、確かに彼は多くの命は救ったけれども、より多くの人が強制収容所に送られて、殺されました。ホロコーストの結果として、600 万人の命が失われたと言われている。それも私たちが記憶しなくてはならない事実である。杉原千畝は自分が正しいと思うことをした。杉原千畝の行動から学べることは、それは、正しいと思うことを貫く勇気である。杉原千畝はビザを発給するのを悩んだが、結局は人道主義が第一だと思い、ビザを発給した。また、日本の国の未来や国益を考えた結果、ビザを出すのが日本のためになるとも考えた。

(プレゼンの様子)

## ディスカッション概要

### ディスカッションテーマ①

#### 「国と私」

個人々が国の未来や利益について考える」ということについてです。国というのは、個人とは切り離すのが難しいものである。それらについてどう考えているのか。

#### ■ディスカッションテーマの背景

杉原千畝は、外交官としては政府の考える国益に従う必要があった。しかし、政府が国益とする国の政策には従わず、彼が国益と信じるものに従いました。

2011 東日本大震災では、イスラエルがすぐに(right away)支援を表明した。これは千畝がしたことに対する感謝のためであるようで、このように、杉原の功績が、国益に繋がっているとも考えられる。杉原の例のように戦時中、政府の考える国益の下で、個人の意見や権利が抑圧されることも時にあった。その反省から、国益という言葉は日本ではあまり公に使われなくなっている。

### ディスカッションテーマ②

#### 「歴史(教育)と私」

#### ■ディスカッションテーマの背景

千畝 BPJ が行っている「伝えるボランティア」の活動について。千畝 BPJ は都内の高校に授業を行う他、ホロコーストや杉原千畝に関する場所を訪れるなどしている。2015 年はホロコーストから 70 周年のメモリアルの都市だが、日本の太平洋戦争と同じように、経験者が少なくなっているという課題がある。負の歴史を抱えるルワンダの学生と、ホロコーストを伝える活動をしている千畝 BPJ の学生と、日本ルワンダ学生会議のメンバーで、二度と繰り返さないために、負の歴史について、どのように向き合っていけばいいのか、考え、議論する。

## 参加メンバーの意見

### ①「国と私」

- ・ルワンダ人メンバーに「大統領の反対を受けたとしても、杉原千畝と同じ行動をするこ



とができるのか」と問うた時に、「リスクがあるのは重々承知だが、人の命を助けるためなら自分も同じことをすると思う。」と言っていたことが、ルワンダ人が政府に従順なイメージを持っていた私には印象的だった。(日本人 JRYC メンバー)

・「国益」には自分の個人の良心を伴わなければならない。「Journalism」にも同様であり、独立した存在であると同時に良心に依存した存在である。しかし「良心」に依拠することは非常に危ういものである。(千畝 BPJ メンバー)

・国の政治家を信じられるのが理想的だけれど、ルワンダとはある種違うフェーズにいる日本は、国家がしっかり政治を監視していかなければならないと思う。(日本人 JRYC メンバー)

・「国益」はその人が何に立ち向かっているのか、何に向き合っているのかでも変わってくると思う。杉原千畝は日本政府の意向に反してでも、VISA を発行することが、国益にかなうと考えた。重要なことは、国益と人権を忘れることなく追い求めることである。(ルワンダ人)

## ②「歴史と私」

・歴史を知り伝える上で重要なのは本だと思う。もし時代が変わっても記述は変わらないし、1 つのテーマであっても情報が断片的でなく、そのテーマを核に様々な情報が入ってきて、それこそが「知識」であると思う。(日本人 JRYC メンバー)

・ルワンダでは「ルワンダ史」「アフリカ史」「世界史」三つを習うそうだ。ただ、何があどのくくりで教えられるかよりも、誰の目線に基づいて変遷されたものなのかそれも知っておくべきだと思った。(日本人 JRYC メンバー)

・私が高校の頃に疑問を感じたのは、日本近代史の授業を行わなかったこと。夏休み中に教科書を読んでおいてとしか言われなかった。これでは大半の学生は真面目に読まない。戦争をしてしまった歴史、その原因や結果を学ばなければ、過去の戦争から学び、それを活用することはできない。近代史を授業で学ぶことは重要である。(千畝 BPJ メンバー)

・「教える」ことは人間を作る。どのような「国民=国」になるかは、自分たちが子どもたちにどう教えるかによる。また、「想像力」の欠如が国民を歴史から目をそらせるという事実もあるのではないだろうか。実際、虐殺された人々に私たちはなれない。しかし、「想像」という追体験で「歴史」と「思い」はつながれる。(千畝 BPJ メンバー)

・私たちは歴史を学ぶ際に、様々な情報ツールを使うことができる。しかし、それらによって情報を知ろうとすると、いくつか不十分な点や見落とされる点が出てくる。私たちは可能なかぎりの歴史を知らなければならない。他人に歴史を教えるには、第一に、彼ら自身にその歴史を見に行かせることだ。体験者の話をきくのは歴史を学ぶ上で良い方法である。(ルワンダ人)





## (ディスカッションの様子)

### 感想

この企画を実施した背景には二つの理由がある。一つ目が、日本は 2015 年、終戦 70 年を迎える。ホロコーストも同じく 70 年を迎える。このつながりから何かできないか、と考えたこと。二つ目が、早稲田大学ボランティアセンター主催の春のボランティアフェアのプレゼンコンテストの予選で、千畝 BPJ のプレゼンを見たことである。千畝 BPJ のメンバーが高校生を連れて、ホロコーストのあった強制収容所の視察に行った帰り道、高校生が発見した「お腹へった」という言葉より、負の歴史を繰り返さないための「想像力」の必要性を訴えていた。この「想像力」というワードが今回の「負の歴史の継承」企画につながるものだと考えた。千畝 BPJ は、高校生に対して、平和教育の授業をする際に、杉原千畝の決断を想像させるような工夫をしているそう。そうすることで、杉原千畝の決断を、他人事ではなく、自分ごとと捉えられるようにしているようだ。二度と繰り返さない、日本の太平洋戦争終了時も、そしてホロコーストの際にも言われてきた。しかし、現実には、世界規模で見ると、繰り返されてしまっている。ルワンダの虐殺を扱った映画『ルワンダの涙』の中にも、ホロコーストを出して、「これと同じことがルワンダでも起きてしまう」といった旨の発現をするシーンがある。このように考えると、世界は過去の歴史から学んでいない、とも言えるかもしれないが、実際に自分が体験していない歴史のことを知り、二度と繰り返さないように、考え、伝え、行動していくのは難しい。どうしても他人事になってしまう。しかし、いずれ戦争を直接体験した世代の人がいなくなってしまう。これはまだ遠い未来だが、ルワンダでも同様である。その際に、どのように負の歴史を語り継いでいくのか、そこでキーワードとなるのが、「想像力」だと考える。過去の歴史に対して、想像力を持って接する、または想像力が持てるような接し方を促す、そして、一人一人が、自分ごとと感ぜられるようにする、二度と繰り返さない、繰り返してはいけない、と思えるようにする、その意識こそが大切だと考えた。アウシュヴィッツ博物館で、外国人として初のガイドに認定された中谷剛氏は、「タブーに立ち向かうのは戦争を体験していない世代」とし、戦争を体験していない、距離があるからこそ、「この歴史をどう理解して、どう将来につなげていけるか」まで議論できる、直接被害を受けた人は、痛みが強すぎてそこまで議論できない、と述べている。

負の歴史を二度と繰り返さないために、私たちには何ができるのか、私たちだからこそできることは何なのか、これからも考え、実行し続けていきたい。(渡邊伶)

参考：

[http://www.huffingtonpost.jp/ibuki-saori/post\\_9105\\_b\\_6738410.html](http://www.huffingtonpost.jp/ibuki-saori/post_9105_b_6738410.html)

(2015 年 9 月 21 日アクセス)



(千畝 BPJ の皆さまと)

# 第三章

学生会議 概要	63
---------	----

## 日本側プレゼンテーション

日本のビジネスの特徴	64
日本の多文化共生社会	67
他者化～なぜ人々是对立するのか～	70
私たちはどのようにステレオタイプを乗り越えるか	73
現代社会におけるノブレスオブリージュについて	76

## ルワンダ側プレゼンテーション

Research on factors which show how Japan is known in Rwanda	78
Traditional Wedding in Rwanda	80
Peace Education in Rwanda / The danger of single story	83
Security in Rwanda	85

## 学生会議 概要

ABOUT STUDENT CONFERENCE

### 実施日

2015年8月15日、17日、18日

### 活動内容

日本・ルワンダ両国の学生がそれぞれの興味・関心のある分野や社会問題などからトピックを決め、プレゼンテーションを行い、そのトピックに関連したディスカッションや意見交換を行う。

### 活動目的

団体の活動理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から、様々なテーマについて深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

### 活動成果

- 1、互いの国に対するより深い理解。
- 2、異なるバックグラウンドを持つ学生同士の、異なる価値観や考え方との出会い。
- 3、団体の将来について、日本側・ルワンダ側双方の真剣な議論。

# 日本のビジネスの特徴

発表者：島村志保子  
発表日時：8月15日（土）

## プレゼンテーション概要

日本の経済発展を支えた要因と、近年の日本企業の成功要因、海外展開の概要についてのプレゼンを行った。

## 実施目的

日本企業が高めてきた技術や差別化の要因を理解した上で、今後ルワンダでどんな事業が行えるかを日本で見た商品などを踏まえてルワンダの学生に考えてもらい、日本人のルワンダへの理解を深めるところを目的とする。

## プレゼンテーション詳細

### ■日本の経済発展の歴史

第二次世界大戦前と後に分けて説明を行った。戦前では、寺子屋などの教育制度や、明治維新の際に積極的に科学などの学問を取り入れたこと。戦後では、戦争特需やエコ製品の開発などの解説を行った。

### ■日本企業の強み

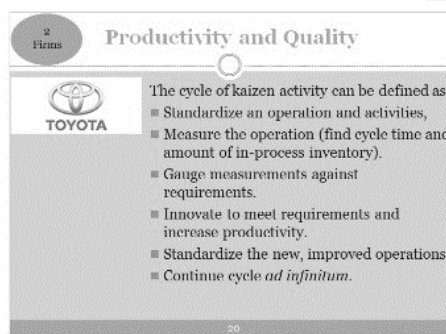
ユニクロ、資生堂、トヨタは海外でも事業を成功させている日本企業である。ユニクロは ZARA や H&M と同じ SPA 方式の生産工程をとるが、ファッション性ではなくライフウェアとしてシンプルと機能性を重視したポジショニングで勝負している。資生堂では丁寧な接客を中国でも実践可能にした研修制度と、理念の共有、トヨタはカイゼンをはじめとするトヨタ生産方式とそのメリットについて説明した。

### ■日本企業と海外事業

欧米、アジア、アフリカにおける日本企業の市場の捉え方について概論を説明した。アフリカについては、東アフリカでも事業を行うホンダがアフリカで直面している問題を取り上げた。

コメントの追加 [2]: SPA 方式の説明を入れた方がいいかと！

コメントの追加 [3]: カイゼン、わかるかな...? 解説いれてもいいかもしれないですね...? どうでしょう...。



(プレゼン資料)

ディスカッション

**Topic1:新しい事業参入によって引き起こされる、環境の変化や衝突から地元の人たちを保護するにはどうすればよいか?**

Emmanuel 君からは、法制度を整える、企業にソーラーシステム等グリーンエネルギーを使わせる、力強いリーダーシップの利用、など政策に関するアイデアがあがった。法制度を整えることはもちろんなのだが、企業がただ搾取したり、資源・労働力を取り逃がをしたりするだけではなく、相手国にも利益をもたらす 3C ビジネスを目指した理念や DNA を企業自体がもたなければならないと思う。

**Topic2:日本企業がルワンダで行える新たなビジネスとは?**

**A チーム結論:ユニクロの展開**

自動販売機や、人材育成の会社の案も出たが、治安や価格の面を考慮してユニクロに注目した。ルワンダにおいて洋服や靴、特に男性用は高く、70 ドルくらいはして日本よりも高い。ユニクロの製品はルワンダのものよりも安いので、ルワンダで販売チャンスがあると思う。

**B チーム結論:100円ショップの展開**

日本にある 100 円ショップの利点は、多くの製品を同じ価格でみることができ、場合によっては他の店よりも安く購入できることである。ルワンダでの主な顧客は若者とし、地元の大学の近くに店舗を設け、化粧品や救急用品、ノート、ペンなどの文具品を販売するのがいいのではないかと思う。ただし、ルワンダには中国企業の安い製品があるので、すべて 100 円と言うのは高いので価格設定はしっかり計算しなければならない。



(プレゼンの様子)

感想

発表者

大きなテーマで概論的なプレゼンにしたため、次回同じテーマをするとすれば、もっと時間をとって具体的なマーケティングにまで踏み込んだプレゼンをしたいと思った。学生会議は事実を知ることと、相手の思考プロセスを理解することが目的であると思っている。

そういう意味では今回知識は与えられたと思うし、ディスカッションの中で相手の国の状況が知れたと思うが、それを踏まえてどうするのかというところまでリードできなかったのは悔しかった。一方的な講義やハウトゥ論にもしないためにも、今のルワンダの若者にも、日本の若者にも深く関わる、一種の常識と言うかジェネラルディスカッションに近いものを次のトピックとしては扱っていきたいと思った。

新規ビジネスを考えるディスカッションの中で、今までの日本滞在を踏まえて、日本の便利なものを振り返って自販機やユニクロ、100均をあげるルワンダ人の視点や、物価の違い、ルワンダに既にある中国などによるビジネスについて、それぞれの参加者が知れたのはよかったのではないかと思う。アフリカと日本の関係で現在多いのは、支援・被支援の関係だ。これがビジネスや交流などもっと広がっていくことによって、平和の砦ともなる切ることができないつながりが生まれると思っている。国の関係構築を困難にしている要因も含めてしっかりと知り、将来それを乗り越えて絆を太くしていけるようなきっかけにこのプレゼンがなってくれたのなら嬉しく思う。

参加者

(Nadine / 島村訳)

日本企業のビジネス状況についてはあまり知らなかった。ただ、いくつかの企業の製品はルワンダでも見ることができて、東芝のノートパソコンや、トヨタの車、三菱のトラックなどは知っていた。このプレゼンではそれらの企業含めて、なぜルワンダに支店を開かないかの理由がわかった。日本の経済がビジネスによってどうやって成長してきたかは興味深く、欧米やアジアで彼らのマーケットを広げていることはいいことだと思った。経済的にルワンダを豊かにするためにも、日本企業が実践している、高い品質や、ポジショニング、ホスピタリティは、ルワンダの企業ももっと日本から学ぶべきである。日本の中東とのビジネスについてもっと知りたいと思った。

(Fiacre / 島村訳)

実はルワンダにも日本の製品は多くあるので、日本のビジネスについてはいくらか知るところがあった。日本はとても力をもった国であり、他の欧米の国と戦っていきけるようになるべきだと個人的には思う。欧米の企業も日本のように日々尽力しており、そのような競争が激しい今日では日本は更なる努力をすべきだと思う。今回は今まで知らなかった日本の企業も知ることができてよかった。日本企業がビジネスをルワンダまで広げてくれると、ルワンダの海外からの投資も増えるだろうし、日本の企業やルワンダの人たちにとっても良いことであると思う。そんな風になるといいなと思う。

(水口 (1年) )

ルワンダ人がユニクロを非常に気に入っていた理由がやっとわかりました。デザイン性、価格など日本人にとってもユニクロの魅力的な点がルワンダ人にとってもそうであるとわかりました。ルワンダでは男性用の靴が1万円するそうで、非常に高価な者であることに驚きました。ルワンダ人にとっても価格面での魅力が大きい気がしました。そのほかにも自動販売機や人材育成を行う会社が欲しいと Fiacre は言っていました。自動販売機については治安のいい日本だからこそこんなに多く設置できるはず。日本の魅力をアピールする際にネタになるなと思いました。アフリカで日本企業がビジネスをすることが難しくて

も、ルワンダならできるのではないかと思いました。彼らが日本に来て初めて見たものや知ったことで心を惹かれたものがあるならば、それらをルワンダのビジネスに大いに生かせると思います。



# 日本の多文化共生社会

発表者：水口あすか  
発表日時：8月15日(土)

## プレゼンテーション概要

2015年、日本に住む外国人の数は年々増加し続けている。だが、日本ではいまだ定住外国人に対する言葉や国籍、こころの面での壁が見られる。これらの壁を撤廃し、互いの文化的違いを認め合い、日本で共に生きていくためには何が必要なのかを考察する。

## 実施目的

現在、日本では定住外国人の数が年々増加している。また、内閣府が2015年から毎年20万人ずつ移民を受け入れて日本の人口を維持するというシナリオを出したり、東京オリンピック、パラリンピックの建設需要に対応すべく時間的外国人労働者の受け入れが進められていたりする。日本には多くの外国人観光客も訪れているが、本当に日本は外国人にとって過ごしやすい国なのか。また、日本で生活する外国人が増えることでますます重要になる「多文化共生社会」を進めるために何が必要なのかルワンダの学生の滞在中の体験も踏まえて議論した。

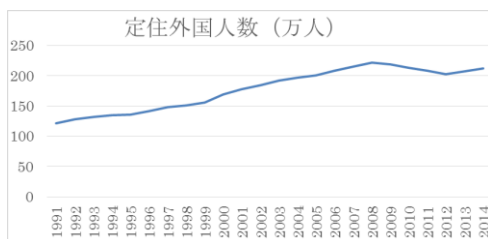
## プレゼンテーション詳細

### 1、多文化共生社会とは

「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」  
(「多文化共生の推進に関する研究会報告書」平成18年3月総務省より)

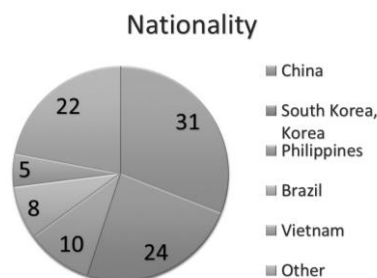
### 2、日本に住む定住外国人の現状

#### ■日本の定住外国の移り変わり



少しずつであるが定住外国の数が増えていることが分かる。2020年に行われる東京オリンピック、パラリンピックでさらに増えると予想できる。

#### ■国籍別の割合



国籍別の割合を見てみると、中国、韓国、朝鮮からの移住者が半数以上を占めていた。

### 3、多文化共生社会を拒む壁

#### 1. 言語の壁

・就労に関する法律や雇用契約、医療補助や子どもの就学などの制度や手続きがに関する情報等、基本的な人権に関わる情報が得られない。

・日本語が分からないために不利益、不平等を社会に訴える「声」を持たない。

#### 2. 国籍の壁

・法や制度が日本人と同じように定住外国人には適応されない。

#### 3. 心の壁

・偏見や無理解から生じるいじめやヘイトスピーチ。

### 4、多文化共生に対する日本の取り組み

日本政府というよりは、地域で自主的に行われているケースが多い。

Ex. 日本の生活様式について学ぶ講座、ボランティアによる日本語教室、避難訓練 など

### 5、多文化共生に対するオーストラリアの取り組み

#### ■なぜオーストラリアなのか。

白豪主義が撤廃され、東南アジアや東アジアなどの英語圏以外の国や地域からオーストラリアに移り住んでくる人の割合が急に増えたことに対し、上手く対応したから。

#### —成人移民のための英語学習プログラム (AMEP: Adult Migrant English Program)

オーストラリアでは、日常生活または就職において必要とされる英語能力を養成するため、最高で510時間の英語学習機会を提供している。原則18歳以上、永住権保持者などといった要件を満たした移民は無料でこのプログラムを受けることができる。小さな子どもを持つ人は受講中の保育施設利用も無料である。

#### —翻訳 通訳サービス

(TIS: Translating and Interpreting Service)

全国どこからでも利用可能な通訳 翻訳サービスで連邦政府により運営される。

通訳サービスについては、毎日24時間130以上の言語と方言に対応。サービスは原則有料であるが、市民権または永住権保持者の個人またはグループに場合は無料。

### ディスカッション

(1)グループで「多文化共生社会」を定義してください。またそれに見合った社会とはどのような社会か。

(2)今後、より日本で「多文化共生社会」を進めていくために今最も何が必要だと考えるか。(ルワンダの学生の滞在期間中の経験も含めて)

(1)については、定義するというテーマがディスカッションするにあたり難しそうだったので、ディスカッションテーマを考え直す必要があった。

(2)について

- ・日本語だけでなく多言語で表示したり、メディアの放送をしたりするべき。
- ・英語教育をもっと実践的にするべき。
- ・ヘイトスピーチをした人に対しての罰を重くする。
- ・他の文化や宗教を学び、理解すること。



などの意見が出た。このテーマは色んなところからアプローチすることができるので非常に白熱したディスカッションになっていた。

### 感想

発表者

「多文化共生社会」という自分の興味があるテーマだったため情報集めや、ディスカッションで参加者の意見を聞くことが楽しかった。一番の驚きは、ルワンダの学生の多くが日本の多文化共生社会のために「ことば」について考える必要があると述べていたことだ。ルワンダは公用語が英語で、学校の授業でも、職場でも英語が使う可能性が高いからこそ出た意見ではあるが、非常に興味深かった。また、ディスカッションの中でルワンダの近隣国との関係や多言語に対する取り組みについて聞くことができ日本がルワンダから学ぶべきことは多くあると思った。知識だけでなく、個人の意見も聞くことができ様々な視点から「多文化共生社会」を考える良い機会となった。

参加者

ルワンダは周りの国々と完全に良い関係でないとしても、お互いの語学力やスキルを尊重し、多文化、多国家の中で日々生活を送っている。日本は移民を受け入れる立場が圧倒的に多いにせよ彼らの労働力や考え方は日本社会にとって良いものであると考えるし、人を受け入れるのにメリットにこだわらず、地球市民として共に暮らせる日本にするべきだと思う。そのためには英語は学んで当然といった空気を生み出していかなければならない。(島村)

(プレゼンの様子)

# 他者化

～なぜ人々是对立するのか～

発表者：林陸

発表日時：8月17日(月)

## プレゼンテーション概要

なぜ人々は互いに憎み合うのだろうか？文化的、歴史的、政治的など多くの要因が絡み合って起きたのは確かであるが、その根本にあるのは特定の人を「他者化」することではなかろうか。本プレゼンでは「他者化」という概念の説明から初め、その克服の仕方を議論した。

## 実施目的

「他者化」について説明するとどうしてもルワンダのジェノサイドばかりが問題視され、多くの日本人は自分事として受け取ろうとしない。しかし日本は20世紀朝鮮大虐殺という大きな事件を経験している。反論もあり現時点で事実かどうか判断はできないが、今日のヘイトスピーチについて考えてみると「他者化」が日本では存在しないと到底考えられないだろう。そこで、背景は違うが互いに他者化による対立の歴史を持つ日本ルワンダ両国による「他者化」という概念の捉え方の違いや共通点を知りたくて、また「他者化」のメカニズムを知ることによって少しでも他者への偏見に気づき、少しでもなくすことを願った。このテーマを選んだ。

## プレゼンテーション詳細

### 1. 「他者化」とは何か

要旨や実施動機・目的にて散々「他者化」について述べてきたが、そもそも「他者化」とはなんなのか。この概念は『オリエンタリズム』などで有名なエドワード・サイードによって提唱されており、別名黒い羊効果とも呼ばれている。わかりやすいので、黒い羊を例に挙げて説明しよう。一般的な羊の毛の色は白であり、ほとんど全ての羊の毛の色は白だろう。しかし、その中に黒い毛の羊がいると白い毛の羊たちは自分たちにとって「異質」な存在である黒い羊を彼らの群れの中から追い出そうとする。お分かりいただけただろうか？人間もこれらの羊と同じで集団の中から特定の人を「異質」とみなし、その集団にいて欲しくないと感じる。ただこの「異質」というのが少し厄介で、「異質」なものの判断はあくまで恣意的なのだ。20世紀のルワンダでは民族の違いが「異質」とみなされたであろうし、江戸時代の日本ではキリスト教徒が「異質」とされて弾圧を受けた。これはあくまで一例であり、「異質」とは例えば髪型、好み、持ち物などほんの些細なことでも成立してしまう。

### 2. なぜ人々は「他者化」をするのか

理由は二つある。一つは本能的側面、そしてもう一つは理性的側面だ。誰かの陰口を言っているとき、なにかその場に一体感のようなものを感じることはないだろうか。特定の人物を集団から追い出す、すなわち「他者化」をすると追い出した集団は「異質」な存在

がいなくなり「純粹」さが増し、集団に属す人間として誇りを持つようになり、集団内の一体感が増すのだ。この一体感が国全体に広がるとそれは（排他的な）ナショナリズムにもなる。これが本能的側面である。

そしてもう一つは理性的側面であるが、これは要するに相手への理解の欠如だ。今でも少なからずの日本人がアフリカ人=野蛮とまでは言わなくてもぼんやりとした恐怖心を抱いていることだろう。世代が若くなるにつれ、世界中の正しい情報が我々のもとに入ってくるようになりこのような誤解をする人は少なくなっているがこの誤解の原因は相手に対する知識の欠如である。しかし、ただ知識があればいいというのではない。知識を得たうえで、違いを理解し尊重することが必要だ。

### 3. 「他者化」の例

#### ～ミャンマーのロヒンギャ～

「他者化」をどのようにして解決するか？という問いはあまりに抽象的なので、この問題を考えやすくするために一つ具体例を挟むことにした。日本、もしくはルワンダの問題を取り扱ってもいいのだが、そうすると背景知識に偏りが出て同等なディスカッションが生まれないと考え、日ル両国でそこまで知名度の高くないミャンマーでのロヒンギャについて取り上げた。アウンサウン・スーチー氏に代表されるように、近年急速に民主化が進んでいるミャンマーであるが人口の約 80%を占めると言われている多数派の仏教徒に対し、イスラム教徒の特に少数民族であるロヒンギャと呼ばれる人々は現在「他者化」による被害の真ただ中にある。ミャンマーで宗教、民族的な点で「異質」とみなされてしまった彼らロヒンギャは弾圧され、国籍を持たない難民も生み出している。彼らはミャンマーの中で仏教徒とこれからどのように共存していくべきか。

#### ディスカッション

今回ディスカッションのテーマは二つに分けた。一つ目は「ロヒンギャ問題はどのようにして解決されるか」で二つ目は「他者化に対して私たちはどのように向き合うべきか」である。先程の記述を見ていただければ分かると思うが、特にロヒンギャのテーマに関する情報が少なすぎた。ほとんど全員のルワンダ人メンバーに「情報が少なくあまり分からないんだけど…」と言われてしまった。ディスカッションの最中、話の中で少し触れたヘイトスピーチについてルワンダ人メンバーが興味を示してそこからヘイトスピーチの説明、そこからさらに盛り上がって国家の在り方といった。そこまでできてしまうと正直自分のテーマとは全く関係なくなってしまったが、悔しいが彼らの関心は自分の身近なところにあると感じたし、その中で彼らの興味を惹きつけられなかった自分の無力さに苛まれた。

#### 感想

発表者

正直に言うと後悔しか残らない発表となってしまった。実は今回発表したプレゼンはこれでも何度か修正を加えたものであったのだが、最初はルワンダ人メンバーに伝えたいこと、彼らと議論したいことがありすぎて、それがまとまりきらずにいた。原稿を推敲すればするほど自分の伝えたいことがぼんやりしてきてテーマを絞る難しさ、そしてプレゼンの難しさを痛感した。当たり前のことだが、自分が伝えたいことだけではなく、他の日本人メンバーやルワンダ人メンバーが興味を持てるテーマを選定しなければならない。プレ

ゼン中は想像以上に焦ってしまい早口になってしまったし、言いたいことが咄嗟の場面で出てこないということも数多くあり練習不足を身に染みて感じた。

参加者

人々は互いの違いを認めるべきだ。世界はあまりにも大きく、全世界の人が一つの共通の文化を持つことはできないのだから、私たちはあることに関して同じ意見を持ってないからという理由だけで憎しみあうべきではない。(Nadine)

民族、宗教などで他者化が生まれ迫害に繋がることは、過去に何回もくり返し起きている。日本でもヘイトスピーチ、ハンセン病、水俣病など「他者化」と呼べることは起きている。「他者化」を克服するためにどのような関わり方が私たちに出来るのか、プレゼン内であったロヒンギャの問題は第三者である私たちだからこそ出来ることはある。ヘイトスピーチ、ハンセン病など自国の問題はまず知ることから始めたい。(渡邊)

# 私達はどのように偏見を乗り越えられるか

発表者：藤内庄司

発表日時：8月17日（月）

## プレゼンテーション概要

私達人間は知らぬ間に多くの物事に対して偏見を持っている。それらの偏見はなくてはならない程生活に密着している場合もあれば、人道的・倫理的に悪であるものも存在する。ではこれらの偏見に気づくため、その善悪を判断するために私達はどのような行動を起こせばよいのか。アメリカのファーガソン事件や自身の体験を引き合いに出し、プレゼンテーション・ディスカッションを行った。

## 実施目的

日本人が持つアフリカ大陸のイメージは紛争や貧困に則して語られやすい。メディアによる偏向的な報道が原因かもしれない。しかしなぜこのようなネガティブなイメージがアフリカのイメージであり続けるのであろうか。メディアの他に問題はあるのではないか。そのような疑問を端緒として、自らが持つステレオタイプに気づき乗り越えるための方法を考えた。

## プレゼンテーション詳細

アフリカ大陸には現在 53 カ国あり、国によって現状は様々である。政情が安定しない国もあれば、急激な成長を遂げている国もある。それにも関わらず多くの人々はアフリカを一括りにしてネガティブなイメージを抱いている人が多い。地理的な距離や貿易取引量が少なく身の回りでアフリカを意識する機会がないということがあげられるが、その見返りとして単一なイメージがステレオタイプとなっているのも事実である。

では一体ステレオタイプはどのように作られるのか。以下、私達が持つ思い込みや先入観をステレオタイプの定義とする。

私達が社会生活を営む上でステレオタイプがなければ生活に支障がでる場合がある。例えば私達は生まれてから数えきれない人々と出会い、その中でコミュニケーションをとってきた。このような人にはこのような態度で接しよう、自分の性格には合わないから少し距離をとってみよう、などと無意識の内に自らが生きやすいようなコミュニケーション術を学んでいる。またこのような人はこういう性格だ、などと無意識に位置づけ、自らを守っている。しかし経験からそれを学ばなければ常に人間関係に悩みの種を持ち続けることになってしまう。このように私達は無意識のうちに目に見えるもの見えないものに関わらず自らの経験や知識から作られたステレオタイプを持って自らの生活を守りながら生きているのである。つまりあるステレオタイプは生活を営む上で必要な場合も存在する。

けれどもステレオタイプは時に人道的・倫理的に悪となる場合が存在する。例えばファーガソン事件。2014年8月9日、ミズーリ州ファーガソンで18歳の黒人青年が白人警官に射殺された事件である。その後白人警官が不起訴処分になったことを受け、多くの住民が黒人差別を唱えデモ活動を行い、州兵が出動する事態となった。またその後の調査で米司法省がファーガソンで黒人差別に基づいた捜査が慣行になっていたと報告した。この

ようにある人種のステレオタイプが社会全体に拡大し、人を殺めることにまで繋がるケースもあるのである。

では私達はこれらのステレオタイプの善悪をどのように見分け、乗り越えることができるのでしょうか。そこで私はステレオタイプに「気付く」、一度「壊し」、そして根本から「考える」といった一連の「経験」が最も大切であると提案した。

今回に限らず来日するルワンダ人は日本に対して「原爆」「原発」「テクノロジー」というステレオタイプを抱いている。特に原爆の被害を受けた広島には、70年前からなお復興できていないというイメージが少なからず存在する。しかし今回の企画において、自ら街並みを見、住人の話を聞き、そして資料館を見学することで、自分の持っているステレオタイプに気づくことができた。と同時に以前持っていたステレオタイプが崩れた瞬間でもあった。最後に被ばくされて70年間広島に住んでいる方のお話を伺い、自らの国の悲劇と未来を重ねあわせつつ、新たな広島の、そして被ばく者のイメージを築くことができた。

また私達はルワンダ渡航の際、全く同じような経験をルワンダでするのである。21年前に起こったジェノサイドから経済発展を遂げた首都中心部の様子を見ると私達がルワンダに対して持っていたステレオタイプに気づき、崩れてしまう。そしてその後のフィールドワークを通してルワンダの新たなイメージを築くことができる。

しかし上記のように結果的に再びあるイメージを持ってしまい、それがステレオタイプになってしまう可能性もある。そのステレオタイプは私達にとって善か悪かはすぐには見当がつかない。だからこそ気付く、壊し、考えるという「経験」を繰り返すことが非常に大切なのである。

以上のプレゼンテーションを踏まえ、ディスカッションを実施した。

## ディスカッション

今回のディスカッションでは互いの国をどのように思っているかをメインに話し合った。また各々の班でステレオタイプについての様々な思考がなされた。以下一例を挙げる。

Q、「どのようにして偏見が作られるのだろうか。」

A、「イメージが偏見になるとき、そこには決めつけと無関心があるはず。たとえ一つのイメージや側面しか知らないにしても、それがたったひとつの姿ではないという意識を持つことの方が重要な気がする。」

「事柄について1つや2つのイメージを持っているのは普通のこと。それが唯一の姿として誇張されるとき、初めてそれらのイメージや知識が偏見になるのではないか。」

## 感想

発表者

今回ステレオタイプを取り上げ、ディスカッションを行うことにより、それぞれが自分たちの持っている固定観念に気づくことができた。そして自らの固定観念がどのようなもので、どのように変わってきたかを互い披露しあうことにより、メンバー一人ひとりの持っている価値観やバックグラウンドを知り合うことができたように思う。また今回の学生会議が大阪・広島・岡山でのフィールドワーク後であったため、学んだことを整理する非常に良い機会になった。



参加者

・ステレオタイプを話すことで実際自分自身が持っているステレオタイプを考え直すいい機会になった。自分のステレオタイプは自分が一番良くわかっているはずなのにいざ言語化すると本当にそういうことを考えているのかよくわからなくなることは発見であった。

・この学生会議から日本にどのようなイメージを持っているのか、何を知りたいのかわかった気がする。原爆のこと、原発のこと、戦争のこと、トヨタなどの大企業のこと。来日するルワンダン全員が各々の思いを持って日本に来ていることに気づくことができた。

# 現代社会における ノブレスオブリージュについて

担当者：渡邊伶  
発表日時：8月18日(火)

## プレゼンテーション要旨

個人的に本プレゼンは、東京 岡山企画の延長、という位置に置きたい。日本という社会、ルワンダという社会で今後どのように生きていくのか、働いていくのか、暮らしていくのか、その上で、何を大切にするのか、を個々に問いかけ考えてもらうことを狙いとした。

## プレゼンテーション概要

### ノブレスオブリージュとは

ノブレスとは高貴な、オブリージュは義務、と訳せる。つまり、ノブレスオブリージュとは、高貴なるものの義務、という意味となる。「高貴」な存在で生まれた人は、たまたま「高貴」で生まれたにすぎない。だから、たまたま、恵まれていない環境に生まれて困っている人のために、何か救いの手を差し伸べる義務がある、ということである。

### ノブレスオブリージュの事例（ビデオ視聴）

「子どもを億万長者にはしない」（ビルゲイツ氏とメリンダ氏の夫妻の対談）

- ・ビルゲイツ氏は財団を設立し、メリンダ氏とともに教育と衛星の問題に取り組んでいる
- ・過去の様々な人物による慈善活動で世界はずっと良い場所になった
- ・慈善活動は米国の伝統であり、世界で最も力のある羨望的である
- ・社会奉仕活動が広がっていき、政治の行き届かない部分に光を当て、正しい方向に導いていく

持てるものの富をそうではない人に渡すことで、世界の不平等は是正されていく

## ディスカッション

- ①「高貴なるもの」の定義をどう考えますか
- ②あなた自身を「高貴なるもの」と思いますか
- ③ノブレスオブリージュの考えに賛同しますか、しませんか
- ④あなたはノブレスオブリージュを果たしますか
- ⑤もしノブレスオブリージュを果たすのであれば、どのような方法で果たしますか（寄付、仕事としてなど）

ルワンダではキリスト教の考えにより、収入の内、10%程度は寄付や貧しい人に使う。よって、ある意味では、ノブレスオブリージュ当たり前のものでもある。（ルワンダ側の意見）

日本では、宗教的に、恵まれていない人のために、寄付や慈善行為をすることは当たり

前のこととは言えない。実際に、欧米と比較した場合、寄付が消極的で、寄付文化は浸透していないと言われている。よって、ノブレスオブリージュは浸透しているとは言えないが、一部の若者の間では、社会貢献の意識が高まっている。お金よりもやりがいや社会貢献を意識した職業、キャリア選択をする人も増えてきているという。（日本側の意見）

## 感想

発表者

ノブレスオブリージュを考える上で、大切な視点が二つある。そもそも、「高貴なるもの」とは誰を指すのか、そしてノブレスオブリージュを果たすべきなのか、ということである。たとえノブレスオブリージュの考え方に賛同しても、自身が「高貴なるもの」でなければ、その役割は果たさなくて良い、ということになる。その意味で、まずは「高貴なるもの」とはどんな人物を指すのか、を考える必要がある。少し前の時代であれば、階層が明確で、固定化されていた。この階層で生まれれば、将来この仕事に就く、などある程度自身の将来が生まれた時点で判明した。しかし、少なくとも現代の日本ではあまり明確な階層はなく、どの家庭で生まれても、一生懸命勉強すれば、希望の大学、偏差値の高い大学に行くことができるし、希望の仕事、給料の高い仕事に就くこともできる。もちろん、資産家の家庭、皇族の家庭、など例外はあるが、多くの人が、中流階級として自身の努力と判断を元に生きていくことのできる社会となっている。しかし、厳密に言えば、同じ国の中、同じ中流階級の中でも生まれた環境はかなり異なる。裕福な家庭とそうではない家庭、都市部にある家庭と地方にある家庭、生まれつき秀でた才能を持っている人、生まれた環境は異なり、どこで生まれるのかは、偶然にすぎない。そのように考えると、自身の環境が、他のある特定のグループと比較して、恵まれていると考えれば、「高貴なるもの」と考えられるかもしれない。また、現在お金があり地位も高い人が「高貴なるもの」であるかと言われれば、また疑問でもある。そこには努力とう要因が絡んでくる。もともと恵まれていなかったけれど、努力して自分の環境でのしあがってきた。だから、自分はノブレスオブリージュなど果たさない、という人もいるかもしれない。

その上で、ノブレスオブリージュを果たすのか、果たさないのかを考えたい。それは個人によって、個人の原体験や宗教、文化などによって異なる。ノブレスオブリージュを果たさなければいけないわけでは決してない。「高貴」であることを感謝し、自分の好きなように生きるのもよい。今回参加した大学生、つまり、「高貴なるもの」（私自身の考え）である私たちは、どのようにノブレスオブリージュをとらえているのか、

ルワンダ人たちは宗教の考えが強く、ノブレスオブリージュを、当たり前と捉えているようだ。しかし、それを仕事にするほどの人はいるのかどうかは気になる点である。日本では、主に高学歴な人が、社会起業と呼ばれるような、社会貢献を仕事にする人も多い。この現象は発展し、物質的に恵まれ、暮らすのには困らない程度を稼ぐのは簡単になった日本をはじめとする先進国特有の現象なのか、気になる点である。

# Research on factors which show how Japan is known in Rwanda

発表者：RUTAMU Fiacre

(丸茂思織訳)

発表日時：8月15日(土)

## プレゼン要旨

ルワンダにおいて、日本のどのようなものが知られているのかを、「技術」「歴史」「文化」等の点から説明する。

## 実施動機・目的

・日本とルワンダ両国に共通しており、またそんな両国の関係に興味を持ってもらいたいと考えたから。

・日本人に、ルワンダにおける日本のイメージを知ってほしいと考えたから。

## プレゼン詳細

### 1. 技術

#### (1)自動車

ルワンダでは多くの日本製の自動車の中古で流通しているため、「トヨタ」「マツダ」「三菱ふそう」等はルワンダでも非常に有名である。その中でも「トヨタ」が一番有名である。

#### (2)電子機器

日本の電子機器（テレビ、ラジオ、コンピューター、電話等）もルワンダでは非常に有名である。その中でも特に、「SONY」と「東芝」が有名である。

### 2. 歴史

#### ・原爆

全世界で広島（1994年8月6日）と長崎（同年8月8日）のみに投下された原子爆弾は、第二次世界大戦の負の遺産として、ルワンダにおいても歴史の授業で学習する。この原子爆弾によって少なくとも129,000人もの人が命を落としたと言われている。

### 3. 文化

#### (1)スポーツ

多くのルワンダ人は「空手」と「柔道」を日本古来のスポーツとして認識しており、両者共にルワンダでは非常に人気である。

#### (2)食事

日本食の多くは、お米と味噌汁から成っている。内陸国で海を持たないルワンダに住む人々からすると、日本で主流のシーフード類（生魚や海老等）は少々物珍しいものである。

### 4. その他

### (1)交通機関

鉄道や地下鉄などの交通機関が、特に東京や大阪等の大都会で非常に充実していることで有名である。それ故、自家用車を所有していない日本人も多い。時に混んでおり使用し辛いこともあるが、安全性が高い日本の電車は非常に信頼が高い。安全できれいなタクシーをわざわざ探す必要がなく、駅のロータリーで両者を兼ね備えたタクシーを容易に見つけることができるのは驚きに値する。

### (2)カラオケ

ルワンダでもカラオケは人気であり、ルワンダ語でも「カラオケ」は「カラオケ」と呼ぶ。

## 感想

### 参加者感想

ルワンダ人の私にとって、非常に馴染みのあるテーマだった。しかし、ほとんどのルワンダ人は、技術力の高さなど日本の良い面しか知らない。彼らは、先進国である日本にもまた悪い側面があることを知るべきだと思う。(Nadine)

まず、ルワンダにおいて、想像以上に日本のことが知られていることに驚いた。対して、「日本でルワンダはどのように知られているのか」というテーマで日本人に調査を行っても、残念ながらそこまで多くのは挙がらないと思う。また、そのほとんどがネガティブなものになってしまうのではないだろうか。今回のプレゼンテーションでは、ルワンダ人が日本について多くのことを知っており、またそれらの多くがポジティブなものであることを知ることができて良かった。(柴谷)

### (プレゼン資料①)



(プレゼン資料②)

## TRADITIONAL WEDDING IN RWANDA

発表者：KAYANGE Alice

(訳：水口あすか)

発表日時：8月17日(月)

### プレゼン要旨

ルワンダでは、「結婚」に敬意を表しており、今も昔から変わらず儀式が行われている。人々は結婚したり、子供を産んだりすることで家族になることを強く望んでいる。しかし、ルワンダでは結婚は単に男性と女性が夫と妻として協力するのではなく、2人の結婚に家族の存在が大きく影響する。そんなルワンダの結婚の過程について紹介する。

### プレゼンテーション詳細

まず、結婚式に関連した、ルワンダの用語を紹介する。

#### 1. Kuranga

結婚を望んでいる男性によって成り立っている。これには"umuranga"と呼ばれる人に責任があり、近所にいる全ての女性を知っていることや助言を求める必要がある。男性は、結婚したい女性のことがよく分かったら自分の家族に報告に行かなければならない。しかし、中には彼らが子供の時から両サイドの両親が結婚を決めている場合もありその場合は不要である。

#### 2. Gusaba no gukwa

1の後に、男性は女性の家族のところに行く必要があり、その時に男性は女性と結婚したいことを伝える。もし女性側の家族が同意したら男性側の家族に報告する。その後、"gusaba"というパーティーを開くためにバナナビールを作る。このパーティーでは主に両家族であいさつが行われる。そして、男性側の家族はほとんどの場合、女性側の家族の贈り物として牛を渡す。日本でいう「結納」。



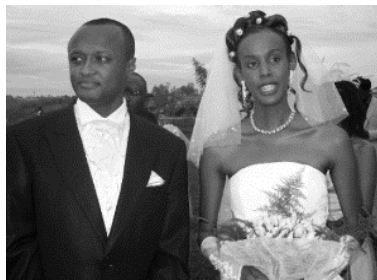
(プレゼン資料)

### 3. Gutebutsa

これはどうやって結婚式を行うかの計画であり、男性と女性の関係が最も近くなることに影響する。ある種、小さな会議であり男性家族が持参したお酒を飲みながら行われる。

### 4. Gushyingira

結婚式の意。式は夜行われて、女性は"ingobyi"と呼ばれる素材で作られた乗り物で移動する。



(Gushyingira)

### 5. Gutinya

結婚式後、花嫁は外に出られず、部屋にいななければならない。彼女の姉妹や親しい関係の人々が彼女の行動を手助けするので、花嫁を見ることはできない。このようなことを"gutwikurura"まで行う。

#### ○今日のルワンダの結婚

伝統的なものから少しずつ変化してきた。

"Kuranga"はなくなり、それぞれが自分の好きな人と結婚できるようになった。

"gusaba no gukwa"は今でも昔のように残っている。ただ新郎から新婦家族への贈



り物が牛からお金に変化した。

“Gutebutsu”は完全になくなった。

“gushyingira”(結婚式)では教会を訪れる必要はなかったが、最近では宗教的な結婚をする人が増え教会を訪れている。

### (最近の結婚式のスタイル)

#### ディスカッション

- 1、日本とルワンダの伝統的な結婚式の違いを挙げてください。
- 2、伝統的な結婚式が変化していることに対してどう考えるか議論してください。

#### ■1、について

・結婚式は両国にとって重要で、そのために多額のお金が必要なことも同じである。(島村)

・日本とルワンダの結婚式は異なるところも多くあるが似ているところも多くあると分かった。(Fiacre)

#### ■2、について

・結婚式のスタイルが変化するとメリット、デメリットの両方がある。デメリットとしては結婚式に必要な金額が高くなることだ。メリットとしては、自分でパートナーを選べるということだ。(藤内)

#### 参加者感想

日本の結婚スタイルでさえ分からなかったが、「結婚式」が人生において大きなイベントであることはどの国においても同様だと思った。また、大きなイベントだからこそ国々の文化が盛り込まれているはずだ。だからこそ、私は日本独自のスタイルも残しながら時代に合わせて変化していくのは良いと考える。私も日本の文化である着物を着ていつか結婚式に臨みたい。(水口)

# Peace Education in Rwanda / The danger of single story

発表者：Nadine Iranzi Karinganire  
(訳：藤内庄司)

## プレゼン要旨

ルワンダでの平和への取り組み  
現在ルワンダ国内で行われている平和への取り組みについて発表を行った。  
・シングルストーリーの危うさ  
一つの事柄を一つの角度で盲信することの危うさについて発表を行った。

## プレゼンテーション詳細

### ルワンダで行われている平和への取り組みについて

- ・ AEGIS TRUST RWANDA  
AEGIS TRUST RWANDA はイギリス・アメリカのチャリティー団体であり、ルワンダでは認定 NPO として活動している。活動の一環として学生をはじめとする若者リーダーとジェノサイドの被害者をつなぎ、彼ら/彼女らの経験から学ぶ機会を創出するという取り組みやジェノサイド被害者の生活を取り戻す支援を行っている。また Rwanda's Institute of Research and Dialogue for Peace などと手を取り合い、ジェノサイド後に生まれた若者に対して平和教育活動を行っている。
- ・ Rwanda's Institute of Research and Dialogue for Peace (IRDP)  
Rwanda's Institute of Research and Dialogue for Peace はルワンダの NPO 団体である。2001 年の創設以来、ルワンダの平和に寄与する様々な取り組みを行う一方、世界中の紛争地域また紛争があった地域に関する情報を発信している。ルワンダでは特に若者が平和構築において大きな役割を担うという信念のもと、学校において市民教育を行っている。
- ・ Radio La Benevolencija  
オランダに本部をおく Radio La Benevolencija はヘイトスピーチなどの暴力に脅かされている民族少数派やそのグループを支援する団体である。ルワンダでは musekeweya というラジオ番組を放送しており、番組内では和解やジェノサイド後トラウマを抱える人々へのメッセージが含まれている。

上記の団体の他にも USC Shoah Foundation 等とも手を取り、ルワンダへの平和維持に力が注がれている。

### シングルストーリー

本テーマはチママンダ・アディーチェの TED (<http://www.ted.com/>) でのプレゼンテーション (原作 "The danger of single story") を基に行われた。チママンダ・ア

ディーチェとはナイジェリア出身の作家である。彼女は本プレゼンテーションで自身がアメリカに留学していた時期やメキシコに滞在していた頃を語り、いかにシングルストーリーが危ういもので人間の尊厳を退けるものかを主張している。

本学生会議では彼女のプレゼンテーションを基にしてディスカッションを行った。

### ディスカッション

ルワンダで行われている平和への取り組みを紹介した後、シングルストーリーの危うさに関する映像を視聴し、3~4人のグループに分かれて議論した。

Q、「シングルストーリー」の原因は一種のステレオタイプである。ではステレオタイプは善か、それとも悪か。

A、(以下メンバーの意見)

- ・全体像を捉えるために一つの部分に注目することは意義のあることだと思う。
- ・無関心よりは何らかのイメージを持っていることは良いことだ。
- ・ステレオタイプは良くない。ただ対象となる物事を深く知るためのきっかけになる可能性もあるので一概に悪いとは言えない。
- ・ステレオタイプは結果的に対象の無関心に繋がってしまう恐れがある。

### 参加者感想

- ・日本に生きていれば平和教育や市民教育を意識することは少ないが、ルワンダにおけるそれらの現状を知り、なぜルワンダ人が平和への関心や市民としての自覚が強いのか理解できた。
- ・実際にルワンダの平和教育の現場に行ってみたいと思う。
- ・自分が多くの物事を一面的に捉えているんだなと認識する良い機会だった。
- ・自らがなんらかの事象に対してステレオタイプを抱いているということが認識できると世界が少し広がる気がする。

# Security in Rwanda

## ルワンダの安全保障

発表者：Emmanuel Mugema  
(訳：柴谷直美)

### プレゼン概要

このプレゼンテーションでは、ルワンダにおける植民地時代以前の安全保障と植民地時代さなかの安全保障、そして現代のそれについて述べられた。以下はその内容の訳である。



(学生会議の様子)

### 1. 「安全保障」の定義

私たちが“Security”という単語を聞いたとき、考えるうる定義やイメージは、「安全だと感じること」「恐れ・心配事・危険・疑惑などからの解放、自由」、「确实性」、「正直」、「保護」、「攻撃や干渉に対する防御」などが頭に浮かぶ。

では「安全保障」についての世界の見解、定義については、まず Security とは Safety、つまり安全性を意味する。また「安全を保障するもの」、「防御」、「犯罪や攻撃、スパイ活動などへの予防措置（例えばハッカーによるアクセス占拠に対するコンピューターセキュリティ）」等様々ある。

上記の定義より、ルワンダのシチュエーションを考えると、安全保障を行う理由は沢山ある。しかし第一の理由は損害（行為）に対する防御・保護である。ここでいう損害行為とは、個人や団体が他の人々に害を加え、そして危険性、不安感を生命そのものや財産に引き起こす行為をすることなどがそれにあたる。

### 2. 植民地時代以前の国内安全保障

植民地時代以前には、ルワンダの安全保障は主に一般的日常生活の中に見られた。当時は、国民的エリート集団があり、彼らが軍の訓練をすることや、国民の愛国心を育むことを担っており、それによって全市民が近隣の安全保障や国家の安全保障に対し目を見張れるようにしていた。

### 3. 植民地時代中の国内安全保障

ルワンダは 1898 年から 1916 年にかけて、ドイツの保護領とされていた。しかし第一次世界大戦でドイツが敗北し、ドイツはルワンダに対する統治権を失った。1918 年以後は、ベルギー王国が、ルワンダをルアンダ=ウルンディとして委任統治化に置いた。そして 1962 年の独立までその統治は続いた。この植民地政策がルワンダに成文法（制定法）を導入する結果となり、この成文法が徐々にルワンダ文化に代替していくこととなる。

植民地時代以前には、社会的階級は「富」を基準にして決められていたと考えられるが、植民地時代においてはそれが「民族」を基準にして決められるようになった。植民地主義の聖職者らが新しい信条をうち立て、それを人々に広めていったということがあいまって行われた。多くのルワンダ人は新たな信条を信じるようになり、その新しい信条を支持できなかった者は孤立させられるか、流罪となった。この風潮は 1959 年まで続く。

### 4. 1959 年から 1990 年 10 月 1 日までの国内安全保障

民族毎の政治団体、すなわちフツ族、ツチ族、トゥワ族（この民族分類はベルギーによって明確になされた）に分かれたそれぞれの政治団体は、相互の懐疑心、不信任感、そして憎しみを国中に広げていく結果となり、国内の社会的結合を徐々に乱していった。ついにはツチ<sup>7</sup>の人々の家を燃やし、破壊したり、家畜を奪取したりする事態になっていき、このような社会情勢の中で命を失うツチの人々もいた。このような中で沢山のツチの人々が国を逃れ、そしてそのうちの人々は、祖国ルワンダの自由化に向け帰還した。（1990 年 10 月 1 日）

### 5. 1990 年 10 月 1 日から 1994 年 4 月 7 日（ジェノサイドの勃発日）までの国内安全保障

この頃、独断的で不当なツチ族の逮捕や殺害がより確実になっていった。この時期ジェノサイド（民族大虐殺）は既に試験的に行われていた。そしてその後、フツ族が共通意識・イデオロギーを創り出した。いわゆる“HUTU POWER”（フツの力）と呼ばれるものである。そして彼らはツチ族に対する本格的なジェノサイドを 1994 年 4 月 7 日に開始した。ジェノサイドのさなか、フランスは UNAMIR（国際連合ルワンダ支援団）<sup>8</sup>の下、ハビャリマナ政権（フツ族中心の政権）を救助し、殺害を援助するためにルワンダに軍を送り続けていた（とされる）。

フランス政府は“Operation Turquoise”と呼ばれた他国干渉政策としてルワンダにさらに多くの軍を派遣し続けていた。そしてこれにより、ジェノサイド加害者側の多くの人々が保護され、コンゴ民主共和国に安全に非難することができたとされている。

### 6. 1990 年 10 月 1 日から 1994 年 7 月 4 日の自由化までの国内安全保障

<sup>7</sup> 正確には、「ツチ族とみなされた人」であるが、この文章の中では便宜上「ツチの人」もしくは「ツチ族」という語で代替させていただく。フツやトゥワについても同様。

<sup>8</sup> 「国際連合ルワンダ支援団(United Nations Assistance Mission for Rwanda, UNAMIR) は、ルワンダに展開した国際連合平和維持活動。ルワンダ紛争の和平協定（アルーシャ協定）が結ばれたことを受けて 1993 年 10 月 5 日の国際連合安全保障理事会決議 872 によって設立されたものである。ルワンダにおける停戦監視、和平構築支援を任務とした。」(wikipedia より引用)

ルワンダでのこの情勢は、ルワンダ愛国軍<sup>9</sup> (RPA: Rwanda Patriotic Army) によって自由化が達成されるまで続くこととなった。そしてこのルワンダ愛国軍こそが、今日で知られるルワンダ国軍<sup>10</sup> (RDF: Rwanda Defense Force) である。

1994年7月19日、国家統一を目指す政府が設立され、人々の団結 (Unity) と和解 (Reconciliation) を通じて社会的連結を確実なものにしようと様々な施策がなされた。

#### 7. 今日のルワンダの安全保障

ルワンダは現在、アフリカの中でも最も安全な国として名高い。このことは World Bank Reports や Human Rights Watch Reports によっても認められている。

今日のルワンダの安全保障を担うのは誰か。それは「全員」である。ルワンダでは国民一人ひとりが近隣の安全保障の担い手である。

ルワンダでは1994年、ジェノサイドを主導していた政権が倒された後、安全保障が最優先事項として考えられてきた。また、ルワンダ愛国戦線 (RPF) が現在のルワンダがたどる方向性である「和解」、「国家建設」そして「社会経済的發展」を定めていった。

安全保障は全ての現行の施策や劇的な進化の要といえる。さらに、安全保障により、ルワンダが発展するにあたり間違っていることに新しく気づくことが出来、現在政策セクターの中でも優先的なセクターを築くことにつながった。それは、

- 1 インフラ
- 2 農業
- 3 天然資源
- 4 投資、貿易、産業
- 5 ICT
- 6 健康医療
- 7 教育 等 である。

また、ルワンダ共和国において安全保障と平和構築を担う国家機関<sup>11</sup>は、

- ・ 防衛省 (MINADEF: the Ministry of Defense)
- ・ 国内安全保障省 (MINITAR: the Ministry of Internal Security)
- ・ ルワンダ国家警察 (RNP: Rwanda National Police)
- ・ コミュニティー警察 (Community Policing)
- ・ 災害処理及び難民省 (MIDIMAR: the Ministry of Disaster Management and Refugee Affairs)

奇跡的にルワンダが経済成長へと歩みを進めていっていることに加え、ルワンダでは全市民がそれぞれの近隣のセキュリティーガードなのである。そして上記全ての機関はそれと同じ志で役割をなしている。警察隊などの安全保障団体は法制度がきちんと遵守されているか見張る役割をしており、その他全ての団体はこの、安全と平和を確保するために団体同士の連帯を深め、パートナーシップを組んでいる。

さらに、全ての安全保障機関は国民たちに犯罪を乗り越えるという役割を理解してもら

<sup>9</sup> (RPA. 2002年以降ルワンダ国軍(RDF)に改名。ルワンダ愛国戦線 (RPF:Rwanda Patriotic Front) 軍事的団体

<sup>10</sup> 注3を参照

<sup>11</sup> 正式な日本語名が文章の中で見当たらなかったため、日本語名は訳者が訳した。

うよう働きかけている。それらはルワンダを人間にとってより安全な国にならしめ、そしてルワンダの国民やビジネスマン、観光客の暮らしを改善してきた。ルワンダは今、安全性、ビジネスのしやすさ、団結、和解方法、女性の社会進出など多数の面で世界のランキングで比較的上位に位置するようになってきている。

#### a. MINADEF について

MINADEF は、ルワンダ国家の財産、領土、国民や国家価値にとって大切な資源を護ることで、憲法や国際法の範囲内で国家の威厳と防御を確固たるものにするという役割を担っている<sup>12</sup>。

#### b. RDF vs RNP

これらの協力範囲

- ・反乱等に対する対策措置
- ・薬物輸送
- ・テロ対策措置
- ・軽武器や軽爆弾の激増対策措置
- ・国境を越えた密輸対策措置
- ・平和維持活動、その他

#### c. MINITER(the Ministry of Internal Security)

これは国家警察や国立刑務所を意味する。絶え間ない変化の中にあるルワンダ社会の要望に対し適切な解決策を効果的に提供するという観点のもと設立された。この省庁が生まれたということ自体が、ルワンダの最高権力機関が安全保障や平和というものに最注目し、政府の最重要事項の中心に据えているということを表している<sup>13</sup>。

この省庁は、二つの自主独立体によって成立している。一つは国家警察、そしてもう一つはルワンダ懲戒施設（刑務所）である。

この省の使命は、関連する国際協定に敬意を表しながら、ルワンダにいる全ての人々の安全性と財産を保証することである。国家警察と国立刑務所は国内で遍く機能しており、必要であれば双方が協力する。この省によって提供されるサービスは、ハイクオリティーで信頼性の高いサービスであり、法規を護り、全ての人にとって安全な環境を提供する。そしてルワンダ刑務所においてはコミュニティーサービスを提供している<sup>14</sup>。

#### d. MIDIMAR(The Ministry of Disaster Management and Refugee Affairs)

この省は主に災害対策措置と難民問題に関する省であり、防止・鎮静・応答・復興・救助・監視（調査）、そして実際にタイムリーに活動するためのメカニズムを創り、国民に、自

<sup>12</sup> The Ministry of Defense  
[www.mod.gov.rw](http://www.mod.gov.rw)

<sup>13</sup> The Ministry of Internal Security  
[www.miniter.gov.rw](http://www.miniter.gov.rw)

<sup>14</sup> Rwanda National Police  
[www.police.gov.rw](http://www.police.gov.rw)

然災害や人災に対する注意を喚起することを目的に創設された。

#### 8. 人生における安全保障と人生自体が安全保障であるということについて (security in life and life is security)

ルワンダのビジョンは、威厳という価値と団結という強いイデオロギーに基づいている。これらはまた、ルワンダがこれまでに必死で維持してきた安全保障の上に成り立っているともいえる。

安全保障組織や、地方政府は、より住民の近くで働いているということから、上記のルワンダのビジョンがしっかりと達成されているということを確認するという義務がある。そして団結という価値を護っていくため、全ての政府機関や全ての住民は、持続可能な発展という共通の目標の達成に向けて共に働いている。そしてこのルワンダの安全保障は良いリーダーシップの下で生まれている。



(ルワンダの現大統領ポール・カガメ氏)

#### 9. ルワンダにおける完全な安全保障

国中の完全な安全保障を確実なものとするため、全員が安全保障を妨げる行為に手を染めないことが要求される。

また、政府は反対する者たちを罰するための場所、そして安全保障を維持、犯罪者を特定し、その場所に連れて行く施設も運営している。犯罪者が判決を受ける刑務所センターも政府によって提供されている。

さらに、囚人の基本的人権を尊重しながら、彼らに対する懲戒メカニズムも運営している。

#### 10. ルワンダにおける国内安全保障政策の目的

- ・人々と人々の財産の安全を保障すること
- ・市民自体が自分たちの安全を維持していくという偉大な役割を担うことを可能にすること
- ・刑を免れることや、独断的な正義心に基づく文化を撲滅すること



法律を実施すること

国内安全保障という分野において、機関同士での共同運営を改善していくこと

民間の安全保障を運営する企業を促進することや、彼らの運営を合理化すること

ルワンダは国内においても対外的面においても安全保障を達成し、今日においては、世界中で国連の平和維持活動の使命のための国力も有している。

## ディスカッション概要

ディスカッションは二つの質問について行われた。

一つは”What should be done to sustain and strengthen security?”（「安全保障を持続し、また強化していくためには何がなされるべきか。」）

そして二つ目は、”Recommendations on HOW to make the world a better place.”（「世界をよりよい場所にするためにどのようなことをしていけばよいか。どうすればよいか。」）であった。

教育の観点なども盛りこんだチームなど、チーム毎に様々な意見が共有されていったが、以下は1チームのディスカッションの流れである。

ルワンダ人メンバーの一人は、一つ目の質問に対し、「安全保障のあり方などは僕もよく知っている。安全保障について最も重要なことは、いかに良いリーダーシップを持つかであると思う。」と述べていた。

また、ルワンダ人メンバーの二人目は、愛国主義であることを重要なことの一つとして置いていたのが印象的であった。彼女は、「安全保障を機能させるためには、国民一人ひとりが自分の国を愛することも必要だと思う。もし私が自分の国のことを愛していたら、私は自分の国の平和のために何でもしたいと思うはずだから。」と述べていた。

このようなルワンダ人メンバーたちの意見である「良いリーダーシップ」や「愛国主義」に対し、日本メンバーの意見では、ルワンダの人々の、自国の発展や安全保障、国家の事項が全て自分自身の生活とリンクしているという状態であったり、国民皆が自分の国の担い手であると思えている気概であったり、今の日本とはどこか違う点だと感じ面白かった。そしてその理由は、日本とルワンダの破壊からの復興のフェーズの違いではないかと語った。

「ルワンダと日本は確かにそれぞれ大虐殺と戦争という二つの重大な悲劇によって国が破壊され、そこから立ち直った、もしくはルワンダに関しては今まさに立ち直ろうとしているときである。しかし、ルワンダでジェノサイドが起きたのは 21 年前で、第二次世界大戦で日本に原子爆弾が投下されたのは 70 年前と、その破壊からの立ち直り方、立ち直る段階や今居るフェーズが違うからこそ、国民の自国の発展に対する気概が違ってくるのではないかと。例えば日本が昔戦後 21 年であった時は、日本人々も国家の諸事項と自分の生活と完全に直結するものだと思えていたであろうし、「国の発展＝自分の家計の発展」であると捉えていたかもしれない。そういった場合は、みんな自分の意見を国の共通目的に合致させていくことは今よりずっと簡単であるかもしれないし一般的であったかもしれない。発展をただ単に『経済的発展』という視点のみで捉えたくはないが、もし『経済的発展』のみに焦点を当てた場合、今のルワンダと日本を一括りにできないということを改めて考えさせられる原因の一つになるのでは。」と述べた。

それを受け、ルワンダ人メンバー二人共確かにそうかもしれないと同意していると同時に、過去に悲劇を経験した人がどれだけ生き残っていらっしやるかということも安全保障に対する気概が変わってくるかもしれないと述べていた。

「ルワンダではまだジェノサイドを体験した人々が生きていらっしやる。もし原子爆弾を体験した人々がもっと生き残っていらっしやれば、そしてもっと長生きされれば、その方々の主な目標として安全保障にスポットライトがより当てられることになるのではと思う。しかし日本では既に大勢の被爆者の方々、戦争を体験した世代の方々がどんどんお亡くなりになられている。」と。

ill alive in Rwanda. If the people who experienced the atomic bombing 70 years ago are still alive today, their main focus and will could be the “security”. But now most of the victims have already passed away.

そして安全保障、とりわけ国内の安全保障に不随して、「日本でどのくらいの犯罪が起きているのか？」という質問もしていた。というのも、彼ら曰く、日本に着いてから、一度も日本人メンバーに「かばんをしっかり（盗まれないように）見張って！」等言われないうことから、日本の治安がどれほど良いのか聞きたかったのではないかと推測する。「ほぼ毎日殺人などニュースで取りざたされているように思う。」ということも日本人メンバーが伝えたところ、少し驚いた表情も浮かべていたように思う。

また、もう一人の日本人メンバーは、過去と現在の日本の安全保障のあり方について、「コミュニティ」という観点から述べていた。

「1940年頃、また高度経済成長期以前までは、日本ではコミュニティの結束が強かったように思う。しかし、現在はその頃よりも強くはない。近所で人々の間に強い結束やコミュニティは少ないし、それによって他の人の感情を考慮すること、がどんどん日本人にとって難しくなっているのかもしれない。実際今は一家族一世帯という核家族である世帯が圧倒的に多い。しかしルワンダでは、近所にも家族にも強い結束があってコミュニティがある。そこは強みでもあるよね。」

二つ目の質問、”Recommendations on HOW to make the world a better place.”（「世界をよりよい場所にするためにどのようなことをしていけばよいか。どうすればよいか。」）に関しては、以下のような議論がなされた。

ルワンダ人メンバーの一人は、まず「戦争をなくす」という観点から、「ロシアやイラン、韓国などの大国が核兵器に反対していくことが大事だ。戦争という概念は、大国の中で起こりうることだと思う。」と述べていたのが印象的であった。

日本人メンバーはそれに対し、「武器は安全保障に必要であると思うか？」という問いを投げかけ、「日本には武器はない。これが日本で犯罪が少ない原因になっているはずであるかもしれない。」とも述べていた。

また、もう一人の日本人メンバーは、よりよい世界を築いていくために、「対話を通じた友好関係の構築」が大事であると述べた。「一つは、世界の首相、大統領、政治家が自ら平和的な対話をしていくべきである。二つ目は、世界の首相レベルではなくても私たち

のような市民一人ひとりがお互いに友情を築いていくこと。国や国境を越えて、友情を築いていくこと。この二つが大事であると思う。」と述べていた。また、違う日本人メンバーも、「人々の間での関係性を考えないとならないよね。」と話し、ルワンダ人メンバーもこれに対し、「私たちのような若いジェネレーションが何をできるか。一人ひとりが、国がピースアンバサダーになって、ジェノサイドを経験したからこそ、世界に『二度と起こしてはならないこと』を教えるべきである。広島企画でリングフランカさんがやっているように<sup>15</sup>、広島と長崎、若い世代の人々が昔の体験を語り継ぐことで若い世代から平和を築いていくという気概が大切だ。」と主張した。

また最後に、日本人メンバーは、「お互いが団結することが大事だと思う。日本はある種団結しているとは言えない。個人個人の家族単位でまとまってしまって、ルワンダ人が大切にするビジョンの一つである UNITY (団結) がない。団結によって確かに悪いこと(ドイツのナチスによる独裁等)も起こりうるけれど、しかし、団結することはそれでもとてもいい力になりうる。ルワンダは今とても素晴らしい力を持っている。ほぼ全ての国民が共同している。これを維持していくためには、ルワンダという国をさらに富める国に、そして平和な国に維持していくことが大事である。」と語っていた。

## 感想

日本人メンバー

まずルワンダに住み、一生懸命勉強に励む Emma からルワンダの安全保障について学べたことはとても意味のあることだった。日本には軍隊が無く自衛隊しかないなかで、私個人としてはそのシステムを誇りに思っているけれど、また違った視点から他国の安全保障への考え方、軍への考え方を知ることが驚くことも沢山あり、勉強になった。「いかにして世界をよりよくするか」というディスカッショントピックは、かなり範囲が広く、漠然としてしまう質問でもあったが、私たち若者が真剣に考えるべき重要なことの最たるものでもあったので、皆で語りあえたことを嬉しく思った。また、漠然とした中で全員が何が一番注目するかを聞いたことが特に面白かった。私は世界をよりよくするために一番必要なことは、若い世代を育成し、宝のように護っていくことだと考えた。これからの世界の先頭を生きるのは若い世代であるし、またその世界をいかに明るく平和な世界に、もしくは暗く残酷な世界にするのか、それは若い世代にかかっているはずである。だからこそ、どの道をたどるかを決めるときにいかに一人ひとりの心の土壌がしっかりと平和に向かっているかが最重要であり、そのために教育が必要不可欠だとも思った。そしてその上で、世界中の人々がルワンダで大切にされている Unity (団結) やコミュニティを大切に築いていくことが大切だと考えた。

安全保障の話から、これからの世界に必要なことを共に学び語り合えたことは、私たち一人ひとりにとってとても意味のあることだったと思う。エマちゃんありがとうございます!!  
(柴谷)

ルワンダ人メンバー

ルワンダ人であるから、エマがプレゼンテーションしてくれた議題についてほとんどの内容については知っているつもりであった。しかし、ルワンダの安全保障を担う一つ一つ

<sup>15</sup> 詳細は広島企画ページを参照ください。

のセクターのことについて、また、安全保障に関するルワンダの歴史について、新たに学ぶことが多かった。

(Fiacre)

コメントの追加 [4]: Reflection シートが Fiacre、Alice、私のしかエマちゃんのプレゼンに対してなかったから、(しかもフィア暮れとアリスの感想がなり短い) のでこうなっていました。

# 第四章

## 参加者感想

板谷美沙	日本大学経済学部 3年	94
菅野瑞翔	文京学院大学外国語学部 4年	95
篠崎紗希	千葉大学法経済学部 2年	96
柴谷直美	早稲田大学社会科学部 4年	97
島村志保子	日本大学法学部 4年	101
藤内庄司	横浜市立大学国際総合科学部 3年	103
林陸	上智大学経済学部 1年	104
丸茂思織	日本大学法学部 4年	106
水口あすか	東京女子大学現代教養学部 1年	108
安居綾香	同志社大学グローバル地域文化学部 3年	109
山崎建	早稲田大学社会科学部 2年	111
渡邊伶	早稲田大学教育学部 3年	114
<b>KAYANGE Alice</b>	ルワンダ国立大学ビジネス情報学部	118
<b>MUGEME Emmanuel</b>	ルワンダ国立大学農業経済学部	121
<b>RUTAMU Fiacre</b>	ルワンダ国立大会計学部	124
<b>KARINGANIRA Nadine</b>	ルワンダ国立大学翻訳学部	127

## 第13回本会議

日本大学経済学部3年  
板谷美沙

今回の招致では、明確に自分が成し遂げたいこと、目標が見えていた。それは、交流という点よりも準備からの過程、リーダーというポジションにある。というのもそれは前回の招致でコーディネーターを務めたものの自分が何をすべきかわからずふわふわとした状態で挑んでしまい、出来なかった、足りなかったと感じることが多く、様々な人に迷惑をかけてしまい、大変悔しい思いをし、自分の至らなさをひどく恥ずかしく思ったからである。そして、前回の招致事業後に絶対にもう一度しっかりとやり直そうと決めていたのだ。今回はコーディネーターとしてではなかったが広島企画の企画リーダーとして招致に臨むこととなった。とにかく人の上になたて企画を進めていくことをもう一度やりたかったのだ。結論から言うとやはり100%できたなんてことはなくて、失敗したなどということも、悔しいこともやはりあった。しかしながら、この招致を通じて成長出来たと思うことが2点あり、それらは私自身の自信に繋がっていくものだと思う。

まずに、リーダーとしてどう振る舞うべきか。これは、リーダーはこうあるべきだ、という答えを得たというわけではなく、あくまで自分がどういうリーダーになりたいか、という目指すべき姿を見つけられた点にあると思う。はじめは、みんなの先頭にたつてこの企画をどういう方向に進めるべきかを指し示していこうと考えていた。しかし、私の性格上、自分が企画をこうしたいからこうしてほしいと提示することが苦手であった。そんな風に迷っていた時はメンバーがそれを察してくれて色々アドバイスをくれた。そこでのアドバイスがきっかけで、私はみんながやりたいことをのびのびやれるように後ろ支えのできるリーダーになりたい、と思うようになった。メンバーみんなにとって何があったら企画がやりやすいか、わかりやすくなるか。これを考えると自分がみんなにしてあげられることが見えてきて、自主的に動けるようになったように思う。自分に合ったリーダー像でいいのだと気が付いたことは今回の招致において大きな収穫だったと思う。

もう1点は英語に対するハードルが下がった点。相変わらず英語が喋れるようになったわけではないが...英語に対するハードルが下がってきたと感じる。一年生の頃は英語を間違えたら伝わらないんじゃないかと思って喋るのを避けていたが、毎年の本会議を通して英語を喋ることを避けなくなり、むしろ喋れるようになるためにたくさん喋りたいと思うようになった。その度に上手く言えないことを悔しく感じることができ、向上心を強くさせるよい機会だと思う。英語は今回の招致だけではないが、毎年活動を通して英語を使う機会があることで英語を使うことへの恐怖心が和らいだ。それは、自身の生活にも影響があり、招致後には以前から夢であった1人海外旅行に出かけることができた。それはこの活動がなければできなかったことだなあ、と感じる。しかし、正直、今回の招致は私情によりあまり参加することができず、やらなければならないことや考えることが多く、しっかり集中して取り組めたかと言われるとすぐに頷くことはできない。どちらかという招致までの時間の方がよく集中していたように思う。最も重要な時に集中を欠いていたのは今回の反省すべき点であり、もっと自分のことと団体活動でやるべきことの切り替えができるようにならなければならないと感じさせた。来年は最後の招致活動となる。悔いの少ない招致にしたいし、学ぶこと、成長することの多い招致にしたいと思う。

## 地方企画での再発見

文京学院大学外国語学部 4年  
菅野瑞翔

私は、第13回招致事業として7月31日から8月8日の間にて、大阪、広島をルワンダ人学生と共に訪れました。私自身、大阪と広島を訪れることは初めてであり、ルワンダ人のみんなと同様に興奮していました。そんな地方企画では、新しい発見や日本人として多くのことを学びました。

今回の招致事業ではルワンダ人メンバーは関西空港に到着するとのことで、大阪でウェルカムパーティを開催しました。そこでは関西の大学生と一緒に、ルワンダ料理を作るイベントを開催しました。日本人にとってアフリカ料理を食べる機会は減多になく、ましてや作ることは初めてでした。私が一番興味を持ったこと、面白く思ったことがあります。それは味付けでした。具材の味を生かすのはもちろんのこと、あまり知られていない調味料があり、食べた瞬間に口の中に「アフリカの味」が広がりました。文面では伝わりにくいですが、日本食に食べられている私たちからすれば、味がおもしろいと感じると思います。私を感じていた「食を共にすると仲が良くなる」ということで、最終的には関西のメンバー、ルワンダ人メンバーともに食事を楽しみました。

広島企画では、終戦70周年という節目に平和祈念式典に参加することができました。戦争の歴史や原爆の歴史背景をルワンダ人と共に学びました。私たち日本人は、第二次世界大戦について学校で学ぶ機会がありますが、実際に広島を訪れ深くまで学ぶことは多くないと思います。今回そのような機会を設けることで、日本人もしっかり学びなおすことができたと思います。ルワンダ人メンバーからは積極的に質問を受けました。その内容は、なぜ日本が降伏を決めたのか、なぜ特攻隊が必要であったのかなどでした。そのような質問に答えるときに歴史背景から説明すると思います。そしてここで質問なのですが、「あなたは答えられますか？」私たちは歴史や時代背景に疎いと感じています。それは、実際に外国人に説明をする機会もなく、知識として知っているだけであるからだと思います。70周年という節目を迎えて、今改めて歴史を学びなおし、自国の過去を深く知る時だと実感しました。このように、実際に地方に行き学ぶことで、ルワンダ人はもちろんのこと、日本人にとっても大きな発見があると感じました。

最後に、自国を見つめなおし、現在社会に何が必要なのかを見直すことで、会社、教育現場や家庭といった場に還元できるのではないのでしょうか。私たち日本人は、より多くの外国人と話し合い、また日本人とも話し合う時間が必要であるとも感じます。この活動に関わっていただいた多くの方々にはそのような思いを持っていただけると私たちの活動はルワンダと日本両国にとっての発展につながると思います。ありがとうございました。

## 第13回本会議

千葉大学法政経学部2年  
篠崎紗希

今回の第13回本会議に私は団体の会計として参加しました。私は1年生のころからこの団体に参加していて今回の本会議は2回目の参加でした。前回の招致活動での話になりますが、私は学校の定期試験期間と日程が重なってしまい、ほとんど参加することができませんでした。参加できたとしても半日だけ、という日が数日あるくらいでした。また英語もほとんど話せず、ルワンダとのコミュニケーションもうまくとることもできませんでした。終わって、振り返った感想は後悔もあるけれど、明確に何をしているのかが分からなかったというものでした。日本ルワンダ学生会議における一番のビッグイベントで一年間を通して最も重要視している活動であり、私も地方の企画の一つ担当していたのにもかかわらず招致をよりよいものにするために、準備の段階、そして招致本番を迎えるまで、何をすることができたのか、何を行うべきだったのかわからず、後悔をしました。私は今回の招致には、前回以上に積極的に携わろうと思っていましたが、私の性格上、気持ちだけでは実際に行動に移すことができません。最初、会計をやってみるか、と言われた時はその責任の重さなども全く理解せず承諾の返事をした記憶がありますが、今思えば会計という役職についていたからこそ、今回の招致にきちんと関わられた様な気がしています。会計を担当してみて、体感したことはお金を見れば、活動の流れが見えるということです。各企画の企画書を隅々まで頭に入れていたわけではないのに、何日にどこへ、どのような手段で向かうか、そういったものは必ずお金が絡むわけであり、自然と会計の上に浮かんでいきます。私は、数字を扱うのが苦手ですが、計の資料作成の時は数字を扱っているという感覚はあまりありませんでした。

多くの方々に手伝ってもらいながら、どうにかこの招致を終えられたことが何よりうれしいです。ありがとうございました。

## 人と、自分と、向き合う

早稲田大学社会科学部社会科学科4年  
柴谷直美

今回の本会議、日本招致は私にとって二度目にして大学最後のものとなりました。前回は、「初めてルワンダ人と会って、ルワンダ人と一緒に楽しんで、やることをやって、ルワンダ人と日本人が根底では全然違いはないのだということを感じられてよかった。」これが一番の結論だったと正直思います。学生会議も形としてはうまくいったかもしれないけれど、もっと実のある内容ができたんじゃないかと反省したり、また、企画準備で上手くいかなかったと落ち込んだり、悔しい思いも沢山した招致でした。今回は、初めてほぼ全日程ルワンダ人と過ごすことができた分思うことも倍あったように感じます。

前回は、先輩でもあり後輩でもあるという立場の中で、甘えがどうしても多かったと思



います。企画面、英語面、私が主体的になってやろうと思えばもっとみんなの力になれたはず、それを思うとどうしても悔しさが残る招致になりました。準備段階で就職活動という人生の選択の時期、自分を見つめなおす時期とかぶったからか、そんな自分のだめさをたくさん見つけ、本当に尊敬できる先輩たち、向上心の固まりみたいなきらきらした後輩たちの「たになれない」、「対等になれない」自分を褒めて、勝手に落ち込んでいました。だからこそ今回は、自分よりも後輩たちに、後輩だけでなく皆が楽しめて、皆がルワンダとの原点を築ける会にしたい、皆が、特に英語の面で後悔が残る招致にしてほしくない、だから周りをしっかり見ようという思いでした。いや、しっかりした人になろうなろうという思いが変に自分の能力よりも先に行きすぎてしまったかもしれないです。準備段階で下見にどうしても日程の関係でいけず、企画の大半の日程・アポを他のメンバーが作ってくれていたのを見て、せめて本番では、皆のかゆいところに手が届く存在、皆を励ませる存在でいようと密かに決意していました。そんな中での今回の招致の準備から本番までの間で、正直に感じたことは、「人と、自分と向き合う」ということ、だったと思います。

個人的な話をすると、私は何かをするにあたって、できなかったこと、もっとここをこうすればよかった、ああすればよかったのかもしれないなどといった後悔の方が多いタイプの人でした。でも、それを踏まえた前向きな反省もいつも私に少なからず密かに付きまどってきていたように思います。この日本ルワンダ学生会議という不思議な団体に入ってからずっと、JRYCのメンバーが皆一人ひとり良さを持っていて、本当に尊敬できるからこそ、「じゃあわたしは何をしてみんなのためになるべきだろうか」、「皆と対等に、皆の力になることがそもそもできるのだろうか」などと常に変に自問自答を繰り返し、できる皆の、せめて力になれる人にならなければと、これまた少し変なプレッシャーをかけすぎていたように思います。なんというか、今までの私は、招致などの「この団体の活動」や「ルワンダ・日本」、そしてこの団体メンバー一人ひとりに「私」がどれだけ真正面から、素直な気持ちで向き合えるか、よりも、「この団体メンバー皆についていけない」という焦りの思いのほうに圧倒的に強かった、だからじっくりこない面や、この団体に私が居る意味などで度々迷子になってしまっていたことも多かったんだと思います。

今回の招致では、この団体に自分がいる意味、自分の将来の夢への弱点も強みも生き方も、自分の好きなことも自分が潜在的に求めていることも、その全部を改めて考え直すきっかけになりました。特に英語の面で、メンバーが、特に慣れていない後輩たちが悔しい思いを少しでもしないように、たとえしたとしても、それが前向きな向上心につながるように、私ができることは準備中でも本番中でもしようと思っていました。思いついたことをやるものの上手くいかず、またはそれができず、むしろそんなこと必要ないと思うくらいのメンバーのすごさに、空回りしていたこともしばしばあったと思います。(笑)でも自分の出来ないことを数えるだけでなく、今私がここで出来ることが必ずあるはずだから、少しでも周りを見ていようと密かにしている中、気づいたことがあります。本当に「この招致を無事に終わらせて、将来日本側のメンバー・ルワンダ側のメンバー両方がおじいちゃんおばあちゃんになっても、皆が思い出して、あの時参加できてよかったと振り返られる招致にしたい」「この、結果が見えづらい、しかし重要な活動を通して、いつかめぐりめぐってアフリカのルワンダという国と日本の真の恒常的な友好関係を築く」といった、自分を越えた「目的」を持って行動する中でしか、自分の役割なんて見えてこないんだなということ。それまでは、目的がないのに、「何かしないと」とあたふたする

のが自分だったなと思います。それが自分の最大の弱点でもありました。でも不器用な私はそうしてもがくことでしか進めなかったのかもしれませんが。また目的に向かってがんばっているうちに、そこまでのステップでいっぱいになり、目的を見失いかけることも多々ありました。でも今回最後の招致に当たって、皆と目的が一緒になれば、自然にありのまま、自分の役割も良さもきつとにじみでてくるものなんだろうなど、当たり前のようなことに改めて気づかせてもらいました。空回りをしていたかもしれないし、おそらくできなかったことのほうが多かった。それでも、皆と一緒に、猛暑の中を滝のように汗をかきながら、頭を使って足を使って沢山の人たちと出会って、笑いすぎで体力も消耗して、夜中まで作業をして倒れるように布団に入るその毎日が、あとにも先にもきつと今年の夏だけで、その中で皆と一緒にと行動した一つ一つは絶対に無駄にはならないだろうなという考えに至りました。もっとシンプルに、「好きなこと、目的として決めたことに向かって真正面から向き合う」という姿勢でいることの大切さに改めて気づくことができたことは、この体験でしか気づけない教訓でした。自分の殻を破れと背中を押してもらったような体験でした。

もう一つ、「向き合う」という観点で話をします。招致中、広島原爆資料館で、海軍の術科学校で、目に涙をためながら、真剣に展示を見、考え、平和への誓いを語るルワンダたちの姿がありました。真夏の炎天下に、大荷物や2Lの飲み水を常に持って歩きまわることによって確実に体力を消耗していく中で、「ここまで体力を消耗しているんだから、ルワンダたちは体を壊したりしてしまわないか。企画や、訪れる展示などに集中できないのではないか。」などと少なからず心配していました。しかし、体力的なつらさを乗り越えて一生懸命何でも吸収しようとしている彼らの姿に、この団体の活動の真の意味を改めて確信しました。それは、言語化するのが難しく、言語化しても胡散臭く聞こえるかもしれませんが、多分、人と人の心同士の「つなぐ」という意味、です。彼らが語っていた言葉で印象的なものがありました。「僕たちの国ルワンダは人々が殺しあった結果何人もの尊い生命が失われたジェノサイドを経験した。しかし日本も、形を変えた『核のジェノサイド』を経験した。絶対に僕たち Younger Generation たちは何ができるのか考え、平和を構築せねばならないと思う。」と。彼らは、そのことを教科書ではなく、目で見て肌で感じて学ぶことができ、当時の人たちを思うと涙が出てしまったと語っていました。私はそんな彼らを見て、「疲れているから」、「ルワンダ人だから」、わからないかもしれない、という固定観念がやっぱり自分の中に抜けていなかったことに気づいて反省しました。また彼らの学ぶことに対する姿勢に、自身も沢山学ばせていただき、平和を望む心は世界共通で分かりあえるものなのかということも改めて確信させてもらいました。

お互いがお互いの国まで「思う」という過程には、もちろん教科書や写真などの媒体も重要な役割を果たすのは間違いないし必要なことでもあると思います。しかし、それだけではなく、同じ場所、お互いの個々人が目と目を合わせて語り合っ、一緒に行動して体験してお互いとお互い「向き合っ」感じることによってしか得られないもの、つなげない心があるんだなと改めて感じ、感動を覚えたのが印象深かったです。

そして最後に、今回の招致で特に思ったことを書きます。それは、生まれ育った日本という国、ルワンダという国、JRYC のメンバー一人ひとり、今回関わってくださった人たち全ての方々への心からの感謝です。日本側、ルワンダ側含めた全ての団体メンバー、今回サポートしてくださった全ての方々との交流を通して、人のあたたかさ、知っていたと思っていたけれど本当は見えてなかった、本当の日本の良さに改めて気づかせてもらいま

した。さっきから本当にこっぴどかしい文章をよくもこんなに長く書いてきたなと思いますが(笑)、これで最後です(笑)。

去年、長期留学から帰ってきてから特に、どうしても日本のマイナス面ばかりが目について「どうして皆電車の中で嫌そうな顔をして座っているんだ」「どうして皆自分のことだけ考えて、優しさを他人にまで伝えようとしないんだ」「どうしてもっとオープンマインドにならないんだ」と、ある意味、留学中の記憶を美化しすぎていた面が強いかもしれませんが、私が生まれてから育ててもらったこの日本と日本人の人たちならではの良さ、それらに対する恩を忘れかけていたのかもしれませんが。もしくはそれらを直視しようとせず、自分のことは棚に挙げて、目に付いたマイナス面を都合のいいように考えてしまっただけかもしれません。もちろん、日本人ということだけでくっついてはいけないということも考えておくべきことでした。今年の夏、団体メンバーと一緒に日本の各地を回る中で、今まで気づけていなかった、また忘れかけていた日本の良さ、人々の優しさ、あったかさ、そんな国で暮らしていることへのありがたさ、それらをひしひしと感じる機会ばかりに恵まれました。分かっていたはずなのに、分かっていたんです。大事にしたいたくさんの方の良さに気づかせてもらいました。また変えていかなければならないところも前向きに捉えられたことは、生涯残る大きな財産でした。自分が抱く将来の夢のことも、やりたいことも、改めて深く考えるきっかけにもなり、自分を見直す機会にもなり、本当に一生に一度のすごいターニングポイントを与えていただいたなという思いでいっぱいです。

今回の本会議を通して、ルワンダという国、日本という国、JRYC のみんなと出会えて本当によかったと素直に、心から思います。この団体に入ったときは、自分がここまで皆のことを大好きになるとも思っていませんでしたし、ここまで大切な団体に思うことになるとも思ってなかったと思います。一度は、自分は何がしたいのかが分からず、団体を辞めようかとも本気で考えました。今は、本当に心からこの団体に入ってよかった、皆と今回の招致に参加できてよかったと思っています。誰一人欠けていても今回の招致にならなかったと今本気で思います。ルワンダという国、日本という国を知ることのももちろん大事な財産でしたが、これまでの活動、彼らとの交流を通して学ばせてもらったのは、「人と誠実に向き合う」という人としての根本だと思っています。心から、一人ひとりに感謝しかありません。泣きそうです。(泣きません)今回いろんなことを考えさせていただいて、「自分」と、「人」と向き合ったこの経験を通して少なからず得られた自分の答えを胸に、自分の使命に向かってとにかく行動して、学んで、たくさんの人たちとこれからも向き合っ、不器用ながらも邁進してみようと今は新たに決意しています。これまで稚拙でまともでない文章を長々と書いてしまい恐縮ですが、とにかく関わってくださった一人ひとりに心から感謝をして、この文をしめさせていただきます。本当にありがとうございました。これからも、この団体を、メンバー一人ひとりを宜しくお願い致します。

## ルワンダと日本をつ なぐこと

島村志保子  
日本大学法学部 4年



私が1年生でこの学生会議に入った時は、農村の貧困問題や、教育が受けられなくて困っている人たちに対して具体的なアクションをするべきだとの意見と、相互理解のために今の活動を続けていくべきとの意見で、団体メンバーが二つに分かれた時期でした。団体に入ったばかりの私はどちらも追えばいいと思っていましたが、そのうちに援助や支援のプロフェッショナルは学生でなくても多くいる。学生の今だからこそできる草の根の両国の多面的な理解を広めていくことが大事との意見に皆が賛同して議論が落ち着きました。それから私たちはいかに学生会議の質を上げていくか、いかに多くの日本人にルワンダ人にお互いの国を理解するかといったことに注力して活動してきました。実際4年間、相互理解に軸を置いた活動をしてみて、ルワンダだけでなく、日本の貧困や農業、歴史や生活、技術力など多くを学ぶことができました。アフリカの学生と、世界が有する格差や平和などの国際問題について話せたのもこの団体にいたからこそできたと思います。ホームグラウンドの日本であっても、文化の異なるルワンダの学生との共同生活では「友達」というだけでは乗り越えられない違いをすり合わせていく難しさや、粘り強い説明、交渉の大切さも学ぶことができました。ルワンダに限らず、多面的な情報収集の機会がなければ、ルワンダ人にとっての日本はテクノロジーの発達した先進国の一つ、日本人にとってのアフリカはライオンとシマウマがいて、飢餓と紛争にあふれた危険な地域で終わってしまうでしょう。でも彼らと会って色んな話をすると、ルワンダでも任天堂のゲームや、ソニーや東芝、トヨタの製品が売られていることがわかります。日本は東アジアの島国で、アフリカとは地理的にも遠いし、天然資源以外の貿易なんてないと思っていたことが、全く違った情報が目に入るようになりました。私は大学生活の中で一番思いを巡らせた国はルワンダでしたが、その国との交流によってヨーロッパや中東、アフリカで問題になっている難民問題を自分の国の問題も含めて考えられるようになりましたし、日本と中国、韓国との関係構築を、ルワンダから学んだことを踏まえた上で意見が言えるようにもなったと思います。大学4年になった今も私は海外経験がありませんが、欧米に留学することだけが大きな成長をもたらすのではない、と今は思っています。アフリカの貧困を解決するといった取り組みだけではなく、アフリカから学びはじめ、そこから自分の世界を広げていく道ももっと尊重されるような今後であってほしいと思います。

第13回本会議は、私にとって4回目最後の日本招致でした。これまで多くの人たちと本会議を通して出会い、それによって自分自身が少しずつ成長させてきてもらったと思います。この団体の中では年長の立場になって、年齢だけが全てではないとしても、色々次世代に引き継いでいかなければという思いも当初はありました。しかし本会議が終わって振り返ってみると、新しいメンバーから本当に刺激をもらって次へ次へと進んできた自分がいました。今まで先輩からいろいろ学ぼうと思っていた自分にとっては、自分に欠けていたものを見せてもらった気がします。この本会議を成功させるために、しっかりとみんなで準備を進めてきましたが、合宿、下見、ルワンダとの連絡のやりとり、これらすべてが私にとって大切な時間でした。今までの日本招致の中で栃木や横浜、佐賀の企画を担当してきて、最後の担当は岡山だったのですが、岡山は今までで一番好きになった場所でした。岡山、倉敷、真庭で出会ったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。日本招致で見てきた日本の様々な表情、そこで働く人たちに抱いた尊敬の心を大切にしてください。これからも歩んでいきたいと思っています。

来年の今頃私は、新社員として新しいスタートを切っているでしょう。その時に「年齢

にとられず組織に新しい風を吹かせられるような社会人になりたい」です。このように思わせてくれた日本ルワンダ学生会議のメンバーに感謝しています。私はこの4年間でたくさんの日本人に出会い、様々な学びや、笑顔をもらってきました。今度はルワンダにいるたくさんの彼らからもっとたくさんのことを学んで帰ってきたい。そして私が最後のJRYCの活動を迎えるとき、今まで私を大切にしてくれてきた日本ルワンダ学生会議に少しでも何か残したいと思います。

今までの日本招致事業でお世話になった方々に、心からの感謝を申し上げます。これからの日本ルワンダ学生会議、乞うご期待ください！



## 2015年、夏の学び

横浜市立大学国際総合科学部3年  
藤内庄司

9月中旬、ルワンダ人が日本を発ってから1ヶ月が経とうとしている。光陰矢のごとし、普段の3倍速で進んでいた彼ら/彼女らの来日を振り返った。

書くべきテーマが堂々巡りしているが、とりあえず以下の2点に関して書いてみたいと思う。

- ・ 全てに答えを求めるのは間違っているということの再認識

大学1年の冬、私は大学を休学して一人地中海の島国を拠点にヨーロッパを旅していた。何を目的にするでもなく、目指すゴールがあるわけでもなく、ただその目にしたいこと、見たいものを確実に追って生活していた。

旅に出る前は性格上、正しい答えをいかに早く出すか、という点に執着していた気がす

る。結果納得しないそれなりに適当な答えを見つけて猛進していた。けれども旅をしていた当手を振り返るともちろん楽しかったというのが一番の、そして最も純粋な感想だが、それ以上にただ答えを求めない生活の自由さに充実感を覚えていた。

今回の本会議は当時と似たような感覚に陥ったことがあった。広島では平和とはなにかを考え、岡山・東京では自らの生き方について頭をひねった。昔なら適当な答えを出して突っ走っていたことだろうが、答えが見つからないと割り切っているからこそ全力で企画に取り組むことができた。今回の本会議は今までで最も充実していたと実感しているし、今回の企画で学んだこと、感じたことは就職活動を目の前に控える私にとって非常に良い機会となったことは間違いない。

・ アフリカに対する純粋な思い

中学2年生の頃、英語の教科書にて緒方貞子さんの活動を見たのがきっかけで国際協力に関心が湧いた。英語を使って仕事ができ、人の役に立つ仕事に憧れを抱いていた当時の私にとって国際協力は輝かしい仕事で、中学生・高校生となり大学生になるまで国際協力以外に選択肢はありえなかった。そして高校生の時テレビや新聞などのメディアで取り上げられることが多い「可哀想な」アフリカ像に感化され、人の役に立ちたいという私の思いとマッチングしたことが、アフリカに思いを馳せるきっかけとなった。その後大学生となり、アフリカの現状に対して身を持って感じたいと思い、純粋に交流できる日本ルワンダ学生会議に入会した。休学中はアフリカで国際協力している人に出会ってみたい、そんな思いもあった。結局様々な理由で会いたい人には会えなかったが、それ以上に休学中に得た出会いや感覚は私の考え方に刺激を与えてくれた。

そして団体での活動、休学中のあらゆる刺激を通して私の中のアフリカに対する思いが徐々に変わっていくのを感じた。それはアフリカの人の役に立ちたいというよりも純粋にアフリカという大陸、そしてルワンダという国・人が好きだということである。そしてアフリカの人々と未来を作って行きたいという思いだ。団体の活動ではもちろん貧困や紛争などネガティブな言葉は挙がる。それはアフリカのみならず人類が抱える課題であるからである。しかし私の一番充実感は、やはりこれからルワンダはどのように発展していくか、そしてアフリカはどんな可能性を秘めているかを話しているときなのだ。

アフリカを取り巻く著しいアフリカの貧困や治安をすこしでも改善するため人生をかけるひとは私は心の底から尊敬する。ただ私は、時間がかかるかもしれないが、少し違う角度からアフリカにアプローチしたいと考えている。

以上が私個人の感想である。

最後に、私は紛いなりにもこの団体の代表として籍をおかせていただいている。代表として今回の活動にあらゆる面でご協力頂いた方々に感謝の意を表したい。まず資金協力をしてくださった、財団さま・企業さま。広島でともに企画を作ってくださった学生団体リンガフランカさん、語り部の河野さん、通訳士の畝崎さん。岡山県で私達の活動を全力で支えてくださった地域おこし協力隊の方々はじめ現地の皆さん。そして東京にて私達の知らない世界を御教示してくださった企業さんやNPOの方。またホームステイを快く受け入れてくださったメンバーのご家族の方々。また学生会議に参加してくださったOBOGを含むの方々。私達はこのような方々の御厚意の上で活動を続けさせていただいている。この事実と感謝を胸に刻み、残りの半年間の活動に全力を尽くして行く所存である。

## 無意識の壁

上智大学経済学部1年  
林 陸

「ルワンダ」。恥ずかしながら半年前までは知りもしない国だった。しかし、JRYC を知り、活動に参加させていただく中でルワンダについて知れば知る程彼らの持つ歴史、文化などに惹かれてゆく自分がいた。負の歴史から立ち直り今は成長の真っ只中、そんなルワンダを第二次世界大戦後の日本と照らし合わせて親近感を抱いたりもしたし、コミュニケーションをとるのは比較的嫌いな方ではなかった為「きっと仲良くなれる！」と根拠の無い自信に満ち溢れていた。

だが、実際はそんなに簡単ではなかった。ルワンダとの初対面の時に印象に残っていることは、彼らの肌の黒さに衝撃を受けたことだ。いわゆる「黒人」と接する機会が今まで無かったこともあり、彼らの肌の黒さに一種の恐怖を覚えてしまった。「彼らは自分とは違う」無意識のうちにルワンダと自分の間に壁を作り上げていたが、もちろんその時は自分が壁を築いていたなどとは全く思ってもいなかった。この無意識の壁の存在に気がついたのは、この壁が崩れた時だった。ある日、先輩メンバー2人と自分でルワンダと宿泊することになった。夕食を済ませて、まったりしているとふとフィアクレがゲームをしようとしてくれた。そのゲームは一言で言うと王様ゲームのようなもので、あたった人は聞かれた質問に必ず答えるか、他人の指示に必ず従うか、このどちらかを選び実際にする、というルールである。ゲームの中で今では思い出したくない程恥ずかしい出来事もあったりしたが、この晩一番盛り上がったのはふとした質問から始まった恋バナをしている時だった。恋バナをしている最中、ふと、中学や高校の修学旅行を思い出した。「ルワンダも夜になるとこんな話をして盛り上がるのだなあ」と思ったこの瞬間、至極当たり前のことだが彼らも同じ人間なのだ改めて気がつき、また、日本人もルワンダも大した違いは無いのだと感じた。

自身の都合により僅かな日程のみの参加となってしまったため思い出は決して多くは無いが、参加した日その全てが濃密なもので今回の招致に参加できて心から良かったと思う。今度は最初から壁を作らず、より楽しく、より深い学びや気づきに繋がる招致となるように自分の世界をもっと広げていきたい。最後に、僅かな日程しか参加しなかったくせに迷惑だけは人一倍おかけした、こんな生意気な後輩を手厚くサポートしてくれた先輩方、本当にありがとうございました。



人と出会い、人を育てる。

日本ルワンダ学生会議（以下：JRYC）に所属して早 4 年目。気付けば最終学年になっていた。私にとって 5 回目にして最後の本会議であった第 13 回本会議（以下：本事業）も、ルワンダメンバーが日本に到着してからというもの、風のようにあっという間に終わってしまった。私にとってこれが最後の本会議参加ということもあり、本感想が第 13 回本会議ではなく、JRYC の活動について包括的なものであることを予めご了承頂ければと思う。

2014 年 8 月、第 11 回本会議で私はルワンダに行った。私のことをよく知る団体メンバーからさえ、「まさか、しげ（注：私の団体内のニックネーム）がルワンダに行くとは思わなかった。」と、複数の人からしつこいほど何度も言われた（実はこう言われるのはあまり嬉しくなかった笑）。数年前の自分も、大学生のうちに、まさか自分がアフリカに行くことになるとは想像しなかったことだろうと思う。

高校時代に夢中になっていたのは、アニメや漫画・声優等の所謂「二次元」（今でも結構好き）。某ニコニコする動画に入り浸ることも少なくなかった。当時は、アフリカのみならず、国際事情全般に対して全くの無関心。しかし大学生になってから急にどうしたものか、ひょんなことから、日本ルワンダ学生会議という変な団体に入ることになってしまった。入団理由としては、「いまだルワンダやアフリカに対してネガティブなイメージを抱く人が多い中で（JRYC に入るまでは、私もその一人だった）、JRYC の掲げる“学生同士の対等な立場から、将来のパートナーとしての関係を築いていこう”という新しいアフリカとの関わり方に惹かれたから。」と現在では形式的に説明しているが、「なんか凄そうな人が沢山いて純粋に面白そうだったから」と、活動しているメンバーに惹かれて入団したのが正直なところである。

こんな具合に、高い志や目標も無いまま、なんとなく団体に所属してしまったからかもしれない。1、2 学年の頃は、「自分は本当にルワンダに興味があるのか」「何のために活動しているのか」「優秀な同期や先輩と比べられて（自分が勝手に比べていただけなのだが…）、自分の無力さが辛い」等の理由から、何度も退団を考えたこともあった。そこで、そんな状況を打開したく参加したのか、先述したルワンダ渡航だ。当時の私は、団体の活動には消極的（幽霊団員だった時期もある）、何をやらせても自信が無い、ルワンダやアフリカの知識も皆無…こんな酷い具合だったわけで、確かに「しげ、本当にルワンダ行くの！？（まぢビックリ!）」と皆にそう言われたのも頷ける（笑）

しかしそんな非力な私でも、メンバーや先輩から「最近、変わったね（恐らく、良い意味で…だと信じたい）。」「成長したね。」「よく喋るようになったね。（これはもはや、褒めてもらっているのか分からないが…）」と言って頂くことが最近増えた。ルワンダに渡航し多くの経験をしたことが自己成長の“きっかけ”にはなっていると考えているが、私が特にそれを感じたのは渡航事業終了後、報告会の準備を行っている過程だった。「ルワンダで様々な経験をし、自分の目で沢山のものを見た。それを多くの人に伝えたい。」…団体やルワンダに対する熱意の変化、また活動理由に対する意識の変化がその大きな理由であると考えている。（しかし、まだまだ未熟な身であることは間違いなく、今後も引き続き成長し続けていかなければならないことは重々、それはそれは本当に痛いほど承知し



ている。)

また、就職活動をする際は「アフリカを中心とした新興国に貢献したい」という思いを会社選びの軸の一つとして掲げており、結果ありがたくも、アフリカと関わりを持てる機械メーカーへの就職が決まった。JRYC に所属していなかったら、こんな思い 就活軸を抱くことは間違いなく無かったと断言できる（それならそれで、別の道があったことだろうとは思いますが）。JRYC、及びルワンダとの偶然の出会いが、私の人生選択にこれほどまでに大きな影響を与えることになろうとは、入団当初考えられなかった。…何事も、きっかけはどんな些細なことでもいいと思う。人との出会いや小さな出来事が、その人の人生を変えることが多くあると痛感している。また JRYC の OBOG は、卒業後も世界と関わることができるような仕事（敢えて有名どころを挙げるとすれば、日揮や JETRO JICA など）に就いている人が多い。ルワンダと直接的に関わることができるか否かはさて置き、この団体での経験や学びから大きな影響を受け、またそれらを生かして活躍しているのだと私は感じている。

前置きが非常に長くなってしまった。

「相互理解」という目に見えない理念。可視化することのできない活動の成果。…以前の私と同様に、この活動の意義を見出すことが容易ではないメンバーもいるかもしれない。上記の長いながい前置きの中で伝えたいことは、JRYC は間違いなく人材育成の場になっているという点である。そしてまた、私が日本ルワンダ学生会議の活動をしていたからこそ経験できた事、出会えた人の数は計り知れない。多くの人と関わり、貴重な経験をさせてもらった私のこれからの義務は、そんな出会い 経験を、ルワンダにアフリカにそして日本に還元・貢献することであると考えている。

繰り返しになるが、人との出会いや小さな出来事が、その人の人生を変えることが多くある。きっかけはどんな些細なことでもいい。そして個人的には、日本ルワンダ学生会議が、このように人を動かすきっかけを作り続ける団体であってほしいと思っている。

最後に、第 13 回本会議は勿論のこと、日頃から弊団体を支えて下さっている皆様に感謝申し上げます。誠にありがとうございます。日本ルワンダ学生会議は、時に色を変えカタチを変えることはあっても、今後も発展し続け精進して参ります。今後とも、何卒よろしくお願い致します。



## 初めまして、ルワンダン！

東京女子大学現代教養学部1年  
水口あすか

この春大学生になり、国際的な団体でかつ学生だからできることをやってみたくて漠然と思っていた私は、「相互理解」を活動理念としている「日本ルワンダ学生会議」という団体に出会った。ルワンダについては過去にジェノサイドが起きたという知識のみ。地図上の位置すら分からなかった。だが、自分にとって未知の国だからこそ「ルワンダ」という国に興味を湧いた。また、「相互理解」って言葉は分かっているつもりでいても、いざ「相互理解」と言われると、具体的にどういったことだっけ？と説明できない自分がいることに気づいた。これは入る価値があると強く感じ、迷わず所属の意を示した。

私にとって初めての招致。ルワンダの学生と約3週間も活動を共にできることにに対し、わくわくドキドキだった。「ルワンダの学生とどのような話をしよう」「私の英語力で会話できるのだろうか」様々な思いを巡らせているうちにあっという間に第13回本会議が始まった。

初め、ルワンダの学生はシャイなのかと思ったが、話しかけてみると非常にフレンドリーだった。私は大学で言語科学を専攻しているため、ルワンダがキニヤルワンダ語という独自の言語だけでなく、英語やフランス語を公用語にしていることに興味があり沢山話を聞いた。その中で最も驚いたことはルワンダではニュース番組が3つの公用語で放送されるということだ。日本は母国語である日本語の使用が明らかに多い。今後、日本に益々多くの外国人が入ってきたときにルワンダで行われている取り組みは魅力的なだけでなく有効だと思った。

ルワンダの学生と過ごす中で一番印象に残っていることは、2人のルワンダ人学生が私の家に合計3泊4日ホームステイしたことだ。一人暮らしの狭い家に対し、彼女らは「かわいい家だね」と言ってくれた。使用した布団を畳むを手伝ってくれたり、食器と一緒に洗ってくれたり申し訳ないくらいに協力的だった。また、私が自分の英語力に対して不安に思っていることを伝えると、Nadineさんが「洋楽を聞きながら一緒に歌うのが一番よ。」とおすすめの洋楽まで教えてくれた。二人とも私を妹のように可愛がってくれた。

今回の招致から私の今後の課題も明らかになった。それは、日本の政治的動きや歴史について理解し、それらを英語で伝える力を付けることだ。日本語ではなんとなく分かっているものをルワンダの学生に伝えるように英語という言語に換えることは非常に難しいと肌で感じた。実際、彼らと話す中で自分の想いや考えすらしっかりと伝わっているのかと歯がゆい思いを何度もした。この悔しさを忘れずに今後の勉強に励みたい。

また、この団体の果たす意味について自分なりの考えをより深化させたい。私が日本ルワンダ学生会議やルワンダの話をする大抵の人は「大丈夫？」と言う。初めなぜ自分が心配されるのか理解できなかった。しかし、詳しく話を聞くと多くの人が未だにルワンダに対してジェノサイドのイメージしかなかったり、アフリカ＝貧しい、治安が悪い、怖い、黒人＝怖い、よくわからないといったマイナスのイメージを多く持っていたりすることが分かった。私なりの相互理解の定義ですらまだまだ曖昧なのだが、この団体に所属しているからこそ「相互理解」という考え方について探求し続けたい。

第13回本会議を終えてまず思ったことは「次は、私がルワンダへ行く！」ということだ。百聞は一見に如かず。ルワンダの学生や、渡航経験のある先輩方の話を聞くたびに何度も実際にルワンダに行ってみたいと思った。そのためにも日本について多面的に学び、英語力もアップさせてルワンダの学生に成長した姿を見られるように春に向けてコツコツ準備を進めるつもりだ。次は春！必ずルワンダと再会する。

最後にたくさんの温かいサポートをしてくださった先輩方、本当に楽しい初の招致でした。ありがとうございました。



## 同じ想い

同志社大学グローバル地域文化学部3年  
安居綾香

私にとって今回の招致事業は3回目であった。前回は地元の京都で社会人の方々に協力していただいたが、大学の友人達やそのまた友人達にルワンダ人学生と交流してもらう機会を作ることができなかった。そこで、広島企画・岡山・東京企画に加えて大阪での交流イベントを企画させていただくことになった。半日ではあったが大阪での企画を通し、親しみやすい料理や実際にルワンダ人学生から話から、まだまだルワンダというアフリカの小さな国について知らない日本との相互理解の一步になったのではないかと考える。個人的には友人から「なぜアフリカ？なぜルワンダ？」と聞いていた友人達に「ルワンダって素敵な国だね」と言ってもらえたことがとても嬉しかった。私は本企画を通し、談笑しつつ共同作業をし、食べながら知識や想いを分かち合う、そのような時間を設けることができ、両国の小さな架け橋となれたことに喜びを覚えた。

広島企画においては大きな企画を持つことはなかったため、サポート役に徹した。前回は企画でいっぱいはいっぱいではなかなかルワンダ人と話す時間を長く持つことができなかったが、今回は長く、深くいろいろな話をできたように思う。8月6日を中心に戦後70年という節目の年に広島を訪れることができたことは、私にとって忘れがたい経験となった。以前に旅行として広島を訪れたときは異なり、被爆者の方のお話や式典、展示物、街の様子から、これからの世代としての責任をひしひしと感じた。第二次世界大戦の惨劇もちろん学んだが、それを越えて世界規模の「平和」について考える機会にもなった。8月6日、資料館を訪れた際にエマニュエルと真剣に語り合ったのを覚えている。彼は私が想像できないほどの辛い過去を抱えていた。日本ルワンダ学生会議のメンバーのほとんどはジェノサイドを知らない世代である。しかし、エマニュエルはぎりぎり経験した年齢で、

その時代が彼の人生や思い出に残っている。彼から聞いた話はとてもリアルでどれほどつらい思いをしたのか知った。だからこそ彼は、どれほど民族の隔たりをなくすことや相互理解に対するの思い入れは人一倍あるようだった。そして、言葉にはしにくい、やはり他の3人とは広島が少しリアルに見えたようだった。段々と負の記憶が薄れ去っていく現状。それをどのように残していくのか。悲劇の内容や時代はルワンダと日本で異なるものの今抱えている問題は同じである。経験していない世代にとっては、小さな頃から教えられても映画や小説の中の出来事のようにしか思えない。私自身も戦争を頭で理解していても肌で感じてはいないのである。リングフランカさんがおっしゃるように、当時の実物だけではなく、被爆者の方が遺してくださっている絵本なども後世に伝える手段なのだと考えさせられた。10年後、20年後に、あのときもっと聞いておけば良かった！と後悔しないように日本もルワンダも今から努力していかねばならない。私も子どもに広島企画で得たことや曾祖母、祖父母の経験をいつかきちんと伝えたいと思う。

今回の招致でとても嬉しいことがもう一つあった。それは、ナディーンとの再会である。彼女は第10回るときにも来日し、一緒に福島企画に参加した。そのとき、私は1年生ではじめての本会議で、ナディーンと同じ部屋で寝泊まりし、いろいろなルワンダの文化を教えてもらったことが思い出深い。お別れの日、次はルワンダで会おうと約束し、私は渡航に参加したいと考えた。しかし、そのあと、私はエボラ出血熱拡散の影響で両親に反対され、前回の渡航を諦めてしまった。もうナディーンと会えないかもしれないと諦めていたが、また日本で再会することができたのである。日本の大学には多くの国際交流サークルがあるが、日本ルワンダ学生会議が他と大きく異なるのは現地の同じサークルのメンバーと持続発展的に交流ができる点であるように思う。私も今度こそはルワンダで今まで日本に来てくれたルワンダン達に再会したい。

第13回本会議は私自身がルワンダについて、日本について、「平和」という視点から多くのことを学べた機会であった。そして、ルワンダの魅力を周囲の人々に発信することができた機会になった。最後に、お家や施設を貸してくださった方々、企画にご協力いただいた方々、心から感謝申し上げます。



## 「ルワンダ」がより身近な存在に

早稲田大学社会科学部 2 年  
山崎 建

今回の招致活動は、私にとって 2 回目の招致活動であった。前回の招致は、この団体に参加してから、わずか 2 か月後のことだったので、正直なところ、あまり詳細な部分まで理解できないまま招致活動本番を迎えた。また、企画参加中に体調を崩してしまったこともあり、あまり活動に参加することができず、悔しい思いをした。そのような背景があったこともあり、今回の招致活動には並々ならぬ思い入れがあったように思う。

私がこの団体に入ろうと決意したきっかけとなったのは、去年の夏休みにバックバックを背負って一人で訪れたカンボジアでの体験である。高校生の時から私は、世界で発生した、また現在も起こっている虐殺や紛争の起る過程やその原因について、非常に興味を持っていた。これまで世界の多くの地域で虐殺が行われてきたが、中でもカンボジアのポル・ポト政権下における無謀な社会主義改革とそれによって引き起こされた虐殺は記憶に新しいのではないだろうか。当時のカンボジア国民の三分の一が殺されるというこの悲惨な出来事が発生した背景、また現在に至るまでの歴史について、私は映画や資料を探し、調べていた。しかし、その過程で、どうしてもカンボジアでの虐殺を、他人事としてとらえている自分がいることに気付いた。自分とは関係のない遠くの世界で行われた過去の出来事としかとらえていなかったのだ。「百聞は一見に如かず」という言葉があるように、写真や映像で見たり、聞いたりするよりも、自分の目で実際に現地の様子を見てくることが、本当の意味で虐殺について知る、学ぶということだと私は思った。

実際にカンボジアで見たものに、私はただただ衝撃を受けるばかりだった。ポル・ポトの改革に対して反発した人々が反乱分子とされ送られた収容所と、実際に虐殺が行われた場「キリングフィールド」を訪れたが、犠牲になった人々の写真、拷問器具、実際に使われていた施設を見ているうちに恐怖を感じ、この地でどれだけ恐ろしい、非人道的なことが行われていたか、犠牲となった人々の立場にたって改めて感じる事ができた。案内してくれたタクシー運転手の方も、父を虐殺でなくしており、非常に辛い経験であったにもかかわらず、当時の様子を詳細に私に話してくれた。実際に自分の目で現地を見て、実際に自分の耳で現地の人の話を聞くことで、日本で文献を漁るだけではわからなかったことが鮮明になっていった。

このカンボジアでの経験が私を変えたと言っても過言ではない。現地を訪れることの大切さを実感したのだ。虐殺が行われたのはカンボジアだけではない、ナチスのホロコーストや、スターリンの反対派への粛清など、他にも数多くの虐殺行為がこれまで行われてきた。世界の数多くの虐殺を調べていくうちに、私はルワンダの虐殺のことを知った。民族間の対立が原因で、当時の国民の 10~20%の人々が虐殺されたのだ。私が一番驚いたのは、このような虐殺がわずか 21 年前に起きたにもかかわらず、今、ルワンダはアフリカで最も治安が良い国と言われているということだ。ルワンダを訪れ、自分の目で確かめたい、ルワンダ人に当時の様子を聞きたい、という思いからこの団体に入ることを決意した。ルワンダを実際に訪れたことのあるメンバーから話を聞くと、自分の知らないことばかりでとても勉強になる。ただ、やはり実際に訪れるのとそうでないのでは情報量に圧倒的に差があり、感じることも異なるだろう。そういった点で、ルワンダへの渡航を心待ちにし

ている。

この団体に所属してから、ルワンダが虐殺だけの国ではないことに気付かされた。ルワンダ特有の政治制度や、特産物など、過去のマイナスのイメージを払拭するような、良い点、日本が見習うべき点が数多く存在するのだ。

ルワンダは地理的には、日本からはるか遠くに位置するアフリカの国であるが、この団体の活動を通して、ルワンダがより身近な存在になっていくのを日々感じている。特に招致活動において、実際にルワンダ人に日本を案内し、様々な形で日本を伝え、お互いに意見の共有、交換をすることで、大げさな表現かもしれないが、私たちが日本とルワンダの懸け橋になっていると感じる。知人や自分の身の回りの人に、日本ルワンダ学生会議の活動について伝える際、活動理念や団体の位置づけを説明するのは非常に難しい。ボランティア団体なのか、と聞かれることが多々あるが、自分を含むメンバーの大半は、ボランティアという感覚をもって活動はしていないだろう。しかし、私たちが行っている活動は、広い意味でボランティアということができるのかもしれない。ルワンダ人が日本に来るために必要な費用は、彼らの国で働いて得られる年収では到底足りないのだ。彼らが日本に来ることは容易ではなく、一生に一度のチャンスであるのかもしれない。また、招致するルワンダ人メンバーはルワンダ国立大学の生徒であり、将来のルワンダを担っていく存在と言えるだろう。そのような背景をもった彼らを、日本に招致し、日本の様々な面（もちろん問題となっている面も）を実際に見てもらい、学んでもらうことは、将来のルワンダの発展に貢献できているのではないだろうか。

今回の招致活動で、私は大阪企画と広島企画に参加した。広島企画では、自分も企画を一つ担当することになった。担当企画の前日は夜遅くまでディスカッションの内容や方法を考え、直前まで変更や修正を繰り返した。相談にのってもらったメンバーには本当に感謝している。ルワンダ人メンバーにとって一番学びのある内容にしたい、と考えて構成した企画であったが、結果的には私自身も、参加した他の日本人メンバーにとっても、非常に収穫の多かった企画だったと思う。もちろん、企画を進行していく過程の中で、課題となるようなことも発見できた。次回の招致、渡航で改善していきたい。

私情で岡山・東京企画に参加できなかったことは非常に残念ではあったが、大阪・広島企画を通して、ルワンダ人メンバーとかなり距離を縮めることができ、同時に、日本人メンバー間においても、今まで以上に信頼しあえる関係を築くことができたと思っている。今回の招致活動で、より一層、ルワンダ、ルワンダ人が身近な存在になったと感じている。また、自分自身を成長させることができたと確信している。次回、彼らとルワンダで再開できることを楽しみにしている。

最後になりますが、本招致活動のために協力していただいたすべての方々にこの場を借りて心よりお礼を申し上げます。





## 「想い」を繋いでいく

早稲田大学 教育学部 3年  
渡邊 伶

人を動かす原動力とは何なのか。ふと、そんなことを考えた。

最近とあるテレビ番組を見た。困難を抱えている若者の支援をしている NPO の代表の仕事を追ったドキュメンタリーなのだが、そこで見た NPO 代表の仕事に対する姿勢に強く感銘を覚えた。その NPO はひきこもりや家庭内暴力などの問題を抱えている若者に対して、「アウトリーチ（家庭訪問）」という方法を用い、社会復帰を目指していく活動を行っている。心に傷を負っている若者を社会復帰させることは簡単なことではない。入念な準備を重ねた上での訪問。当たり前だが、最初はほとんど何も話してくれない。しかし、何回も訪問していくうちに、少しずつ趣味の話などをしてくれるようになる。その繰り返しで信頼関係を築く。そうすることで、徐々に今抱えている不安などを打ち明けてくれるようになる。

長い時間を要し、若者に対する思いやりと、優しさ、根気が必要な仕事だ。

番組内で社会復帰を果たした 24 歳の若者が紹介されていたのだが、その NPO の代表の方は、8 年間もそのような伴走を続けていたようだ。もう一つ、紹介されていたケースで、母親との関係が良くない子どもに対して、アウトリーチを行うものがあり、そこでも同様に、NPO 代表の方の行動には感銘を受けた。

その子がカードゲームに関心があると知ると、ファミレスに呼んで、一緒にカードゲームで遊ぶ。その子が家で暴れたとしても、全く怒らず、子どもに接し続ける、もし何か問題が起きてもすぐに対処できるように、その子の近くに車をとめ、夜もその車の中で宿泊する。そこまではいいのか、というぐらいに真摯に子どもと向き合う。その姿に私は純粋に尊敬の念を抱くとともに、様々な考えを巡らせた、その中で浮かんだのが冒頭の疑問である。「なぜそこまで動き回れるのか」。言ってしまうと、他人。自身の人生とは無関係である。言い方はやや乱暴だが、彼自身の将来がどうなっても、自身の人生や暮らしにはほとんど関係はないだろう。それどころか、このまま寝る間も惜しみ働こうとするならば、自身の健康すら損ねかねないし、その仕事に一生懸命取り組んだとは言え、大金を稼ぐことができるわけでもない。

この NPO 代表の方だけではない。寝る間も惜しむほど懸命に真摯に仕事に取り組んでいる社会人は多くいるであろう。学生も同様である。必死に忙しそうに様々な活動をしている人、一心不乱に一つのことのうちこむ人は私のまわりにも多くいる。なぜそこまで必死に動き回れるのか、何が彼らをそこまで動かすのか。責任感？ 楽しさ？ 日本人の国民性？ お金？

もちろん個々で異なるであろう。しかし、あえて一つの答えを出すのであれば、私は「想い」ではないかと考える。その活動にどれだけの想いがあるのか。

例えば、演劇をしているのであれば、演劇をする理由は何か。好きだからか、好きな場合どれほど好きか、将来、演劇関連に携わりたいのか、それも絶対その職業がいいのか、その理由はなぜか。100 回ぐらい「なぜその活動をするのか？」という質問をぶつけられても、揺るぎなく答えられるだけの「想い」。

想いを持ってと言いたいわけではない。想いを持っていること、寝る間も惜しむほど活動し



ていることが、偉いといっているわけではない。人にはそれぞれの生き方、大切にすることがある。私はそれを否定する気は全くない。

自分には、その「想い」があるのだろうか。あるとは思っていたが、100 回ぐらい「なぜ」を繰り返しても叶えない、揺るがない想いなのか、招致が終わり、考えた。

私は将来、人や団体をつなげる仕事をしたいと思っている。それは、人と人、企業と企業、支援を必要としている人と支援をしている人、様々な個人や団体をつなげる仕事、また、あるプロジェクト、ある目標のために、違う団体同士で連携を築いていくことも含まれる。人間は、個人で行うことには限界がある。だから企業や NPO などの組織・団体を作り活動する。そうすることで、より大きな活動ができ、社会にインパクトを与えることができる。しかし、現在ある社会問題を解決しようとした場合や、根本の仕組みを変えたい場合、どうしても一つの組織やサービスでは難しいことがある。

「教育格差」の解消に向けて活動している NPO が、手を組み、自身の団体のノウハウを共有し合えるネットワークを作る、経済的な援助をしたいと思い、その支援先を探している団体と、効果的な支援計画を立てているものの、経済的理由で実施できない団体をつなげる、困難な状況にいる子どもたちに対して、カウンセリングを行い、効果的な団体を紹介する、民間の教育塾が連携をして、受験教育から日本の教育を変えていく、これはあくまでも一例であって、可能性は無限大にある。

より多くの組織や個人が、理想の社会像を持って、それに共感する者を巻き込み、実現させていく。その先には必ず、「今よりも、もっと希望のある社会、楽しい社会」がある。その「団体をつなぐ」仕事を志したい。

その仕事をする上で必要になるのが、まさしく「相互理解」だと考えている。考え方も組織風土も、事業規模も、多くのことが違う団体を、上手く連携させて、同じ方向に導かなくてはならない。NPO でも有給職員がいる場合とそうでない場合では、活動規模もそこにかける資源も違ってくる。企業ではもっとビジネス的な要素が絡んでくるだろう。競合関係にある可能性もあり、お互いに譲れる部分も多いかもしれない。こちら側のメリットや想いを一方的に伝えても良い関係性は築けないだろう。一つ一つの組織をしっかりと見て、知り、理解し、尊重し、その上で、両者にとってメリットのある関係性を築いていく。言葉で書くよりもとても難しいことだと思う。しかし、やってみたい、挑戦してみたい、そのために足りない部分をもっと勉強したい。そして最終的には、「どんな環境で生まれても当たり前のように、希望を持って、自分の夢を叶えられる社会」を作りたい、と考えている。これが私の「想い」である。

コーディネーターを務めた際、まさしく個々の想いと団体としての成果の両立に悩んだ。メンバーに、招致に関わって良かった、と思ってもらいたい、コーディネーターとしてその環境を作りたい。一方で、活動の質も高めたく、そうすると必然的にメンバー個々の負担は大きくなり、しんどくなっていく。メンバーの満足度と活動の質、一見、トレードオフの関係に思える両者を、同時に高めていく方法はないか、と模索した。色々試したことはある。その結果どうだったのか、はメンバー自身が感じるものであるし、活動の質も他者が決めるものである。よってここでは言及を避けたい。

今回の招致は、コーディネーターという立場に甘えて、好きなように企画させていただいた。行きたかった真庭市、考えたかった「豊かさ」について（東京岡山企画）、千畝ブリッジングプロジェクトさんとの合同学生会議、どの企画もとても学びが多く、充実したものになった。ルワンダとの違いを感じることもできたし、将来の自分のこと、国のこと

を考える良い機会ともなった。（各企画に込めた想いやそこから感じたことは、各企画の報告ページをご参照ください。ここでは割愛させていただきます。）

ルワンダ人と3週間過ごす中で、文化的な違いを多く感じ、中にはこちらが戸惑うこともあった。（お風呂や食事など）その際に、その違いにどのように向きあうのか。こちらがおられるのか、ルワンダ人に対して説明して、納得してもらうのか、絶対に譲れない文化的なこととは、どうするのか、日本だから日本の文化に従うべきなのか、自国の文化を尊重すべきなのか、答えなんてない。しかし、重要なことである。その一つ一つの向きあうことこそが「相互理解」だと思う。きれいに、両者の意見をくみとった解決策は導き出せないかもしれない、日本人側がおられることが多いかもしれない。たとえそうだとしても、話してみてその違いに向きあうことは大切だと思う。

現在、欧州を中心に、移民や難民の受け入れが問題となっている。移民した人と受け入れた国の人、その間では宗教的、文化的な軋轢もある。異なる背景を持つ者同士が、同じ社会に共生する。それは簡単なことではない。欧州では労働力として、また、ドイツなどでは、第二次世界大戦の際の反省として、多くの移民を受け入れる国も多い。そのため、政治教育（別名、市民教育、シティズンシップ教育）が盛んで、異なる背景を持つ者同士、どのように共生していくのか、学ぶ機会がある。もちろん全て上手く行っているわけではないが（そもそも全てが上手く行っていたら、現在報道されているような事態にはならない）、この政治教育の考えは、まさしくこの団体が掲げる「相互理解」の意識に通じると思う。ヘイトスピーチなどが問題になり、日本でも確実に政治教育の需要は高まっているし、現に総合の時間などで行われている。しかし、様々な要因でなかなか上手くはいっていないそうではあるが、この姿勢、考えは、大事であることに間違いはない。大切なのは、考え続けること。

この団体の理念「相互理解」は今後、国際社会を生きる上で、絶対に必要になる考え方だと確信している。（個人的には、生きていく上で必要なこと。

でも忘れられがちなことだと思う。）だから、この団体に関わる人は、誇りを持って活動していただければと思う。

さて、最後になりますが、本会議実施にあたり、準備段階から当日まで、様々な方のお世話になりました。この場で改めてお礼を申し上げます。そして、団体メンバーの皆、未熟なコーディネーターと共に、最後まで走ってくれたことに感謝の気持ちしかありません。ありがとうございました。





# REPORT ABOUT HIROSHIMA PROJECT DURING 13TH CONFERENCE IN JAPAN

Kayange Alice

## 1. INTRODUCTION

My name is Kayange Alice. I'm a university student in Rwanda and also a member of JRYC. Last month in August we were in Hiroshima one of the prefectures of Japan. That was a great opportunity for us as we earned more experience or knowledge on different issues. We have been to different places there in Hiroshima such as Hiroshima peace memorial site which I can say that it's an expression of Japan's desire and genuine for everlasting peace. We have also visited the elementary school which nowadays has been transformed into a memorial site. A part from those two places we've visited also the center of Japanese marine self defense and gone to visit the school that trains future marine.

## 2. MORAL LESSONS

**\*About Hiroshima peace memorial site,**

●There's maintainance of history: in this site I realized how history is kept through various means like audios, videos and messages written on walls. And this is really a good way to prevent the coming generations from committing the same mistakes that was committed in the past cause all you see in that place, I mean the memorial site can make you understand deeply how a bad action done by one person or a group of people can destroy the lives of innocent people who are guilty of nothing.



●Another point is about the statue on the entrance of the museum: This a sign that even though the one who have been a source of that atomic bombing didn't think about the value of the people who lived there. After all that there are other people who thought about doing something

that can be a sign of reassigning value to those victims.

**\*Elementary school**

The fact that this school hasn't been rebuild make you feel how painful it really was, reading different testimonies from the survivors who were there right at moment the A-bombing took place. I remember a testimony that I read there of one young boy who was in the team of football I think and during the A-tombing he was still wearing his shoes while others were outside, he said that the fact of him being lazy saved him. For me before i couldn't imagine that there are survivors of that A-Bombing but after that visiting i could see things in a different way.



\*Apart from that we had also a talk with a survivor(MRS Kouno) an old women who was a teenager in that time of Atomic bombing and I can I say that this talk was very educative as there's a say in Kinyarwanda that states" A died old man is like a house that is burnt" this is to mean that old people have much knowledge. And from MRs Kouno I got something useful that she told us, one of us asked her how she considers America nowadays and she responds that the bad thing is not America or any other person, the bad thing is war! I found this expression as a sign of forgiveness instead of revenge or hate.

**\*About Japan self defense force**

After the Atomic bombing, Japan decided never to return in war and not to have an army but they introduced A japan self defense force that protect the security of the country. During our stay in Hiroshima we've also visited the center of that self defense force where we saw how the naval defense were practiced long ago how they used to attire the fire so that it can work as a battery of the boat and different history of the army. After visiting the center of JMSD we went to visit the school of JMSD which trains future marines who want to enter the JMSD and there's something that surprised me they showed us a house that the trainees live in, that house doesn't have doors so that they learn how to always be read to defend themselves in the case they are attacked by enemies.

**3. CONCLUSION**

In brief I can say that the stay in Hiroshima was very educative and awesome as well as other projects because I've really gained more experience from it.

THANK YOU!

## 第 13 回本会議、広島活動にて

ルワンダ国立大学ビジネス情報学部

Kayange Alice(訳：菅野瑞翔)

初めまして、ルワンダ国立大学のアリス・カヤンゲです。私たちは昨年 8 月に広島県で行われた永遠の平和を願う平和式典に参加し、またメモリアルとして残っている小学校に訪れ、多くの経験や知識を得ることができました。そして、呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）や海上自衛隊第 1 術科学校にも訪れ、今の日本やルワンダが考える海の問題についても話し合いました。

広島での経験を通して、歴史を後世に伝える手段として、音声や動画、壁に書かれたメッセージなどがあり、それらは私たちの子どもたち、またその子どもたちにまで継承し、同じ過ちを繰り返さない良い手段であると感じました。メモリアル小学校では、原子爆弾に破壊された当時の姿が残っていることにとても衝撃を受けました。また、生存者の話を聞き、当時の悲惨な状況を想像することは、容易ではありませんでした。語り部さんの話を聞くこともできました。とても貴重な経験ができ、こういった活動をなされている世代の方々がいなくなりつつあるということは悲しいことであると感じました。また私たちからの「アメリカ兵についてどう感じているか」という質問に対し、「アメリカ兵が憎いのではなく、戦争自体が許しがたいことである」と答えていた姿に感銘を受けました。

海上自衛隊第 1 術科学校にて、私は日本の自衛隊について学びました。終戦後の日本は、戦争に加担する武力を排除し、自衛としての部隊を導入しました。その学校では、海上自衛隊について学び、驚いたことに、そこにある建物ではドアがなく、常に敵からの攻撃に備えどのように自衛をするのかを考える工夫がなされていました。

最後に、広島での経験はこれほど多くの知識を得ることができ、とても充実した経験でありました。ありがとうございました。

## Thirteen conferences in Japan.

MUGEME Emmanuel

In this conference, we had a number of projects to undertake which included the following:

Tokyo Prefecture  
Hiroshima Prefecture  
Okayama

## Tokyo Prefecture

We visited Hiroshima Prefecture, Okayama Prefecture, and Tokyo Prefecture.

In Hiroshima Prefecture, “safety of the sea” and “Inheritance of negative legacies”. In “safety of the sea”, we went to the first Marine Self Defense Force technical school and learn about thorough history and reports of the old navy. And we were so surprised to know and see the mighty strength and weapons of Japanese navy at the time, however, more importantly we understood how Japan has managed to rebuild its peace and secure legacy thereafter.

In “Inheritance of negative legacies”

we also went to Hiroshima Peace Memorial Museum and talked to people who received suffering (hibakusha) at the time and have been part of current status quo of Japan after 70 years since end of World War II. This project had biggest impact on me and the fellow Rwandans, with tears in our eyes, we couldn't stand hearing hibakusha speaking, and it felt like we were at the scene. This installed the spirit of advocacy against nuclear atomic bomb and the usage of weapon of mass distraction. As I write this report, it is worth mentioning that based on this project, cultivated in me a need to be part of peace activist not only in Rwanda but also in whole world.

Members of JRYC „HIROSHIMA land of peace“

In Tokyo, Okayama prefecture, we studied about “**Harmful Influences of Development and Ways of Living/ Lifestyle**”. Since end of world war II, Japan has developed economically and Japanese have made a fortune. But come to know that Japanese do suffer from mental diseases such as karawoshi which culminate some overworking employees to commit train led suicide. We mentioned a number of proposed remedies to alleviate such a tragedy.

Such as government intervention and company law amendment in mutual favor of both employees and employers etc.

On this project, it is important to acknowledge that the presentation from Mrs Aiko Umehara the senior manager in public relation Department at Pasona Group Inc. And her take on amalgam of issues to do with labour and robot technology was of a tremendous concern and education to me and the group of JRYC as whole.

While at Pasona Group Inc.

In Okayama, we went to Maniwa City which try to make its own energy and have rich nature and green nature. In Maniwa City, we talked to citizen in Maniwa City and stayed with local people's house. In this way, we saw and compared living styles in the city and in the local area from which we developed our mutual understanding of both countries Rwanda and Japan. We discussed thing to do with capitalism vs. socialism and visited wood processing industry.

While in Maniwa city.

Sit seeing of wood processing industry in Maniwa city.

**Question and answer (Q&A) SESSION**

**Some interviewers asked me a number of questions of which I would like to share you.**

**1) What was the most interesting thing you saw in Japan?**

Is the mighty technology of Japan?

- 2) What did you learn from Japan?
- 3) What are your take on coming to Japan? etc.

#### **Conclusion and recommendation.**

To the best of my understanding the following were the main objectives of the 13th conference and have been achieved to level we never expected 100% but more importantly continued support of all sorts to the long lasting Japan Rwanda youth cooperation is highly recommended because, the sustainability of socio-economic and political mighty strength of Japan and overwhelming thirsty of growth and development of Rwanda are bold mark of my recommendation as a global citizen but also the 13th conference representative on Rwandan side.

#### **Purposes**

1 By introducing each society and culture, we will deepen the understandings of both countries. At the same time, this means that we, Rwandan Students and Japanese students, will re-recognize our own countries and make our understandings about our own country much deeper.

2 Through staying together for about 20 days, we will cultivate our friendship, and build a reliable, honest, and cooperative relationship between Rwandan students and Japanese students. Furthermore we will make this the first step for the further mutual understanding.

3 Through thinking deeply about each country's problem embedding in each society, we will put seeds for increasing the number of people who can think of others (empathize others), take actions, and take responsibility of those actions.

4 By working in the conferences and staying together with each student who has different cultural and historical background and perspective, we will gain the open minds to understand and respect other cultures.

5 By holding events for Japanese people and high school students, it can be achieved to foster the mutual understandings about Rwanda among a variety of Japanese people.

6 By making the official documents and the documentary videos, and by holding events to let people know what we did after all of our projects finish, we will inspire more and more Japanese people to understand Rwanda. Plus, JRYC Rwandan members also do the same things in Rwanda (Publishing documents, making documentary videos, and holding events to let people know what we did in this 13th conference) to inspire many people in Rwanda to understand Japan.

And finally, the under signed MUGEMA Emmanuel the representative of 13th conference on Rwandan side do hereby witness that all above pre-conference objectives have been achieved and I submit this report as summarized copy of JRYC 13th activities for both reading, Clues-fetching and JRYC-archive purposes.

## 第 13 回本会議

ルワンダ国立大学農業経済学部  
MUGEME Emmanuel (訳：山崎 建)



私たちは13回本会議で、東京都、広島県、岡山県、大阪府を訪れた。

広島県では、「海の安全と自国防衛」と「負の歴史の継承」をテーマに活動した。

「海の安全と自国防衛」の企画では、海上自衛隊第一術科学校を訪れ、旧日本海軍の歴史について学んだ。当時の日本海軍が、非常に強力な武器や戦艦を保有していたことに驚いた。しかし、最も重要なのは、戦後、日本がどのように復興し、平和と安全を現在に至るまで引き継いできたのか、ということを理解できたことである。

「負の歴史の継承」の企画では、広島平和記念資料館を訪れ、また、被爆者の方とお会いし、原爆投下当時の広島の様子、戦後70年を迎える日本の現状について話を聞くことができた。この体験は、私を含むルワンダ人メンバーにとって最も衝撃的であり、涙をこらえることができなかった。被爆者の方のお話を聞くのは非常に辛く、私たちは、まるで被爆した当時の広島にいるような気持になった。今回の経験が、核兵器及び大量破壊兵器の使用に反対という私の信念を確固たるものにしたと確信している。

東京都、岡山県では、「発展による弊害」と「生き方、生活様式」について学んだ。第二次世界大戦後、日本経済は発展し、日本人は富を成した。しかし、私は、現在多くの日本人が過労死していることや、うつ病によって自殺していることを知った。私たちは現在の日本のこの状況を改善するための解決策について話し合った。(政府の介入や、会社内の社内規則の改定により、雇用者と被雇用者の関係改善を目指す等)

東京都での、株式会社パナソニックグループ広報部の梅原アイコさんによるプレゼンテーションは私たちに非常に意義のあるものになった。梅原さんには、アマルガム(水銀と他金属との合金)を扱う労働の問題とロボット技術についてお話していただいた。非常に重要な話題で、私を含むJRYCメンバー全員が多くのことを学ぶことができた。

岡山県では、私たちは真庭市を訪れた。真庭市は、市民が生活するために利用するエネルギーを市が作っており、また、広大な自然を有している。私たちは、真庭市民の方々とお話しさせていただき、市民の方々の家に宿泊させていただいた。この体験から、私たちは、田舎での生活様式と都市部での生活様式を実際に比較し、また、日本、ルワンダ両国の相互理解をより発展させることができた。他にも、資本主義と社会主義についてディスカッションを行い、真庭市内の木材加工会社を訪問した。

私が理解した限りでは、13回本会議の目標は私たちの予想をはるかに超えるほど100%達成することができた。しかし、最もなことだが、日本ルワンダ学生会議の活動を続けていくためには継続的なサポートが必要となってくるだろう。日本が社会的、経済的に強大な力を持続的に持っていること、そしてルワンダが圧倒的に成長を成長と発展を望んでいることは世界市民として、そして第13回本会議ルワンダ側代表として殊更強調したい。

## JRYC 13TH CONFERENCE REFLECTION ON ALL PROJECTS

FIACRE RUTAMU

My name is FIACRE RUTAMU, a student at university of Rwanda and member of Japan Rwanda youth cooperation. Last month I participated in 13th conference of JRYC which was held in Japan from 31st July to 21st August 2015.

First of all I want to thank JRYC Japanese members for preparing a good

conference, it was really well organized from the beginning to the end. I learned a lot from that conference and it is a good experience to me, I will always have good memories from Japan.

During 13th conference we had four projects: Osaka project, Hiroshima project, Okayama project and Tokyo project. All the four projects were interesting and educative.

Starting on the Osaka project, the most interesting thing was how we tried to cook Rwandan food. It was the first time for me to cook but I tried. We cooked matoke (bananas) and mushikake (a kind of barbecue) but it was in Rwandan style. After that we had a chance to tell Japanese more about Rwanda and some cultural exchange. After that we had a sightseeing like Osaka castle and the night view.

The second project was Hiroshima which was the biggest project for me because it was where we had many interesting events like the visits to Itsukushima shrine, Yamato museum, Hiroshima memorial museum and park, Japanese military self-defence force, etc... but the most interesting part in Hiroshima for me was the ceremony of 70th anniversary of atomic bombing.

In Rwanda and in many parts of the world when you say Hiroshima people understand the atomic bombing because everyone knows the history of the two world wars. To me and other Rwandans understand well what happened in Hiroshima seventy years ago because we also had Genocide and the history and the consequences are almost the same.

Speaking on the ceremony, it was a great opportunity and honor to attend it because I came to understand well what happened and the meaning of peace hence its importance in the whole world. I also had a chance to see the UN secretary general, Ban Ki-moon, the Japanese prime minister and leaders from all over the world. The Hiroshima project was really big and interesting but the ceremony was the most part that I liked in Hiroshima.

The next project was in Okayama prefecture which is in the east of Japan. In that project we had many events like the visit to Mamiya city which is the countryside, the visit to Meiken which is a factory that produces woods which give biogas to the population of Mamiya city. We also went to Mamiya city hall to get more details about that city, and there we had a privilege to have a lunch with the mayor of Mamiya city, and finally we went to see the Satoyama capitalism of Mr. Akagi who also produces woods from timber.

Okayama project was also big but I was excited to see how people from the countryside live, which is totally different from people who live in the big cities like Osaka and Tokyo. The most interesting thing that I saw in that project, was how the people from Mamiya city welcomed us. They are really good people with a big heart, they cared a lot about us and we had a dinner with them, we really felt like home! I will never forget that night.

The last project was in Tokyo. I really wanted to go to Tokyo as one of the biggest cities in the world and everything was new to me compared to other prefectures, like tall buildings, and I was surprised by how the city is very crowded especially in the train stations.

In Tokyo project we had a visit to one of the biggest companies in Japan called PASONA which offers services like training to workers and services related to human resources. From there we had a chance to talk with one of the senior managers who explained us how the company is working. But before visiting

person we had presentation with people from a NPO who told us about the problem of over work(KAROSHI)which is a big problem in Japan especially in TOKYO which results into suicide, depression and other bad working conditions but workers from person work in good conditions.

In that project I learned the difference between living in big cities and living in countryside like Mamiya, it is totally different. People from Tokyo are always busy with work, there is no time to rest but people from countryside sometimes have time to rest and get together.in Tokyo we also had many presentations from different JRYC members on both sides, JAPAN and RWANDA.I learned a lot from those presentations, they were very interesting and educative as I got to know many new things I did not before.

IN conclusion, I think coming to japan is a big opportunity to many Rwandans because we learn many things as JAPAN is a developed country ,therefore we learn how we can develop also our country.ARIGATO GOZAIMASU!!!

## 第 13 回本会議におけるすべての活動における感想

ルワンダ国立大会計学部  
RUTAMU Fiacre(訳：菅野瑞翔)

みなさんこんにちは、私の名前はフィアクレです。ルワンダ国立大学における日本ルワンダ学生会議の一メンバーです。7 月から 8 月にかけて行われた第 13 回本会議に参加しました。

まず最初に、すべての日本人メンバーに言いたいことがあります。素晴らしいプログラムを用意していただき本当にありがとうございます。すべての活動にて忘れられない経験をする事ができました。

さて、第 13 回本会議では、大阪、広島、岡山そして東京を訪れました。すべての滞在地におけるプログラムは興味深く、そして多くのことを学びました。大阪企画では、マトケと蒸しカキというルワンダ料理を関東の学生と一緒に作りました。私にとってルワンダ料理を作ることは初めてでしたが、みんなと協力をして美味しく作り上げることができました。そして、大阪城を見学や夜の大阪の街を探索し、道頓堀ではネオンの光がとても印象的でした。

広島企画では、厳島神社、大和ミュージアム、平和記念公園、海上自衛隊の学校を訪れました。また終戦 70 周年ということもあり、式典にも参加することができました。ルワンダでは第二次世界大戦についてよく知っている国民が多いです。それは、ルワンダではジェノサイドが起きそれらに対する因果関係が似ているからです。式典では日本の内閣総理大臣である安倍首相、国際連合事務総長であるパン・ギムンさんのスピーチも聞いて大変光栄でした。

岡山企画では、田舎地方である真庭市を訪れ、銘建工業を見学しました。真庭市ホールに行き真庭市について学び、真庭市長と昼食を取るなど楽しく過ごすことができました。同企画では、地方に住む人々の暮らしについて理解することができ、大阪や東京と全く異なることが興味深い内容でした。真庭市の人々はとても温かく迎えてくださり、また夕食

も一緒に食べ素敵な時間を過ごしました。

東京企画では何もかもが新しく私にとって東京は本当に訪れたい場所でもありました。パソナと呼ばれる職業訓練のサービスを提供している企業に訪れ、そこでは過労死などの東京における働く問題についてプレゼンテーションをしていただき、働く環境問題について深く知ることができました。学生会議では多くのテーマで日本人メンバーと討議をし、意見交換をすることができました。

最後に、日本に来ることは私たちルワンダ人にとって大きな機会でもあります。日本に訪れ多くのことを学べたことは、これから大事にしていきたいです。ありがとうございました。

## **My great experience in Japan during the JRYC's 13<sup>th</sup> conference**

Nadine KARINGANIRE

My name is Nadine KARINGANIRE, a Rwandan University student and member of Japan Rwanda Youth Cooperation. Last summer I was lucky enough to participate in the 13<sup>th</sup> conference of JRYC which was held in Japan from 31<sup>st</sup> July to 21<sup>st</sup> August 2015. During our stay in Japan, we covered four projects namely Osaka, Okayama, Hiroshima, and Tokyo. I'm going to talk about all the four just in few words so as for you to know much better what our activities are.

The main philosophy of JRYC is "mutual understanding" between both countries, which is done through cultural exchange, students discussions, study tours and each of these is as important as the other.

In Osaka, we had a cultural event in which Japanese students experienced Rwandan cooking and it was as fun as it could be. I think this event was very important because Japanese students had the chance to learn and taste Rwandan cuisine (part of culture). So as to better understand why people behave like they do, you must know their culture. Spending time with Japanese students while cooking was the best opportunity for all of us to know and better understand our different cultures.

In Hiroshima, we visited many historical places like Itsukushima shrine, Yamato museum, Japan Maritime Self Defense Force, the peace memorial park, and the Hiroshima Peace Memorial museum. Visiting all these places was important because at Itsukushima shrine I got the chance to see with my eyes one of the world's heritage, and in Yamato Museum which was actually named after the Yamato battleship served during WW2. The museum is located in Kure, which was at that time a shipbuilding port. I learned also about the Kure shipbuilding technology and the history of the Yamato ship. We visited also the JMSDF where we learned about the "safety of the sea" and discussed about security issues of both Rwanda and Japan.

On 6<sup>th</sup> August I got the opportunity to attend the Hiroshima Peace Memorial

Ceremony and participated in the protesting against the world of nuclear bomb. After the event, we visited an elementary school in which I could see some of the atomic bomb victim's messages written on the wall, and we visited as well the Hiroshima Peace Memorial Museum where I got the whole image of what happened when the atomic bomb was thrown on Hiroshima. I saw photographs of victims, read their messages and I could feel what they went through. We had the chance to hear the voice of one of the victims of atomic bomb, Ms. Kouno, who decided to contribute to peace building through telling young people what she saw.

Listening to Ms. Kouno's testimony was very important because it helped me understand much better and picture what really happened. Her voice brought together all images and messages I had read and made me realize all bad effects of atomic bomb.

Hiroshima project was the most interesting for me because I learned about how Hiroshima was completely destroyed after the bombing, and only after 10 years it was gradually recovered. This inspired me a lot as Rwandan, because our country also was once completely destroyed and we have recovered as well. I felt the responsibility also of supporting the nuclear free world policy.

In Okayama prefecture, we had wonderful times with people of Maniwa city and enjoyed staying with them, we visited the "Meiken industrial company" which is a factory doing wood biomass. Their work consists of balancing the nature and how people make use of it. Maniwa city is a beautiful green place because they keep their environment safe. We learned how the Meiken factory produces electricity and structural timber and it was quite interesting because it is something Rwandan can learn from them. After the factory, we studied about "small satoyama capitalism" done by Mr. Akagi, which consist of having the spirit of looking for a sustainable life more than the spirit of looking for more money. For a developed country like Japan, the satoyama capitalism is a good way of living a better life but for Rwanda, I don't think so.

In Tokyo, we learned about "negative points caused by development". This project was also very interesting because we discussed about labour issues mainly in Tokyo where people are dying due to over-work (karoshi). It was so sad realizing the perspective of Japan that prior the economic growth more than the human good life. Japan is a developed country, which means that Japanese should be living the best life ever; but it's not the case because people are committing suicides due to over-work.

In summary, I was quite impressed by the Japanese hospitality "Omotenashi", how Japanese people are very kind and welcoming. That was my experience in Japan which I hope to be useful to me in my future life.



Thank you !

## 13 回本会議での素晴らしい経験を得て

ルワンダ国立大学翻訳学部  
KARINGANIRA Nadine (菅野瑞翔)

今回私たちは、7月31日から8月21日までに大阪府、岡山県、広島県、東京都の4つの都道府県を訪れました。そこで経験して得たことを述べたいと思います。

私たち日本ルワンダ学生会議の理念は「相互理解」であります。文化交流や学生同士での討議、スタディーツアーなどの活動を通してその相互理解を行います。大阪ではウェルカムパーティーとして関西の学生たちとルワンダの家庭料理を作りました。そこでの学生たちは、ルワンダの料理と一緒に作ることで互いの文化を知る良いきっかけになったのではないかと感じました。広島では、世界文化遺産でもある厳島神社、大和ミュージアム、海上自衛隊第1術科学校、平和記念公園、広島平和記念会館を訪れました。厳島神社にある鳥居はとても壮大で、世界文化遺産を自分の目で見ることができ、大変感動しました。呉市にある大和ミュージアムでは、戦艦大和の歴史や戦艦を作っていた日本の技術について学びました。海上自衛隊第1術科学校では海上自衛隊について学び、日本とルワンダの海の安全について討議を行いました。また、8月6日の終戦70年記念という節目に式典に参加でき、原子爆弾の脅威や第二次世界大戦と日本の降伏について学びました。被爆者である語り部さんの話を通して、広島に投下された原子爆弾の威力は想像を絶するものだと知り、悲しみを抑えることができませんでした。広島での経験は得るものが多く、原爆が落とされた10年後には街並みも綺麗になったことに驚きました。原子力を扱うことはこれからより大きな責任を伴うと感じています。岡山では、真庭市のみなさまにはとても暖かい歓迎を受け、大変楽しく滞在することができました。銘建工業を見学し、木質バイオマスについて学びました。私は真庭市がいかんして緑のある環境を保ち、自然と共存しているのかを理解できました。そして、里山資本主義について学び、テクノロジーなどが発展している日本で、いわゆる田舎で暮らすことで豊かさを学ぶということに興味を持ちました。東京では、「発展がもたらす弊害」という議題で討議を行いました。そこでは東京で働く問題について話し合い、過労死などについても熱く話し合いました。日本のように発展している国でそのような問題が起こっていることはとても悲しいことだと感じました。人間がより快適に生きるために発展したというのに、死を招くことに繋がることは許せないと感じました。

そして最後に、日本に来て様々なところで「おもてなし」を感じることができました。日本がどのくらい温かく素晴らしい国だということをみんなにも伝えたいです。ありがとうございました。

メディア掲載  
MEDIA COVERAGE

2015年8月26日付 alternas より

[あそぶ](#) > [でかける](#) > 2020年東京五輪後の「東京」 日本とルワンダ学生が討論

あそぶ

## 2020年東京五輪後の「東京」 日本とルワンダ学生が討論

2015年8月26日 10:10 AM [あそぶ--でかける](#)

 ツイート 1  0  いいね! 41

アフリカ大陸の中央に位置するルワンダ。日本から1万キロ以上離れたこの地に2015年の夏、7月下旬から8月中旬までの約3週間、4人の留学生が来日した。2009年から年に2回、ルワンダと日本で行われている本会議を軸に活動する日本ルワンダ学生会議。その活動の一部をのぞかせてもらった。（早稲田大学高野ゼミ支局=大間 千奈美・早稲田大学教育学部社会科社会科学専修2年）



日本ルワンダ学生会議の様子



日本ルワンダ学生会議では年に2回の本会議を通して、日本とルワンダの学生が共同生活をしながら、各地でフィールドワークや学生会議、一般市民を巻き込んだ交流イベントなどを行うことで両国の草の根レベルの相互理解を促進している。

第13回目となる今回は日本が戦後70年を迎える節目の年。そして日本の戦後復興を世界にアピールすることになった1964年の東京オリンピックから51年が経つ。ルワンダでは大虐殺が起きてから21年目。負の歴史を継承しつつも、現在は急激な経済成長下にあるルワンダにとって戦後の復興を遂げた日本は1つのロールモデルにもなり得る。

これからの東京はなにを目指しているのか。2020年に開かれる東京オリンピックを前にルワンダから来た留学生4人、日本人学生8人とともに、東京オリンピック・パラリンピックの推進本部事務局の内閣参事官補佐である西村二郎さんからお話を伺った。



途上国での経験を話した西村さん

西村さん自身、東京オリンピックに関わる前は30年以上外務省に勤務していた。その間ドイツやスイス、韓国など海外にも長く滞在していたが、ジンバブエのハラレで2年勤務したのが途上国では唯一だったという。「初めてだったけれどハラレでの生活はとても面白かった」とルワンダの学生に語りかけていた。

■ 課題は着さ対策

7月24日～8月9日までが開催予定とされる2020年東京オリンピック。今年も過去最長となる8日間の猛暑日が続いたが、気になるのはやはり暑さ対策だ。

ルワンダ、ないしはアフリカと聞いて暑いというイメージが先行してしまっていた。しかしルワンダの学生から聞いたのが「東京は暑すぎる、、、」という言葉。赤道直下にもかかわらず標高の高さから平均最高気温も30°前後ということだった。

都市部特有のヒートアイランド現象で、東京のアスファルトの温度は60°以上になることも。特にマラソンで使われる舗装道路の路面温度の上昇を抑えるための対策が必要とされる。そこで本部が挙げているのが地表のアスファルト材の隙間に保水材を入れ、雨や打ち水で表面に蓄えられた水が太陽光で蒸発し地表の温度を下げるという対策。また、アスファルトの表面に遮熱材を敷くことで熱をため込まずに反射するという策もあげられている。試験的に舗装された道路では5～12°もの温度低下に成功したのだそう。

ルワンダの学生も印象に残ったこととしてこの対策をあげていた。気候を調整することはできないが体感温度を調整するために室外でも暑さ対策をするという発想に驚いていたようだった。



ガイドラインの標準化が求められる

ルワンダの学生が日本で生活をしていて不便に思うことの1つとして言葉の壁がある。会話の面ではもちろん。駅構内においても表示が何を指すのかわからないのだ。さまざまなガイドラインの多言語化が進んではいるものの翻訳の標準化が進んでいない現状がある。

例えばJR新宿南口。同じ改札を示すはずの表札がNew South Exitと表示されるところもあればShin South Gate、さらにはShin Minami Entrance と表示されるところも。英訳の標準化がなされなければ新たに建設される建物、標識についても混乱を呼ぶ恐れがある。「どこを歩くにも通訳してくれる人がいればいいのに」と話すルワンダの学生。その言葉からも言葉の壁が海外からやってくる人の行動を制していることが伝わった。

■「ダイバーシティを重視」これからの東京の姿とは

東京でオリンピックが開催されるのは2回目となる。2回以上オリンピックの開催地に選ばれた都市は東京が初めてではない。しかしオリンピックとパラリンピックが同時開催されてから2回目の招致となるのは東京が初めてだ。初の2回目の招致で東京はどのようなパラリンピックを実現させるのか、世界も注目している。施設の使いやすさや移動手段などのハード面だけでなく、多様性を自然に受け入れられるような“おもてなし”をどのように実現していくか、これからの東京が目指すものはなんだろう。



日本ルワンダ学生会議のメンバーと西村さん(中央上)

様々なチャンスと人との出会いがある大都市東京は、一方で多くの問題を抱えている。戦後から急速な経済復興を果たした東京はルワンダのロールモデルにもなるかもしれない。しかし経済成長だけが本当の豊かさなのか。ルワンダと東京、両国の学生がディスカッションを通じて話し合う課題には1つの答えが出るものではないし、導く先の結論もない。一人一人が「自分はどのように生きていくか」と考えるとき、国境も何もないと感じた。

## 後援・助成団体様・ご協力頂いた方々

### SUPPORTERS

日本ルワンダ学生会議 第13回本会議は、多くの方々のご協力あって成し遂げることができました。関わって下さった全ての方々に感謝致します。今後とも日本ルワンダ学生会議の活動を見守って頂けましたら幸いです。

#### 後援

- ・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)
- ・ルワンダ国立大学 (National University of Rwanda)
- ・アフリカ平和再建委員会 (ARC)

#### 助成団体様

- ・国際交流基金
- ・双日国際交流財団
- ・三菱UFJ国際財団
- ・早稲田大学学生生活課
- ・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

#### ご協力いただいた団体・個人の皆様 (敬称略・順不同)

- ・在ルワンダ日本大使館
- ・駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・日本ルワンダ学生会議顧問 小峯茂嗣
- ・ワタミ株式会社
- ・真庭市総合政策部 福井学、吉永忠洋、宮本隆志
- ・真庭市市長 太田昇
- ・真庭市地域おこし協力隊 松尾敏正、姜侖秀、伊藤めぐみ 他皆様
- ・銘建工業株式会社 安東真吾、森田聖
- ・一般社団法人真庭観光連盟 森脇由恵、赤木直人
- ・津黒いきものふれあいの里
- ・学生団体リングフランカ
- ・河野キヨ美氏
- ・広島観光ボランティアガイド
- ・内閣官房 東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会 推進事務局 内閣参事官補佐 西村二郎
- ・特定非営利活動法人 POSSE
- ・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認プロジェクト 千畝ブリッジング

プロジェクト  
株式会社バナナ  
企画参加者の皆様

誠にありがとうございました。

## おわりに

過去・現在・未来としっかり向き合うこと。これは私達が今回の本会議で学んだ最も大切なことかもしれない。70年前に世界で唯一原子爆弾が落とされた日本と21年前のジェノサイドによって100万人の犠牲者を生んだルワンダ。お互い悲慘な「過去」を持つ国の若者が一同に会した。様々な土地に足を運び、五感を以って自然、歴史、人の声に触れるなかで「現在」の日本・ルワンダを語り合った。そして自分たちの国の行方や自分自身の所在を確認し、「未来」に向けてどのように生きていきたいか、生きていくべきかをじっくり考えることができた。参加したメンバーの各々が、過去を忘れず今を生きること、そしていかなる形にせよ過去を未来へと継承していくことの大切さを実感したという点で今回の企画とその学びは一生の宝になったことは間違いない。

特にルワンダメンバーにとって、今回の来日は驚きと発見、そして学びに満ち溢れた機会になったと確信している。テクノロジーだけではない日本、原爆・原発だけではない日本を、身を持って学んでくれたに違いない。ある意味で今回の本会議では彼ら/彼女らの抱く日本への偏見を打破し、日本という国の現実と新たな見方を提供できたであろう。

最後に、今回日本ルワンダ学生会議第13回本会議を実現するために多くの方々にあらゆるサポートをして頂いた。資金面でご協力いただいた財団さま、企業さま。各都市にて惜しみない厚意でご協力いただいた企業の方や現地の方々。そして、日々私達の活動を見守ってくださる WAVOC やご家族の方々。この場を借りて心より感謝の意を表したいと思う。

日本ルワンダ学生会議  
横浜市立大学国際総合科学部3年  
藤内 庄司



ありがとう  
**Murakoze!**

日本ルワンダ学生会議 第13回本会議活動報告書

2015年10月31日 第初版発行

発行先 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 公認  
日本ルワンダ学生会議

編集 水口あすか

連絡先 [japan.rwanda@gmail.com](mailto:japan.rwanda@gmail.com)

